知事海軍中將サヴォイコは直に軍港の防禦工事に着手す。サヴォイコは西紀一八五〇年以來此職にあり就任の初先築港に盡力し次で農事に通ずるものを聘して地方の農業牧畜を振起す資性忠直學識及び膽略あり。故に援兵の來着しし時は恰も砲臺築造中なりしとぞ。抑もペトロパフロフスクはアヴチヤ灣内の小灣に位しその西に方り北より南に突出せる半島の中央部に向て殆んど之と直角に本土より突出せる海嘴あり故に内灣に入らんと欲すれば唯半島と海嘴との間なる狹き水路に依るの外なし。半島の中央部以南に於ける丘陵をシグナル丘と稱し同一の方向を取りて其北方に接續せるをニコルスキー丘と稱す。丘の北に湖水あり。本土には又此兩丘と併行してクラスニー・ヤル(紅崖)と稱する長丘あり。ペトロパフロフスクの市街はニコルスキー丘とクラスニー・ヤルの中間にありて灣の北端に位す。砲臺は七箇處に築造せられ第一砲臺はシグナル丘の極端にあり第二砲臺は海嘴の頸部にあり左右相竝びて港口を扼す。第三砲臺は半島の中央部にあり第四砲臺はクラスニー・ヤルの南端にあり第六砲臺は湖畔にあり第七砲臺はニコルスキー丘の北端にあり。大砲の數總計三十九門に過ぎず。四十四門の大砲を有する軍艦アウロラ號と二十一門の大砲を備ふる運送船ドキーナ號は海嘴の傍に碇泊して内灣の通路を固む。ムラウイヨフの派遣せる援兵を併せ守備兵凡そ一千人敵兵もし上陸せんとせば三斤の野砲を一枝隊に付して之を擊退せんとす。

ペトロパフロフスク攻擊の命令を受けたる英佛聯合艦隊は英艦にありては五十二門砲プレシデント號、四十四門砲ピーク號、二十四門砲アムフィトリット號、六門砲汽船ウイラゴー丸の四隻にして、佛艦にありては六十門砲ラ・フォルト號二十二門砲ウーリヂス號、十八門砲ヲ・ブリガド號の三隻なり。故に全艦隊にて二百三十六門の大砲を有す。是より先數月前中將プライスはプレシデント號に中將フェヴリエー・デボァントはラ・フォルト號に乘じて共に南米秘露のカリャヲー港にあり。西紀一八五四年四月二六日露艦ヲーロラ號が堪察加に向て同港を發するに方り歐洲に於て既に彼我の間に宣戰の行はれたるを知らず之に對して祝砲を放つ。五月七日に至りウィラゴー丸來着し初めて開戰の報に接し中將プライス先任なるを以て聯合艦隊の司令官となる。中將プライス同月一一日を以てカリャヲー港を拔錨しサンドキッチ列島に至りて部下の戰艦を集め七月二五日堪察加に向て出帆

す。同列島滯在中露國の軍艦ドキーナ號が前月末戰報を齎して解纜せりとの事を知り中將プライス大に其準備の遲々たりしを悔ゆ。八月一七日(二九日)黎明アヴチア灣口の燈臺は信號もて艦隊の來襲せるを報ず。此時適〻米國の汽船入港ししが聯合艦隊を望見し上陸せずして出帆す。一八日(三〇日)午後聯合艦隊入港し砲臺に迫りて砲擊を開く砲臺も亦之に應戰ししが暫時にして艦隊は砲擊を止め少く退きて投錨す。此夕プレシデント號に於て會議を開きて攻擊の部署を定め翌朝之に基きて將に攻擊を開始せんとししに偶〻中將プライス其成功の期し難きを思ひしにや自殺ししを以て此日は時々砲臺に向て射擊を試みしのみ。

プライス死後中將デボァント聯合艦隊の司令官となりしがプライスに代りて英艦の指揮を掌りしビーク號艦長と相容れず爲に以後聯合艦隊は大に其進退の宜しきを失へり。翌八月二〇日(九月一日)天氣晴朗聯合艦隊は總進擊に決し大艦三隻汽船に曳かれて第一第四の兩砲臺に向ふ。クラスニー・ヤルの第四砲臺は先づ砲門を開きて挑戰ししが八門の大砲を以て敵の八十門の大砲に當りしが故に久しく抵抗する能はず。第一砲臺も亦忽ちにして屈す。第四砲臺の破るるや佛兵は勝に乘じて上陸して之を占領ししが少尉試補ボボフなるもの援兵を率て逆襲を試み之を擊退す。午後聯合艦隊は少しく進みて碇泊し巧にシグナル丘によりて露艦の砲火を避け第二砲臺に向て砲擊を開始す。砲臺の指揮官公爵マクストフ沈勇あり僅に十門の大砲を以て之に應戰し少しも屈せず日沒に至るも勝敗決せず。同盟軍は是と同時に第三砲臺の附近より上陸せんと試みしも成功せず交戰九時間の後艦隊皆其碇泊地に退却す。此日ラ・フォルト號のみにて發砲八百六十九に達ししとぞ。此夜露軍は徹宵して砲臺の修繕をなす大砲數門の損害を受けしのみにて翌朝は殆ど之を舊態に復す而して戰死者六人負傷者十三人に過ぎず。

聯合艦隊は此夜會議を開きて激論の末一度退却に決せんとししが是より先中將プライスの屍體を埋葬せんが爲上陸ししが水兵等二人の米人に會しニコルスキー丘の北に當り海岸より直ちに市街に至るの良道路あるを偵知す。茲に於てビーク號艦長スアフレデリック・ニコルスン提議して曰く海岸の砲臺を破壞して此間道によりて進まむと。八月二四日(九月五日)黎明聯合艦隊は此提議に基きて第二回の總攻擊を試む。七時三十分ヴィラゴー號深霧を冒し兩國の旗艦を曳きて第三砲臺

の前面に至る砲戰半時間の後砲臺の指揮官負傷して遂に守兵を撤す。此時英の旗艦は曳かれて第七砲臺に迫り砲擊一時間の後其胸壁を破壞し守兵を退く。第三砲臺は砲五門第七砲臺は砲六門を以て守りしと云ふ。斯の如く攻擊の第一部は忽ちにして成功ししかば半時間の後陸戰隊約一千人は二十五隻の短艇に乘じて上陸し中將デボァントの指揮を受けニコルスキー丘の北端を廻り湖畔の間道を進む。第六砲臺の守備兵三十二人大砲五門を以て之を邀へ小銃或は霰彈を亂射して之を擊退す。是實に西紀一八四九年に於て既にムラウィヨフの豫期しし所なり。聯合軍乃ち已むなくニコルスキー丘に登り一面第六砲臺に向ひ一面灣内碇泊の露艦に向ひて銃擊を開始す。堪察加知事中將サヴォイコ第六砲臺の憂ふるに足らざるを信じ兵士三百人餘を一團となして銃槍突貫を行ひて敵兵に當らしむ。然るに此時既に敵兵は丘上より市街に向て猛進するの際なりしかば露兵は或は灌木の蔭或は砲臺の濠に潛みて射擊し其近くに及びて一齊に突貫を試む。同盟軍支ふる能はずして丘上に退却し更に海岸に出でんとして絶壁に遮ぎられ大敗す。ニコルスキー、シグナル兩丘の間より後れて上陸ししものも亦然り。露人の記する所に據れば同盟軍の死者三百人の上に出づと而して露人は戰死者三十一人負傷者六十五人を出す其戰の激しかりしを知る可し。聯合艦隊は翌二五日上陸して死者を埋葬し八月二七日の夕を以て錨を拔きて出帆す。

ペトロパフロフスク戰勝の報露都に達するやムラウィヨフの反對派も初めて其空想家にあらずして先見の明あるに心服す。ムラウィヨフの得意想ふ可し。然れどもムラウィヨフは一時の得意に乘じて將來の施設を怠るものにあらず。時に露都より英、佛の艦隊は將に明年の夏を以て大舉して敗軍の耻を雪がんとするの計畫ありとの報あり。ムラウィヨフ其期に先ちて援兵を派遣し難きを思ひ英斷を以てペトロパフロフスクの守備を撤するに決し之を政府に謀るの餘日なきを以て直ちに副官マルチノフに命じて急行令を中將サヴォイコに傳へしむ。マルチノフ一二月の上旬イルクートスクを發し路をヤクートスク、オホートスクに取り翌西紀一八五五年三月三日ペトロパフロフスクに着す。其間八千露里僅に三箇月にして達すオホータ海岸氷結して橇を用ゐるの便ありしとは云へ實に稀有の事とす。同地の守備隊は糧食缺乏して困苦を極めしにも拘らず城を枕にして死するの決心

なりしかば守備撤退の命に接して大に驚きしが中將サヴォイコは速に命令の實行に着手し其三〇日を以て準備全く成り四月五日七隻の艦船濃霧に乘じてアヴチア灣を出帆してデカストリ灣に向ふ。是より先聯合艦隊にては司令官中將デボァント死ししかば中將ブルース之に代り中將フーリシオン佛艦の指揮官となる。ブルース英艦九隻佛艦五隻を堪察加半島の南端に集む。四月二日(一四日)エンカウンター號竝にバラクータ號アヴチア灣に赴きて敵の動靜を窺ひしが濃霧に妨げられて露艦の脱走を認むる能はず。五月二日(一四日)中將ブルース艦隊集合地に着し同月八日(二〇日)全艦隊を統率してペトロパフロフスクに至りしが露兵已に一箇月の前を以て盡く退きし後なりしかば大に絶望し露艦を搜索せんとしてアラスカに向ひ七月一日(一三日)シトカに着ししが遂に其踪跡を得る能はず。

此時に當りて露艦七隻は幾多の困難を冒して堪察加の海岸よりヲホータ海に出で其中の一隻なるアウロラ號は四月二五日を以て帝灣に着し他の一隻なるヲリブッァ號は翌日來着す。ヲリブッァ號は途上米國の捕鯨船に遭ひて七隻の同盟艦隊が軍需品買入の爲一月二六日ホノルルより桑港に向て出發せりとの報を齎しし

しかば中將サヴォイコは永く同地に碇泊するを以て危險なりとし五月一日デカストリ灣に投錨す。但し英佛の太平洋艦隊は上文に記ししが如くアラスカに向ひしが其支那海艦隊は是より先ヲホータ海韃靼灣封鎖の命令を受けしを以て此月八日英の司令官少將スア・チアルス・エリオットは果して三隻の戰艦を率ゐてデカストリ灣に近づく。其夕に至り一隻の英艦は灣内に入りて露艦と砲撃を交はししも忽ちにして灣外の本隊に加はり一一日に至りては全く其所在を失す。蓋し此時に當り英の艦隊は露の艦隊に對して優に勝算を有ししに拘らず進んで必死の攻撃を試みざりしは全く韃靼海峽の存在を知らざりしが爲にしてスア・チアルス・エリオットは露艦を以て甕の鼠と同一視し遠く海上にありて其灣外に逃走するの水路を扼せんと欲ししなり。然るにサヴォイコは北方の海上氷解の報に接し五月一六日濃霧に乘じて全艦隊を率ゐてデカストリ灣を去る。故に其翌日を以て少將エリオットが再びデカストリ灣に入るや露艦の失踪せるを見て大に驚き直ちに南方に向て出帆し普く韃靼灣の海上に搜索を試みしと云ふ。其之を發見する能はざるは怪むに足らず。

ムラウイヨフは前年の末より第二回黑龍江遠征の準備に汲々たりしがこの年二月一八日更に北京政府に書を送りて英佛聯合艦隊の防禦上其已むを得ざるを知照す。四月六日尼布楚に至りしが遠征の計畫大なるを以て豫定の期日を以て出發する能はず五月上旬漸く第一軍の一部と共に先發す。蓋し此遠征隊の士卒は總計三千人に達ししを以てムラウイヨフは豫め之を三軍に分ち第一軍は二十六隻第二軍は五十二隻第三軍は三十五隻を以て組織し時を異にし相追ふて出發せしむる計畫なりき。此時清國政府は清露の全權庫倫(クイロン)に會し共にゴルビッァ河に赴きて國境を劃定せん事を回答し來る。ムラウイヨフ五月八日附を以て之に覆牒して曰く今正に黑龍江口に向ふの途にあり九月に至るまで同地に滯在す可きを以て乞ふ全權を派せよと。一二日に至り清國官吏の四隻の蓬船に乘じてゴルビッァ河に赴かんとするに會ひしかば更に其趣意を反覆辯明す。既にして愛琿(アイグン)に近くに及び使を其地の副都統に遣りて遠征の目的を說き且後軍の進行を妨害せざらん事を乞ふ。かくて黑龍江の下流に着するに及び中將サヴォイコをしてネウエルスキーに代りて水師を總轄してニコライフスクに赴かしめ本營をマリンスクに定めて親ら海陸兩軍の總指揮官となりネウエルスキーを以て幕僚に任ず。第二回の遠征に際し公爵ウォルコンスキーはムラウイヨフの命を受け五十一戶四百八十一人の移住民を率ゐ數百の家畜を携へて黑龍江の下流に至りマリンスクよりニコライフスクの間に於て江の右岸に四箇所左岸に一箇所の殖民地を設く。

是より先韃靼灣に於ける英國の艦隊は露艦を以て既に薩哈連の南端を廻航してオホータ海に遁れたりとなしアヤン灣を以て海軍根據地となせりとの流言を信じ之を攻擊するに決す。故に六月二七日一隻の英艦はアヤン灣に入りしが其住民が皆內地に退却せるを偵知し七月九日を以て出帆す。此日ムラウイヨフと志を同くせる大僧正インノーセント偶まアヤンに來着し市街を去る十二露里の森林中に退却せる住民を慰撫す。二一日英艦又來りて投錨し翌日更に一隻の來着せるあり大僧正の滯在せるを聞きて之を其船中に招待し酒を酌みて之が健康を祝ししと云ふ。少將エリヲットは如何にもしてサヴォイコの艦隊を捕獲せんとし一〇月三日(一五日)復三隻の軍艦を率ゐてデカストリ灣に至る。時に同灣の守備隊は多くマリンスクに退却し留まるもの僅に七十二人に過ぎず山砲二門を以て之を守る。

英艦の陸戰隊約四百人上陸を試みしも猛烈なる哈薩克兵の射擊を受け短艇に退く。其日午後より數日間英艦は陸上を砲擊ししも一〇月四日同地の守備隊長官はマリンスクより歸り哈薩克の援兵益〻多きを加へしを見て一七日英艦遂に同地を拔錨し西紀一八五五年の交戰茲に終了す。翌年少將エリオットは復樺太灣を巡航ししが圖らず初めて帝灣を發見ししのみにて何の得る處もなし。要するに在極東の聯合艦隊は其地理の知識に缺乏せるとムラウイヨフが速に防禦を策ししとによりて悉く失敗に了れり。

第五節　黑龍江流域併呑

ムラウイヨフはマリンスク滯在中また清國との境界談判を開始せり。卽ち九月八日清國の使節マリンスクに來着ししかばその翌日を以て第一回の會見を試む。時にムラウイヨフ偶〻微恙ありサヴォイコ代りて清國の使節を延見し先づ英佛の攻擊に對して黑龍江口を保護するの必要を反覆し二箇條の要求を爲す。其一に曰く右の目的を以て既に占領せる地域竝に海岸一帶の地は露領たる可し其二に曰く黑龍江口の城砦と內地の露領との間に常に交通を保たんと欲せば黑龍江の左岸に相連續して殖民地を設くるの必要あり蓋し黑龍江は露清兩國の天然的境界なるを以て是に因りて初めて東西伯利は海上の攻擊を防ぐを得べく且將來兩國の葛藤も全く其跡を絕つを得むと。清國の使節は此要求を文書にて提出せん事を求め越て一一日第二回の會見あり。此時ムラウイヨフは病愈えて臨席ししに清國の使節は西紀一八五三年六月一六日附露國薩納特（サナト）衙門の公文を朗讀す。其ネッセルローデがムラウイヨフに謀らずして送り黑龍江左岸の清國領土たるを認めしものなるは上文に記ししが如し。ムラウイヨフは乃ち巧に論鋒を轉じて露國政府は清國と永久の平和を維持するものなるを辯じ使節に向て更に遠征隊を派して黑龍江を下らしめ江口と內地との連絡を鞏固ならしむるの計畫あるを清國政府に通ぜん事を要む。かくて此境界談判は一も決定する事なかりしがムラウイヨフは新に堅牢なる三個の砲臺を築きてニコライフスクの防備を固むるの計畫をなし米船バルメットに乘じて一一月一日同地を出帆しアヤンを經て一二月下旬イルクートスクに歸る。

ムラウイヨフはイルクートスクに歸着の後三度黑龍江口に遠征を送るに決し大佐コルサコッフ中佐ブッセをして其事務を統轄せしめ翌西紀一八五六年親ら露都に赴きて政府と協議する所あらんとす。蓋しムラウイヨフの信任を辱くしニコラス一世前年の初に於て殂し其子阿歷山代りて露帝の位に即きしを以て政府の方針に動搖あらん事を恐れしが爲なり。恰も好し此時清國使節が書を露廷に遺りムラウイヨフの要求不當なるを以て之を政府に稟申する能はずと通牒ししを以て露國の外務省は之に回答を發し黑龍江航通の權と竝に江岸に糧食貯蓄所設置の承諾とを得んとするの際なり。ムラウイヨフは此の如き外交上の交渉を以て其目的を達するの難事なるを論じ自ら請ふて對清新條約締結全權大臣となる。既にして英、佛諸國と露國とは巴里和約を以て干戈を戢めしも第三回の黑龍江遠征隊は其準備全く成りしを以て西紀一八五六年五月中旬大小一百十隻の船舶一千六百六十人の將士を載せて發程す。五月二一日一行愛琿に至りコルサコッフ親ら副都統を訪ひて夏季に於て露船の江上を往來するもの多かる可きを告げ且黑龍江口より歸國する兵士の便に供する爲江の左岸に屯營を建設す可きを報ずかくてブッセは遠征隊を率ゐて流に浮びて下り途上カマラ河口の對岸にカマラ寨を、ゼーヤ河口にゼーヤ寨を、小興安嶺の横斷せる點に興安寨を、松花江口の對岸に松花江寨を設け二十四名乃至五十名の守備兵を配置す。茲に於て黑龍江左岸の占領は清國政府の承諾を要するのみ。因に歐洲に於ける平和回復の結果黑龍江口駐屯士卒の多數はムラウイヨフの命により此年三隊に分れて順次後具加爾州に歸らんとしし。が第三隊の如きは飢寒交至り辛酸筆紙に盡す可らず途上其士卒の三分の一を失ひしと云ふ。

ムラウイヨフは一二月上旬まで露國に滯在し其間政府をして東部西伯利に沿海州を置かしめ堪察加半島よりウヂ河岸及び黑龍江の沿岸を管轄せしむ。蓋し黑龍江の下流は既に露國の版圖たる事を世上に認識せしめんが爲なり。ムラウイヨフはまた命を部下に下して冬期に際しマリンスク、ニコライフスク間に郵便の制度を設けしむ。かくて任地に歸り西紀一八五七年の初例年の如く黑龍江遠征の準備を爲し哈薩克兵を其左岸に永住せしめんが爲に本國政府の許可を受く。此時に當り露國政府は英、佛兩國が清廷に迫り其外交官を北京に駐劄せしめんとするを見

又之に倣ひて日露條約を締結せる中將ブーチヤチンを北京駐劄公使に任じ且之に訓令を與へて國境問題を決定せしめんとす。ムラウイヨフは之を聞きて心私に大事を誤らん事を恐れしが此年三月二一日ブーチヤチンのイルクートスクに來着して會談するに及び初めて其杞憂に過ぎざるを知り大に心を安んず。即ちブーチヤチンは四月を以て恰克圖に至り陸路北京に赴かんとして旅行券を請求しに翌月に至り清國官吏は露國と協商す可き特種の事件なきを以て公使の入京を要せざるを答ふ。ブーチヤチン大に怒りて書を外務省に送りて愛琿の占領を建議しムラウイヨフが既に步兵二大隊と野戰砲兵とを率ゐて黑龍江遠征の途にあるを以て同月一五日恰克圖を發して其後を追ふ。六月五日遠征隊の愛琿に着するやブーチヤチンは本國政府の許可を待たずして同市を占領せん事を極論ししがムラウイヨフは兵力に訴へて他邦の領土を侵すを好まず却て之を慰諭するに至る。茲に於てブーチヤチンの却てムラウイヨフよりも激烈なる政策を取らんとするものなるを見る。

ブーチヤチンのなほ愛琿にあるや更に同地の副都統に向て滿洲を經て陸路北京に赴かん事を求めしが副都統は政府の訓令なきを以て之に應ぜず。乃ち斷然海路を取るに決しゼーヤ寨に於て袂をムラウイヨフと分ちて獨り黑龍江を下り七月一日軍艦アメリカ號に搭じてニコライフスク港を發し二四日清國直隸省の白河口に達す。是より先清國政府はブーチヤチンの海路白河口に來らんとするを聞き同河口の附近なる天津の談判の地にあらざるを露國に通牒ししが露國政府は之に答へて公使の北京入京を要求す。而してブーチヤチンの天津に至り其齎す所の國書を清國政府に呈し且つ速に回答あらん事を請ふや清國官吏は容易に之を接受せず論難詰責初めて之を北京に致さしむ。清國政府は其國書を得て大臣を會し之を商議せしめしに諸大臣皆曰く露人濫りに未だ許可せざるの海灣に闖入し且つ北疆の邊事を以て宮闕に迫る無禮是より大なるはなし若し事件の議す可きものあらば恰克圖に於てすべし宜しく其非禮を露廷に責む可しと。乃ち清國は書を裁して露國政府に送り同時に之をブーチヤチンに通牒す。ブーチヤチン茲に於て天津を去り上海に至り該港に駐まりて諸國の動靜を視察し政府の訓令を待つ。露國政府は清國政府の照會を受け且つブーチヤチンの報告によりて同國政府が內

外多難の際北京若くは上海に於て土地割讓を議する能はざる事情を察し從來の方略を變じ回答して曰く黑龍江の事件は悉く之を東、西伯利總督に委任せり今回プーチャチンを派ししは曩に英、佛兩國が訂結しし特例に倣ひ最惠國の條約を議せんが爲なりと。同年一二月下旬露國はプーチャチンを以て支那海艦隊の司令官に補しバルチック海より軍艦七隻を分遣す。

是より先プーチャチンのゼーヤ案を出發するやムラウイヨフは獨り黑龍江流域に止まり施設參畫する所少からず。ストレルカより小興安嶺の峽谷に至るまで至る所同江の左岸に哈薩克兵を殖民せしめ其戶數四百五十に達す。又ゼーヤ案に衞戍を置き砲兵の一分隊を備ふ。愛琿副都統之を聞きて抗議を試みしもムラウイヨフは公使プーチャチンが直隸灣頭にあるを以て之と交渉せん事を說きて其書を還付す。此冬又ストレルカ、ニコライフスク間に郵便線路を設置す。ムラウイヨフは黑龍江よりイルクートスクに歸りし後露都に赴きしが久しく滯在せず翌西紀一八五八年の春任地に歸り更に大遠征の計畫をなし約一萬二千の哈薩克族を黑龍江畔に移住せしめんとす。既にして本國政府より愛琿に於て清國使節と境界の事を協議せよとの命あり乃ち發するに先ちて人をゼーヤ案に派し愛琿の副都統に告げしめて曰く余は直ちに來着す可しと雖も久しく同地に滯在する能はざるを以て余の黑龍江口より歸航するに當り貴國使節と協商を試むるこそ寧ろ便宜ならんと。清國政府露人が哈薩克兵を南烏蘇里地方に移住せしむるの擧あるを聞き此通牒を得て大に恐慌を起し五月六日ムラウイヨフのゼーヤ案に達するに及び暫く滯在して黑龍江將軍奕山と協議せん事を求む。焉ぞ知らむムラウイヨフの前言は協商を速に開かんとして發ししし權謀に出でしものならんとは。

五月一一日第一回の商議を愛琿に於て開く。ムラウイヨフ先づ發言して黑龍江を以て兩帝國の境界となすの利益必要を論ず。奕山全然之に反對し尼布楚條約を援きて辯明する所あり。ムラウイヨフ乃ち豫め起草せる條約の草案を示し翌日を以て之に對する意見を發表せん事を奕山に求む。其草案の規定凡そ六箇條あり。曰く兩帝國の境界は黑龍江の左岸を以て露領となし其右岸烏蘇里江口迄を清領と定め更に烏蘇里江を溯りて其水源に至り夫より南方高麗半島に達するの一線を以て之に充つ可し。曰く兩國の國境を爲せる江流航通權は惟り露、清兩國の船舶にの

み限る可し。曰く如上の江流に於ては自由貿易を行ふ可し。曰く黑龍江左岸現在の清民は三年間に悉く右岸に轉居す可し曰く兩帝國の利益光榮に關する新規定を設くるが爲に更に全權委員を定めて從來の條約を更正す可し。曰く今回の協商は從來條約の附屬と認む可しと。然れども其の容易に之に應ずるの色なきを見翌日ムラウイヨフは自ら病を稱して赴かず通譯ペローをして交渉の局に當らしめしも談判進捗せず。乃ち更にペローをして尼布楚條約締結の際に於ける强迫的行爲を責めて之を論據となすの不當なるを論じプーチャチンに對する擧措の穩ならざるを說きて清國政府の親交の意あるや否を詰りしに奕山遂に屈し西紀一八五八年五月一六日愛琿協商三箇條の調印成る。但しムラウイヨフも最初の要求に就きて多少讓步する所あり卽ちゼーヤ河より南方ホーモルヂン村ニ至る黑龍江左岸の滿洲人に對し清國政府の統御權を行ふを許し烏蘇里江より海に至るまでの地を露清兩國の共有となす。ムラウイヨフは其大目的の大部分を達ししものと云ふ可し。其ゼーヤ寨に歸るや大僧正インノーセントを始め住民は盛に歡迎の意を表し聖告節に因みて新に建設ししゑ會堂に於て祈禱式を行ひゼーヤ寨をブラコヅエシュチェンスクと改稱す。露國政府は此年一二月二〇日新に黑龍江州を置きて此地を其首府となし又是より先ムラウイヨフの功を賞しアムール伯に叙す。

六月一日卽ち愛琿協商を締結するの後僅々二週日を經てプーチャチンも亦天津に於て清國と條約を締結す。初めプーチャチンの上海に滯在するや既に前章に記ししが如く英、佛、米三國の全權使臣と謀議し各自の要求を北京に錄送して全權委員を上海に派出して商議の任に當らしめん事を要求ししに清國政府は之を拒絕し露國との談判は西伯利の境界に於てす可しと答ふ。茲に於てプーチャチンは英、佛同盟軍の後を追ひ軍艦七隻を率ゐて天津に入り兵威を示ししかば清國政府は大に恐怖し內閣大學士桂良（クエイリヤン）吏部尙書花沙納（フアシアナ）を天津に派出してプーチャチン等四國公使と所謂天津條約を締結す。是純然たる通商條約にして露清條約中境界の事に關するは唯第九條の一あるのみ。曰く清國は露國と從前未だ定明を經ざるの邊界を將て兩國より信任の大員を派出し公平を秉て查勘し務めて邊界を將て清理補入せむ此次和約の內邊界既に定まるの後は地冊に登入し繪て地圖となし憑據を立定し兩國をして永く此疆彼疆の爭なからしめんと。思ふに當時プーチャチン

は未だ愛琿協商成立の通知に接せざりしならむ。其他同條約に特殊なるは定期郵便を北京及び恰克圖間に設くるの項等なり。

此間ムラウイヨフは黑龍江の遠征を繼續してニコライフスクに向ひ沿岸至要至便の地に哈薩克兵を移住せしむ。彼の西紀一八八八年より沿黑龍江總督府廳を設きし烏蘇里河嘴のハバロフカ府は實に當時の創設に係り往年ハバロフが其附近に於て滿洲人の攻擊を卻けしに因みて命名せるなり。而して歸航に際し愛琿協商に於て得たる權利(?)を行使せんが爲に汽船アムール號に乘じて松花江を溯る。かくの如く愛琿協商締結以外にも重要なる成功を奏せしが其イルクートスクに歸るやムラウイヨフは更に同協商を以て清、露共管の地と定めたる烏蘇里地方の經略を圖る。卽ち翌西紀一八五九年を以て其沿岸の地を巡視するに決し先探檢隊を派して精確なる地圖を造らしめ其五月下旬ニコライフスクに至るや直ちに太平洋岸を巡航す。此時ムラウイヨフは我國にも來り清國の白河々口、威海衛等にも赴きしが其最も重要なる事業は烏蘇里地方沿岸の測量にあり。其結果朝鮮國境に近き海灣を以て將來有望の地點なりと認め之に彼得大帝灣(ピクトリア灣)の名を命じ灣內のウラヂヲストック(海參崴港)並にポシエット灣に深く注目す。蓋しムラウイヨフは活眼遠識の士なるを以て大平洋に於ける露國の海軍根據地を此灣頭に移さんと欲するの眞意ありしなり。故に翌西紀一八六〇年七月二〇日之が準備として露人エグルシェドは軍艦グリデン號に陸兵四十名を搭載してウラジヲストック港に上陸し此地を占據す。而して是と同時に他の一隊の兵士は又ポシエット灣を占領す。

是より先天津條約は既に批准されしを以て西紀一八五九年六月英、佛公使之を携へて北京に至らんとして清兵と衝突し翌年更に英、佛同盟軍が大舉して、北清征討に向ひし顚末は既に前章に詳述ししが如し。而して露國政府も亦西紀一八五九年一月陸軍少將イグナチエフを北京駐劄公使に任じ烏蘇里地方境界問題を決定せしめんとす。イグナチエフ、イルクートスクに至りてムラウイヨフと協議をなし共に手を携へて同年四月一七日恰克圖に至る。然れども清國官吏は例の如く因循して容易に陸路北京に至るを肯せず。五月二日ムラウイヨフが遠征に向て出發ししの後に至り漸く之に應じしも北京入都の後五月六日批准條約を交換ししのみにて

境界に關する談判は少しも進捗するを得ず。然るに翌年英、佛兩同盟國と清國と和議を議するに方りイグナチエフは清國欽差大臣恭親王と謀り調停を試み大に清國の甘心を得て後一一月二日恭親王と所謂北京條約を締結す。此條約は天津條約の案件を審明するの外烏蘇里江及び松阿察河を以て國界となし東は露國に屬し西は清國に屬す。又其以南は興凱湖を踰えて直ちに白稜河に至り白稜河口より山嶺に從ひ瑚布圖河口に至り再び瑚布圖河より琿春河と海中間の嶺(琿春河と日本海の間に跨る山嶺なり)に從ひ圖們江口に至る其東を露領となし西を清領となす。茲に於てムラウイヨフの希望は全く成功し翌西紀一八六一年陸軍少將コルサコッフ代りて東、西伯利總督となる。降て西紀一八七三年露國政府は東洋沿海提督府をウラヂヌストック港に置き以て日本海岸諸港ポシエット、ニコライフスク、ベトロパフロフスク等を管轄し地方の民政を兼ねしむ。又海軍兵營を新設しニコライフスクより武庫造船所等を移しイルクートスク府の步兵を分屯せしむ。是亦ムラウイヨフの豫期せし處に外ならず其銅像が嚴然としてハバロフカ府に屹立せる又其所なり。

第六節　薩哈連島略取

ホウストフ一度罪せられてより露國は久しく薩哈連島に注目せず我幕府は文化六年(西紀一八〇九)六月以來同島を北蝦夷地と唱え領土の一に數へしが本章第三節に記ししが如く西紀一八五三年に至りて露國は復た同島の經略に着手す。少佐ブッセがクシュンコタンに屯營を設けしは實に其九月二日なり。是より先露帝ニコラス一世東邦經略に志あり西紀一八五二年海軍將官プーチャチンを國使として日本に遣ししがプーチャチン此年八月二一日(一七)軍艦四隻を率ゐて我長崎に來る。蓋し其我邦に求むるは隣交を修むると薩哈連千島の國境を定むるとにあり。幕府大目付筒井肥前守勘定奉行川路左衛門尉を長崎に遣はして之と應接せしむ。翌西紀一八五四年一月一二日(嘉永六、一二、一四)より二月三日(安政元、正、六)に至るまで筒井、川路の兩使並に其代理中村爲彌は數回プーチャチンと談判を試みしも議成らず。此時我使臣は歐洲出版の地圖に基き初めて北緯五十度線を以て薩哈連島を兩分し以北を露領となすの說を立てしと云ふ。プーチャチン實地に就きて決定せん事を提議し同

月五日書を殘して長崎を出帆す。二〇日（正、二二）。幕府目付堀織部正利熙を北蝦夷地に遣ししに此時露國は英、佛と際あらんとするの際なりしを以て兵力を集中するの必要より此年六月五日（五、一〇）。クシュンコタンの屯營を撤ししかば第三節參看堀のアニワ灣に至るや露人既に留まるものなく爲に空しく歸る。此月二四日（六、二九）。幕府再び松前氏所領中函館附近六里四方の地を收め竹内下野守保德を以て函館奉行となす。

露國の使節プーチャチンは一〇月二一日（八、三〇）。に至りて函館に來り是より先四月二〇日（三、二三）。艦長ポスシートをして長崎に赴きアニワ港に相會して境界を決定せん事を約ししが其約の如くなる能はざりしを謝し直ちに大阪に赴かん事を告ぐ。然るに大阪に於ては談判をなす能はざるを見終に轉じて一二月四日（一〇、五）。を以て下田港に至る。幕府又筒井、川路の二使節をしてプーチャチンと共に條約の事を審議せしむ。此時我日本は既に米國と修交條約を締結せる後なりしかば和親の事に關しては又交渉の困難を感ぜざりしも北地定界の議に付きては彼我堅く執りて下らず。二三日（一一、四）。下田に大海嘯ありて露艦大破す戸田に於て露人が造船を試みしは是が爲なり。既にして新艦落成して更に談判を繼續し翌西紀一八五五年二月七日（安政元、一二）。日露條約初めて成る。其第二條に曰く『今より後日本と露西亞國の境、擇捉島と得撫島との間にある可し擇捉全島は日本に屬し得撫全島夫より北の方クリル諸島は露西亞に屬す樺太島に至りては日本國と露西亞國との間に於て界を分たず是迄仕來の通りたるべし』と。此條項はプーチャチンの提議に係り其眞意は露國が此時英、佛二國と交戰中なるを以て暫らく境界を定めずして後徐に之を侵略せんとするにあるや疑ふ可らず。一說に此本文の附錄に樺太の儀は一八五二年迄日本人並に蝦夷人アイヌ住居したる地は日本所領たるべしとありと云へど余は條約中に之を檢出する能はず。

西紀一八五五年三、四月の交（安政二、二）。我幕府は復た東西蝦夷地及び諸島を收めて直隸となし松前領は東は木古内西は乙部を限る事となし奥羽諸侯をして直轄地を警衛せしむ。北蝦夷地には秋田藩の支營を置き其本營は增毛にあり。翌年九月（安政三、八）。函館奉行、足輕江澤門四郎を遣はして樺太西北濱を巡視せしめしに歸て曰くホロコタン以北露人移り居る者八十餘人石炭を採り砲臺を築き居室を營むと。西紀一八五

七年八月三日（安政四、六、一四）露人十七名樺太のナヨロ附近に上陸して暫く住居を定めしが更にクシュンナイに移りて復茅舍を造り翌月一八日其保護を我官吏に託して去る。然るに翌年七月（安政五、六）に至り露人二十二名又クシュンナイに上陸し從來の茅舍の外更に幾多の增築をなして越年の準備に汲々とし我官吏之を詰問するも條約を援引して服せず。時に村垣淡路守は恰も樺太巡視中なりしを以て之に應じて露人の南下を制せんと欲し各地に越年者を派出して之をして多くは其妻子を伴はしめしも十分に其目的を達する能はず。故に翌月プーチャチンの條約交換の爲に再び神奈川に來るや幕府は堀織部正を遣して之と談判する所あらしめ以て下田條約の規定を改正せんと試みしがプーチャチンは國境を定むるの不利なるを知るが故に斯の如き大事を專決するの全權を有せずと唱え曖昧模稜の間に此問題を葬り去らんとし何の決する所あらず。

其後一一月に至り露國領事を函館に置くの報あるや幕府は堀織部正、村垣淡路守の建議に從ひ函館奉行をして之と樺太境界の事を議せしめんとしが露國領事其任にあらざるを以て辭して應ぜず。幕府乃ち一書を裁して露廷に傳達を要めんとするに際し西紀一八五九年六月一日（安政五、二三、六）露國軍艦東、西伯利總督ムラウイヨフを載せて函館に入港し越て四日老中に宛てたる書を送りて曰く將に八月一日を期して江戸に赴き北蝦夷地の境界を協定せむとすと。期に後るる五日、八月六日（七、八）に至りてムラウイヨフ軍艦四隻を率ゐて品川灣に投錨す。幕府外國奉行をして之を訪はしめしにムラウイヨフ傲然として會見を拒み若年寄遠藤但馬守、酒井右京亮の至るに及び初めて口を開きて曰く今や露清の間に條約締結せられ黑龍江は露領と爲りしを以て薩哈連島も亦勢ひ露領たらざる可らず何となれば薩哈連と黑龍江は元來同一義なればなりと。且曰く貴國の漁民は唯僅に其南端アニワ灣附近に住するに過ぎず樺太全土を擧げて弊國の有たらしむるも敢て其業を妨ぐる事なからむと。其後兩回我使節はムラウイヨフの旅館なる西久保天德寺に於て談判を試みしがムラウイヨフは一に愛琿條約の時に於けるが如く强硬なる手段によりて其目的を達せんとし堅く最初の要求を主張して止まざりしを以て我使節と雖も全然之に屈する能はず爲に敏腕なるムラウイヨフも亦談判一も要領を得る能はず結局現狀維持に決して空しく品川灣を拔錨して歸國の途に上る。

然るに樺太に於ける露人南侵の勢は益〻盛なりしかば日本政府は早きに及びて境界を劃定するの必要を感じ時に隅〻開港延期を列國に要求するの議ありしより之を好機とし西紀一八六一年（文久元）勘定奉行兼外國奉行竹内下野守保德を正使とし外國奉行兼神奈川奉行松平石見守康直、御目付京極能登守を副使に任じ歐洲に派遣す。一行は翌西紀一八六二年一月二〇日（文久元、一二、二二）江戸を發し英、佛、蘭、普の諸國を過ぎ八月九日（文久二、七、一四）露都に着す。先づ開港延期の同意を得次に樺太定界の事に移りしに露國の委員將軍イグナチエフは樺太全土露領なるを以て談判に應ずる能はずと唱ふ。第二回の會見に於て我使節松平石見守康直はイグナチエフの携へたる地圖の僞作なるを論破し露都天文臺の地球儀を以て之に證すイグナチエフ理屈し辭窮し石見守に向て曰く我れ外交に從事する事多年未だ使節の如き畏る可き人に逢はずと。是より定界の談判を開始する事となり前後八九回の會見を以て結局明年を以て各々全權を樺太に派し實地に就きて境界を劃定す可きに決す時に九月一二日（一八、一九）なり。此時イグナチエフは我使節の固く五十度說を執るを見て遂に四十八度定界の議を發言ししかば松平石見守は其說を容れて後患を絕たんと欲ししが竹内下野守等之に反對ししが爲議成らず惜む可し。殊に翌西紀一八六三年夏露國全權カザチウキッチ樺太に至り我全權の渡航を求めしも當時幕府は國内多事なりしを以て之に應せずカザチウキッチをして空しく歸國せしむ。遺憾何物か之に加へむ。

西紀一八六五年（慶應元）露人男女百餘名クシュンナイに移住して兵營を設置しシラヌシ、ナヨロ等も亦露人を見るに至る。函館奉行小出大和守秀實幕府に上書して定界の事を迫りしかば翌西紀一八六六年一一月（慶應二、一〇）に至り大和守を正使とし石川駿河守を副使として露都に赴かしむ。露國亞細亞局長スツレモウホフ應接の任に當り我前年の食言を責め小出大和守等は幕府の訓令に基き四十八度を以て國境と定めん事を要めしも可かず却て得撫外三小島を日本に讓り樺太全島を露領となさん事を主張す。會見五回に及びしも彼我共に其意見を枉げず已むを得ず下田條約の舊に據る事となし西紀一八六七年三月三〇日（慶應三、二、二五）樺太島假規則なるものの記名成る。此協商成るの後露國は直にクシュンナイ以南に二箇所外一箇所に永住の策を施す。幕府も亦東北諸藩に令し其士民の樺太島を開拓するを許す。王

政維新の後明治元年六月岡本監輔をして樺太の事を視せしめしが翌年六月露の士卒クシュンコタンに上陸して去らず。七月我政府初めて蝦夷開拓使を置き鍋島直正を以て長官となし翌明治三年三月樺太開拓使を置き七月開拓次官黑田清隆に樺太事務の全權を委し本島に駐在せしむ。是より樺太に於ける我聲威次第に陵夷し去る。

茲に於てか我政府の爲に樺太買收の策を建つるものあり誰ぞ曰く時の外務卿副島種臣是なり。明治五年春露國代理公使ビユッォフ新に樺太事件談判の命を帶びて來る。種臣乃ち樺太五十度以北の地域を二萬圓を以て買收せん事を交渉す。翌年八月上旬佛國公使バルテルシー種臣を訪ふて曰く露國政府貴國の請求に應じて樺太賣却の議定まるの密報に接す貴國の爲に賀すと。然るに是より先種臣支那に使して不在中卽ち此年五月黑田清隆千島樺太交換の議を建言して曰く樺太の地たる絕域の孤島究陰沍寒にして維新以來政府が該島の爲に費せる所七千萬圓に近しと雖も未だ一利寸功の興るを覩ず寧ろ該島を棄てて之に供するの資財を以て北海道の經理に用ゐるの勝れるに如かざるなりと。茲に於て廟議一變して清隆の建議を容るる事となり明治七年一月海軍中將榎本武揚を特命全權公使となし露國に駐在して樺太、千島交換の事を議せしむ。此年八月二九日武揚露國の亞細亞局長スツレモウホフと第一回の會見を遂げ九月二二日更に第二回の會見を開き結局翌明治八年五月七日を以て榎本公使と露國外相ゴルチヤコフとの間に樺太千島交換條約の締結を見るに至る。此條約は八箇條より成り日本は得撫以北千島十八島を占領し露國は薩哈連全島を占領する事を規定し又日本國より薩哈連島を讓與しし利益に報ゆる爲めコルサコフ港卽ちクシュンコタンに來る日本船には十箇年間港稅及び海關稅を免ず可しと定む。此年八月二二日東京に於て條約の交換成り九月開拓中判官長谷部辰連露國理事官バラバレとクシュンコタンに會して樺太島讓與式を行ひ一〇月開拓使五等出仕時任爲基理事官マチュニンとクリール島に會し千島讓與式を行ふ。茲に於て我政府は全く露國の要求に應じ殆んど無人の島嶼を收め露國はよく其初一念を貫徹して薩哈連全土を略取せり。以後日、清戰役後に至るまで東、西伯利に於ける露國の領土は一も變更する所あらず。

第四章　英領印度の土民兵叛亂竝に英王直轄

（西紀一八五六――西紀一八七七）

第一節　叛亂前の形勢

西紀一八五六年三月英領印度總督ダルフージー卿が任滿ちてカルカッタを出帆するや英領印度の官民は擧て其歸國を惜み新聞紙をはじめ皆卿の爵名を呼ばずして單に『大總督（プロコンサル）』と稱せり。斯の如く總督の雙肩に人望を擔ひしはエルズリ侯を除く時は曾て英領印度史上に其匹儔を見ざる處にして侯と雖も亦遠く卿に及ばざるものありしならむ。然るに其後未だ二歲を閱せざるに土民兵の大亂蜂起し、しかばダルフージー卿に對する輿論の攻擊は大に高まり前年の人望は去て跡なきに至れり。卿は深く人心の反覆常なきを感じ從來は數々自己の干係せる文書を公にせしが以後は敢て自己の政策の爲に辯明を試みず却て遺言に記して曰く死後五十年を經て余の文書を開封せよと。而して卿は西紀一八六〇年を以て永眠し

しかば以上の文書が公にせられて以て卿の政策の爲に辯護の勢を執るは西紀一九一〇年以後の事ならずんばあらず。

ダルフージー卿の政策を攻擊するものは主として三個の論據によりて辯難す。一に曰く卿は幾多の土侯の所領を兼併せるが故に殘餘の土侯は固より英領內上流社會の土民をして不安の念慮を抱かしめたりと。二に曰く卿の施政の時ベンガルの土民兵は既に叛亂の徵候を示せしに拘らず卿は思を茲に致さず且歐洲兵と土民兵との多寡に付きて注意せざりきと。三に曰く卿は或は征服により或は兼併により英領の版圖を膨脹せしめし事頗る大なるに歐洲兵を增加するの道を講せず爲に西紀一八五七年の叛亂をして容易ならしめたりと。蓋し土民兵叛亂の大原因は土民兵多きに過ぎ歐洲兵少きに過ぎしが爲なるや又疑ふ可らず。當時兵力の實權は全く土民兵の掌裡に存せしを以て其外人の管制を脫れんと欲する豈怪むを須ゐんや。思ふに數年の後に至りて公にさる可きダルフージー卿の文書は此點に付きて卿の爲に辯護する處あらむ。而もベンガルの土民兵は既に叛亂の徵候ありしとて卿を攻擊するは其當を得たるものにあらず。是全く些事にして當時の軍司

令官スア・チアルス・ナピエアーとダルフージー卿とが意見の衝突を起して軋轢を生じしが爲一時世人の注意に上りし事あるのみ。

土侯の所領兼併の攻擊に至りては議論の歸する處は附庸の土侯は正當の繼嗣なき場合に於て養子をなし其追認を英國政府に求むるの必要ありや如何と云ふにあり。而して當時に於ては何人も其必要を疑ふものなくかくてダルフージー卿の就職後間もなくサタラの事件起り卿は本國政府並に東印度會社の同意を得て之が追認を拒めり。西紀一八五三年を以て兼併を行ひしジャンシの問題等の如き一にこの先例に基く。大叛亂鎮定後英國政府は從來の政策を一變し土侯の希望に任せて追認を與ふる事となりしも是事情の大に相違せるものあるが爲なり。彼の大叛亂の日に於て印度の土侯が國内の保守主義を代表し英國政府の爲に堡障の用をなせしは英國當路者の頗る滿足せる處なるも叛亂以前に於ては決して斯の如き土侯の好意を豫期する能はざりしなり。但し今日追認を與ふるは土侯が親ら養子をなせる場合に限るを以て西紀一八五三年に殂せるナグポール王の如く其手續を行はざるものに於ては又全く其問題を異にす。以上の事實に就きては既に上卷に略述せる處あるを以て是より直ちにオウド兼併の顛末を記す可し。此オウドの兼併は直接に土民兵叛亂の原因と認む可らざるも叛亂の結果を大ならしめしものありとは公平なる觀察者の承認する所なり。

オウドに對する關係は英領印度の歷史中最も不快なるものなり。西紀一七六四年英人一度之を占領せしがクライヴ卿は更に之を舊主に還付せり。西紀一八〇一年エルズリ卿は其地の一半を割讓せしめて阿富汗人佛蘭西人並にマアラッタ族に對し溫都斯坦を防禦するの用に供せり。其以後ダルフージー卿の日に至るまでオウドは常に英人施政の妨害物たり。何れの總督も皆其政治の腐敗し暴政の極に達せるを攻擊せしも何人も自ら進みて巡撫を廢止するに至らず。ヘスチングス卿は巡撫に紳士的待遇を與へんと云ひしがその結果巡撫は王號を稱するに至れり。ヰリヤム・ベンチンク卿はオウド王に迫りて其施政を英人の掌理に收めんとせしが之を實行するに至らず。其後西紀一八四七年に至りてハルヂンヂュ卿はオウドの弊政を默視するに忍びず國王に注告して曰く若し今より二箇年以内に於て内治の改革を圖らずんば英人は代て統治の任に當る可しと。西紀一八五一年ラックナ

ウ駐在理事官大佐スリーマンはオウド國内の現狀を視察して報告書を提出せしが其記事によるにオウド國民の慘狀は實に筆紙のよく盡す處にあらず。オウド國に七萬の軍隊を備ふるも政府の支給足らざるが故に兵士は皆出でて掠奪を事とし國民をして强盜の却て親しむ可きを嘆ぜしむ。地主は皆嚴然たる城塞に住し農民の困難を察せず自家の囊裡を肥すに是汲々たり。而して國王は深宮の中にありて其常に左右に侍するものは婦女伶人等あるのみ。國王をして弊政を改革せしめんとするは泰山を挾みて北海を超ゆるの類のみ。故にダルフージー卿は前年照會の精神に基きてオウド國政治の實權を奪ひ國王には單に虛號を許して相當の禮遇を與ふるに止めんとす。然るに取締役會は之を以て寛に失すとなし卿をしてオウド國王を廢し其地を英領に合併せしむ。時に西紀一八五六年二月七日なり。

ダルフージー卿に代りて印度總督に任ぜられしキャンニング卿は有名なる外交家の嗣子にして時に年恰も四十四歲既に政治家として令聞あり而して印度の內治は益改善の途に就き國富の發達又大に見る可きものありしが故に西紀一八五六年に於ては何人も大叛亂の目前に迫るを覺えず。オウドの兼併は斟酌なく行はれ國王はカルカッタに移され其地はバンヂャブに於けるが如く征服地に對する行政制度を布く。爲に地主等の不平を招きしが故に曾てバンヂャブを治めて敏腕の評を博ししエア・ヘンリ・ラウレンスを以てオウド州の知事となす。かくて同州の事又憂ふるに足らずとなす。是より先西紀一八〇三年より以來的里の國王は全く英人保護の下にありて政治上何等の意味をも有せず。而も宗教上の關係より王を的里に置くは英人の統治權を安固にする所以にあらざるを以てダルフージー卿は當時の的里の國王バハヅル・シャが嫡孫をして繼嗣たらしめん事を要めしを見て好機となし新王卽位の日より王宮を的里に近き舊都クータブに移さん事を條件として之を諾す。其後バハッル・シャ少婦を娶りて男子を設けしより皇太孫廢位の運動起り西紀一八五六年七月遂に宮中に於て之を毒殺するものあるに至る。國王乃ち愛妃の實子を以て皇太子たらしめん事を總督に乞ひしもキャンニング卿は其兄あるを以て可かず。茲に於て王妃怒る事甚し。王妃はナヅル・シャの血統を傳へ遺傳性の野心を具ふと云ふ。然れども當時何人も王妃の英人に不幸を來す可きを憂ふるものなし。此年又印度政府は波斯と戰端を開き歐洲兵の之に赴くもの多

かりしより土民兵叛亂蜂起を促したるやの嫌なきにあらず。但し波斯戰役に關する詳細の顚末は之を第五章に讓らむ。

第二節　叛亂の蜂起

西紀一八五七年六月二三日英京倫敦に於てプラッシー戰勝の百年祭を擧行し來會者皆クライヴ卿の創設せる東洋帝國の前途極めて多望なるを說く。然るに何ぞ圖らむ土民兵叛亂の計畫は旣に六週間以前よりその端緒を發かんとは。抑も印度には豫言者なるもの多く或は歲の豐凶をトし或は世界の滅亡を說きしが當時盛に唱道して曰くプラッシー戰後百年にして印度に於ける英人の政府顚覆せむと。而して此頃英領內に於て土人間にチュパチーと稱する一種の團子を傳達し其團子は極めて迅速に領內を一周し了ると云ふものあり。是亦吉兆にあらず。加之前年初めて印度軍隊に採用せるエンフィールド式施條銃は痛く土民兵の惡感情を惹起せり。蓋し此施條銃に用ゐる新藥莢（ケース）を製するに方り英人は印度種族の神聖視せる牝牛の脂と回々敎徒の最も嫌惡せる豚の脂とをその用紙に塗沫すと說くものありしより土民兵は之を聞きて英人は斯くの如く吾人の宗敎思想を尊重せずこれ吾人をして結局基督敎徒たらしめんとするものなりとて疑惑の念を抱くに至りしを以てなり。

土民兵が初めて恐慌を起ししはカルカッタを距る十六哩なるバッラックポールの屯營なり。初めラスカル族に屬する下等の印度人婆羅門族の一土民兵に向ひ其携帶の壺を借りて渴を醫せんとせしに土民兵其壺を汚すとなして可がず。ラスカル乃ち嘲て曰く牛脂を塗沫せる藥莢を使用し旣に婆羅門の品位を汚しにあらずやと。ラスカル族はカルカッタに於て藥莢製造に使用されしが故に此報の傳播するや土民兵間に大恐慌を來す。此時未だ新藥莢を用ゐざりしを以て直ちに事實を說明せば事無きを得しならんに當局者漫然として注意せず此虛報のベンガル軍隊全部に傳播するに至りて初めて其無根なるを諭せしも旣に晩し。土民兵は英人が波斯と戰爭を起し又將に支那と戰端を發かんとするを見從軍を强ひられん事を思ひ益〻英人を怨む。彼のシンド竝にパンヂャブ等に從軍中支給せる加俸を廢せしが如き又オウドの駐屯兵が其地の英領となりしが爲に從來理事官より得た

る特別の保護を失ひしが如き共に土民兵の不快となす所なり。西紀一八五七年一月バッラックポールの兵營に火を放つものあり二月ベンガル軍の司令官ヒーアセー將軍土民兵を說諭せしも容易に其心を安ずるに足らず。

二月の末に至りバッラックポールの土民兵歩兵第三十四聯隊の一枝隊深く內地に入る事一百二十哩ムルシエダバット附近のバァハムポールに赴きし時同地駐屯の土民兵歩兵第十九聯隊の同僚に告ぐるに藥莢の談を以てす。十二月の後第十九聯隊の土民兵は藥莢を拒みて受けず夜に入りて兵器を執り吶喊を發し抵抗を試む。時に同地に一人の歐洲兵を備へず指揮官大佐ミッチェルは大に之を憂へしも第十九聯隊は未だ謀叛の擧ありしにあらず指揮官の說論に從ひ皆其兵器を棄つ。三月歐洲兵第八十四聯隊將に緬甸より歸着せんとす。キャンニング卿此機を待ちて第十九聯隊を解散せんとしバッラックポールに進行の命を下す。第三十四聯隊の土民兵其同僚に同情を表し頗る不穩の色あり。マンガル・パンディなる一土民兵あり其銃に裝藥して兵營を淵歩し呼んで曰く余と志を同くするものは起て歐洲人を見ば直ちに之を銃殺せむと。聯隊の副官中尉バウフ偶ま歐洲兵の曹長と同

教徒の從卒とを從へ練兵場に赴かんとしてマンガル・パンディに遇ひ狙擊せらる。乘馬先づ斃れしを以て格鬪となりバウフ重傷を受く。曹長疾驅して之に赴き佇立傍觀せる土民兵の一中尉に助力を求めしに却て中尉以下土民兵の爲に銃牀を以て亂打せらる。此時に當り回教徒の從卒マンガル・パンディを捕へヒーアセー將軍拳銃を携へ馬を馳せて來り嚴命を土民兵に下ししを以て大事に至らずして止む。十三日を經て歐洲兵豫期の如く來着し第十九聯隊も亦到着ししかば解散の事亦容易に行はる。四月マンガル・パンディ竝に其擧を助けし土民兵の中尉は絞罪に處せらる。

其後各地の兵營に於て或は火を放ちて營所を燒かんとするものあり或は土民兵の歐洲人の將校に向て從來の如く敬禮を盡さざるものありしも暗澹たる黑雲は既に去て跡なきが如し。然るに五月三日に至り突然ラックナウに於てオウド混成歩兵聯隊の叛亂を謀るあり。然るに同地には幸にして歐洲兵歩兵第三十二聯隊の駐屯するありしを以て新任知事スア・ヘンリ・ラウレンスは直ちに命を歐洲兵に下し歩兵三聯隊騎兵一聯隊より成れる土民兵と共に鎭壓の事に從はしむ。而してス

ア・ハンリ・ラウレンス親ら全軍を統べ更に歐洲兵より成れる砲兵一中隊を率ゐ凡七哩を隔てたる混成聯隊の陣地に進みしかば叛徒は敢て抵抗する能はず夜に乘じて遠く遁れ去る。但し首領輩は皆土民兵の捕獲する所となり軍事裁判を受く。故にオウドの叛亂はラウレンスの英斷を以て忽ちにして平定す。此頃バラックポールの第三十四聯隊も亦解散せられ土民兵の不滿はよく制止し得しものの如し。而も是全く空想に過ぎずラックナウの事ありてより未だ一週間を經過せざるにミーラットの大兵營に於て大叛亂を生ず。ミーラットは的里を距る事僅に四十哩にして土民兵歩騎三聯隊の駐屯するありしも同地に於ては歐洲兵も亦優勢にして土民兵の數を四倍するも以て之に當るを得可し。然るに西北地方に於てはミーラットの土民兵最も不穩の狀を呈し同地に於ては英人は牛豚の骨を粉末となし之を井泉に投じ之を食物に混じ以て多數の信仰を動かさんとすとの計畫ありと信ずるもの多し。而して指揮官ヒューイット將軍は既に老耄して變に處するの技倆なし土民兵中騎兵聯隊最も不穩の說ありしが故に五月六日歐洲兵の面前に於て觀兵式を行ひ舊式の藥莢を交付す。然るに土民兵は之を以て新式のものなりとなし斷然手に觸れざるもの八十五人を出す。乃ち之を軍法會議に移し審問の結果十一人を除くの外悉く之を禁錮の刑に處す。時に五月九日なり。但し之を看守するに歐洲兵を以てせずして土民兵を以てす。

翌五月一〇日は恰も日曜日にして歐洲兵の屯營と土民兵の營所とは距離遠きを以て歐洲人は印度人に如何なる謀議あるやを知らず。其朝に於て土人の從僕の姿を曝ししもの多かりしも敢て異とせず例の如く朝に祈禱を行ひ日中は何の爲す事なく更に五時に至りて教會に赴かんとしに突然失火の報あり小銃の聲喇喊の聲蹄聲角聲相次で起り初めて變事の生ずるを知る。初め騎兵の禁錮の刑に遭ふや土民兵等は賣笑の婦女子より痛く其同僚に對して信義なきを譴められ且歐洲兵の爲に迫害を受くるに至らん事を恐れ遂に事を起すに決し先づ禁錮されし騎兵を放免す。歩兵二聯隊も亦騎兵の聯隊に合し聯隊付の一大佐を銃殺し大擧して歐洲人を襲ひ到る處に放火し殘暴を逞くす。然るに歐洲兵は逡巡躊躇して敏活の運動に出る能はず或者は兵器を携へずして教會に集り或者は市廛の間に道を失す。將校は多く土民兵の手に斃れ紳士貴女の倉遑教會より歸宅せんとするもの又免

れしもの少し夜に入りて歐洲兵漸く隊伍を整へ土民兵の營所に至れば既に一兵を見ず且其何れの地に向ひしやを知る能はず。

既にして土民兵の動靜を報ずるものあり曰く叛徒は的里に向て行進し老莫臥兒を擁して溫都斯坦の主となさんとすと。曾て五十年前ヴェロールに於て土民兵の事を起すやギレスピは一擧にして之を鎭壓ししが今や將軍ヒューイットは疾驅して之に追及する事を爲さず唯僅に的里駐在の旅團長グレーヴスに向て電信によりて急を告げしのみ而して的里に駐屯するは土民兵のみにして一人の歐洲兵を備へず。的里の衞戍は市を距る二哩の地にあり。而して兵庫は市の中央にあり。旅團長グレーヴス心にミーラット歐洲兵の來援を期し婦女小兒等を市を距る遠からざる圓形の煉瓦家屋フラッグスタッフ塔に集め土民兵の一分隊をカシュミル門に遣りて叛徒の來襲を拒ぐ。的里の土民兵も亦歐洲兵の來着を恐れ敢て叛徒に通せず而も英人將校の命を奉ぜず形勢を觀望ししが、遂に叛徒に加はり將校を銃殺す。茲に於て全市起て叛徒に加はり午後四時兵庫轟然一發破裂し了る。初め中尉オルロービー歐人八人と共に土民兵を率ゐて之を死守せしが其砲門に裝置す可き彈藥竭くるに及び叛徒の肉薄し來るを見其防禦の難きを知りしかば遂に兵庫を一炬に付し其敵手に落つるを碍ぐ。叛徒一萬五千人爆發と共に仆るオルロービーは幸にして死を免れしも六週間の後火傷の爲に歿ししと云ふ。此間叛徒は王宮に向ひ遣ふ每に歐洲人を殺し一一日の夜に入りては全市悉く叛徒の有となる。半世紀以上英國政府の保護を受けし王室は叛徒を助けて英人に抗し衞戍の將校もフラッグスタッフ塔の避難者も茲に於て唯遁るるの一法あるのみ。藥莢は土民兵叛亂の原因をなせりと雖も之をして遂に溫都斯坦の大叛亂たらしめしは在ミーラット將校の責なりと云はざる可らず。而して當時英國と印度との間に電信の便なく此的里陷落の報の英國に達ししは實に六週間の後にあり。

第三節　叛徒の猖獗

キャンニング卿は此時に至るまで寧ろ土民兵に同情を寄せ其少數陰謀家の爲に煽動さるるを思ひ私に其無智を憐みしが的里に於ける叛徒の擧動を報告し來る遭ひ初めて事態の容易ならざるを覺り各地の聯隊に電報を發して出兵を命ず。是

より先西紀一八二四年第一次緬甸戰役の起るや在バッラックポールの土民兵は出軍を拒みしがベンガル軍の司令官スア・エドワルド・バジェットは直ちに歐洲兵を率ゐて同地に向ひ觀兵式を行ひて其巨魁を銃殺し以て事平ぐを得たり。時人司令官の苛酷に失するを議するもの多く爲に西紀一八五七年に於て同一兵營内に土民兵の抵抗を試むるものあるやキャンニング卿は努めて寛大の處置に出でしも的里にして既に叛徒の手に陷りたる以上は最早一刻も猶豫する能はず叛徒の鎮定に從はざる可らず是實に印度に於ける英國政府を維持する所以にして又多數の印度人を保護する所以なり。ベンガル省各地の兵營は相次でミーラットの例に倣ひ土民兵は先其將校を屠り其兵營を焚き其金庫を掠め相率ゐて的里に突進す但し是皆的里を本營とせる兵亂に過ぎざるが故に今一々其顚末を絮說せず。茲處には單に多少の政治上の關係を有せるラックナウ、ジャンシ並にカウンポールに於ける叛亂に就きて略叙する處あらむ。

オウドの首府ラックナウはグームチ河の右岸にありて廣袤四哩に達し理事廳は市街と河流の間にあり其附近に堡壘ありムチ・バウンと稱す。五月三日の事ありしより以來スア・ヘンリ・ラウレンスは再び叛亂の免る可らざるを感じ周到なる注意を以て之に備ふ。理事廳の一方にはオウドの市街あり其住民は國王の廢止せられてカルカッタに移りしより生計の途を失ひしもの多く皆英人を怨むグームチ河の對岸には土民兵の營所あり總數凡三千五百人其英人を憎む事市民に異ならず。二個の橋梁ありて土民兵の營所と市街の連絡を通じ一は理事廳の傍に架し一はムチ・バウンの附近に設くスア・ヘンリ・ラウレンス家族を併せて英人の非戰員を悉く理事廳に集め理事廳とムチ・バウンとの中間に哨兵を備へて兩橋を制す。而も歐洲兵は步兵五百七十人强砲兵六十人を備ふるのみ。五月三〇日の夜九時に至り土民兵果して叛を謀り火を茅舍に放ち歐人の將校を銃殺しバング酒の醉に乘じて橋梁に迫る。スア・ヘンリ・ラウレンス乘を督して之を拒ぎしかば叛徒其砲火に敵する能はず退却し營所の守り難きを見て乘を悉して的里に向ふ。スア・ヘンリ・ラウレンス市民の虛に乘ぜん事を恐れ敢て長驅せず歐洲兵を分ちて營所を守らしめラックナウに還る。土民兵中凡四分の一は叛徒に加はらざりしも叛亂中次を追ふて皆逝れ去れり。

ジャンシに於て叛亂の蜂起せるは六月四日なり。ジャンシはもとバンデルカンド一領袖の所領にして正當の繼嗣なきが爲め西紀一八五三年英領に兼併せる地なり。同市はアグラの南凡一百四十哩の地にあり守備隊は全部土民兵なりしが故に叛亂も亦極めて易し。英人は婦女小兒を合せて總數五十五人皆難を堡塞に避く。故ジャンシ王の妻なほ同市にあり英國政府の養子を承諾せず其地を奪ひしを怨み銃砲竝に象を叛徒に與へて暴舉を助く。城堡内の避難者糧食乏しく二十四時間以上抵抗を繼續する能はず。乃ちジャンシ王妃が生命を保護す可しとの誓約を信じ土民兵も亦害を加へざる可きを約しを恃み其交渉に應じて堡塞を叛徒に渡す。然るにジャンシ王妃は誓約を無視し土民兵に命じて全數を悉して英人を屠殺せしむ。

然れども之をカウンポールに於ける叛徒の擧動に比する時は亦云ふに足らず。カウンポールはガンジス河畔の市街にしてラックナウの西南凡五十五哩の地にあり。久しく英領印度に於ける緊要の衛戍地たりしがバンデャブ併呑以來大に軍略上の價値を減じ其地に舍營せる歐洲兵の聯隊は前年の終を以て西北地方に向て悉く其兵營を移す。故に西紀一八五七年五月カウンポールに屯營ししし土民兵は四個聯隊三千五百人に達ししも歐洲人は聯隊附將校と砲兵六十一人とあるのみ。指揮官はスア・ヒュー・ホキーラアにしてホキーラアは印度の軍隊に勤務する事既に五十四年百戰の老將にして時に年七十歳なり。ミーラットに於ける叛亂の報傳播し人心恟々たるや各兵營の將校はなほ其部下土民兵の忠誠を恃みしも老功なるホキーラアは部下の動靜に注目し深く之に備ふ。蓋しカウンポールに於ては非戰員の保護を要するもの極めて多く聯隊附將校の家族竝に多數の商人に加ふるにラックナウに駐屯せる歩兵隊の家族等皆カウンポールに定住ししを以てなり。即ちホキーラア將軍は曾て歐洲兵の屯營せる兵營に防禦工事を施し彈藥糧食を儲へ以て變の至るを待ちしが惜い哉工事不完全にして糧食等も亦不十分なりき。此時に當り前マアラッタ宰相の養子はカウンポールを距る凡六哩のビィスールに住し常に英人と相往來ししを以て人呼でビィスール王と稱す。其本名はダンツー・パントなるも史上ナナ・サァヒッブの名を以て行はる。英國政府は其養父に給し年額八萬磅の給與を廢ししもナナ・サァヒッブは養父の遺產約五十萬磅を得し

を以て其日常の生活は宛然一個の王侯たり。ミーラットの變報達するやナナは英人に向て他意なきを公言し五月二一日カウンポールに於て叛亂蜂起の説あるやホキーラア將軍の爲に二百のマアラッタ兵と二門の大砲とを贈る。然るに此時土民兵は未だ事を擧ぐるに及ばざりしが故にナナは親らカウンポールに赴き居を英人の傍にトして益親密の態度を裝ふ。而も其精神に於ては決して英人に對する報復の念を忘却せるにあらず。六月四日夜カウンポールの土民兵は遂に蜂起して事を擧ぐ。蓋し土民兵は莫臥兒帝家の爲にせんとするの意あるにあらず唯英人の爲に屠殺されん事を恐れ流言を信じて先んじて機を制せんとしし之のみ。恐怖の念とバング酒の醉とは暫く土民兵をして暗夜に乘じて暴行を逞うせしめしが一度其狂熱の減ずるや直ちに的里の方面に向て進軍す。ホキーラア將軍報を得て初めて其心を安んず。

然るにナナ・サァヒッブは土兵民が亂を謀り的里に向て進軍せるを見時至れりとなし叛徒を利用して英人に復讐を試み併せてマアラッタ宰相の名を以て溫都斯坦を統御せんとす。乃ち土民兵に追及し説くにホキーラアの營中財貨多きを以て

す。六月六日黎明ホキーラア將軍はナナより將に兵營を襲はんとすとの通知を得て大に驚き直ちに防禦の準備をなす。やがて土民兵も亦進擊し來りしも多數は掠奪に熱中し兵庫の彈藥銃砲も亦其有に歸す。但し叛徒中には其掠奪品を携へて陰に鄕里に歸りしものも少からず。正午に至りて土民兵の本隊はナナの從兵と相合して遂に兵營に向て攻擊を開始す。此日より六月二五日に至るまで十九日間英人は勇を奮ひて叛徒の包圍に抵抗す。時恰も酷暑の候にして太陽は鑠金の猛威を振ひて頭上に直下し守兵の困苦實に筆紙に盡し難し。暫くにして營中糧食將に竭きんとし且婦女小兒多きが故に戰員も亦決死の運動を試むる能はず。唯徒に交戰を繼續し空しく援兵の來るを待つのみ。或は熱病の爲に或は日射病の爲に或は飢渴の爲に或は銃丸の爲に斃るるもの漸く多く生存者は却て死者の幸福を羨む。

六月二五日に至り一婦人ナナの手書せる一紙片を携へ來りて營中に投ず。その文意に曰く降服せばアルラハバッドに退却するを許さむと。曾て一世紀以前バトナの地に於て英人を虐殺せるの事實は守兵をして印度人の信義の恃む可らざるを感ぜしめしも如何せむ營中婦女小兒多く又疾病に艱み負傷に苦むもの少からず

故に異議者なきにあらずと雖も衆議ナナの交渉に應ずるに決す。翌日休戰の約成り英人はその兵營と其銃砲と其財寶とを擧げて敵手に委しナナ・サァヒッブは一哩を隔てたる埠頭に至るまで英人の身體を保護し且其間に用う可き車輛とガンヂス河上に用う可き乘船を準備するを約す。六月二七日兵營内の英人は相前後して埠頭に赴き九時に至りて全員四百六十人四十隻の屋根舟に乘船し將にアルラハバッドに向て出帆せんとす。然るに突如として角聲高く響くや銃聲烈しく兩岸に起り皆英人に向て發火す。而して之と同時に乘船の屋上火を失するもの多く忽にして火炎は四方に傳播す故に此厄を脱れて下流に赴くを得しは極めて少く此虐殺の報を傳ふるを得しは僅に四人の英人あるのみ。叛徒は英人の銃丸に中りて水中に溺るる者多きを見既にして銃擊を止め生存者を悉く陸上に致し婦女小兒一百二十五人は之をナナの本營の附近に幽し男子は皆直ちに刑せしむ中に一人の新聞書を携ふる者あり許可を得て朗讀を始めしが最後の命令忽ちにして下り土民兵は乃ち其小銃を亂發し萬事茲に休す。

七月一日ナナ・サァヒッブはピィスールの王宮に赴き盛大なる儀式を以てマアラッタ宰相の位に即く。然るに回教徒はナナに心服せず陰にカウンポールにありて反對の運動を計畫す。市民は其事を擧ぐるに先ちて相率ゐて附近の村落に難を避け且英軍逆襲の説あり人心恟々たり。ナナ乃ちカウンポールに歸り黄金を散じて巧に土民兵の反對を和げ。猥りに大言壯語を放ちて虚勢を張る數日の後上流フッチグールの地に又土民兵の叛亂起り在留の英人下流の近事を知らず小舟に乘じて八十哩を航しカウンポールに至りて悉くナナの捕虜となる。ナナ面前に於て男子を屠らしめ婦女小兒八十人は之を幽する事又前の如し。大佐ニールはマドラス警備隊を引率して此時已にカルカッタを進發ししも途上ベナレス竝にアルラハバッドの叛徒鎮定に從事し直ちにカウンポール、ラックナウに赴く能はず。七月アルラハバットに於てハヴェロック將軍の大部隊を率ゐて來會するに遭ふ。ハヴェロック將軍は第一次緬甸戰役以來從軍の數々回に上りし老將にして恰も波斯戰役に於て赫々の功を奏し印度に歸着せるを以て人望極めて盛なり。七月七日將軍ハヴェロック歐洲兵竝にシク兵二千人弱を率ゐてアルラハバッドを去り而カウンポールに向ふ。一二日叛徒竝にマアラッタ族の大軍をフッチポールに破り一五

日更に二度戰ひて二度克ちカウンポールを距る二十二哩の地に至りて舍營せんとす。然るに婦人小兒等未だ叛徒の捕虜たるものあるを聞き夜中更に十四哩を進軍す。此夜ナナは叛徒の敗れて歸りしものより英軍の動靜を聞きて復讐を捕虜の上に加へんと欲し或は劍を以て或は斧を以て二百の婦女小兒を屠らしめ翌朝其死骸を悉く附近の井に投ず。一六日午後二時英軍再びカウンポールに向て進み行く事二哩にして敵軍に會す。叛徒總數五千に達し且二個の砲臺を有ししも英軍は其數僅に一千三百に過ぎずして一人の騎兵なく砲兵も亦云ふに足らず。故に敵の砲臺を沈默せしむることを得ざりしを以て歐洲兵に命じて突貫を試みしむ。歐洲兵彈丸雨下するの間を猛進ししが故に叛徒久しく屈せざりしも遂に背進す。而も騎兵の之を驅逐するものなし。翌日ハヴェロックは兵を進めてカウンポールに入り初めて捕虜虐殺の慘狀を目擊ししも叛徒は已に遁れて隻影なし。乃ちビィスールに進みナナ・サァヒッブの宮殿を破壞す。間もなく將軍ニール援兵を以てアルラハバッドより來着ししかば七月二〇日ハヴェロックはカウンポールの事をニールに託してラックナウの救援に赴く。

是より先オウド全省の土民は皆起て叛徒に應じ五月三〇日の事ありしより以來相率ゐてラックナウの攻擊に加はり其數五萬に達す。蓋し地主はスア・ヘンリ・ラウレンス赴任以前の苛政に激し土民兵の除隊されしものは鄉里に歸りて同志を煽動し無辜の農民も英人の保護を受くるによしなく再び强盜の苦むる所となりしより皆難を地主の城塞に避け其叛逆を助くるに至りしなり。スア・ヘンリ・ラウレンスは叛徒攻擊の初より斷乎として曰く決して降服せずと而してカウンポール虐殺の報は守兵をして益此決心を堅からしむ。七月二日ムチ・バウンの守を撤し守兵悉く理事廳に集る。七月四日敵彈飛ぐスア・ヘンリ・ラウレンスの傍に破裂し既に負傷せるラウレンスは遂に瞑目す。死に臨みて左右を顧みて曰く決して降服する勿れと。七月二〇日叛徒はハヴェロック將軍のカウンポールに進軍せるの報を得理事廳を圍む事頗る急なりしも守兵頑として降らず。時にハヴェロック將軍はオウドに向て進軍を開始ししも軍中虎刺拉竝に赤痢猖獗を逞くし且敵兵の大軍を以て前途を扼するあり八月中旬已むを得ずカウンポールに退却す。カウンポールに於ては將軍ニールはナナが再び大軍を以てビィスールを陷れて右翼に迫り更

に敵の大部隊左翼に陣するあり恰も死地に陷りし際なり。八月一六日ハヴェロック將軍一千五百の兵を以てビィスールに向ひしにナナ・サァヒッブの帷幄にマァラッタ族の婆羅門タンチア・トピなるものありよく軍略に通じ軍隊の配置大に見る可し。故に最初の砲戰に於ては英軍も亦勝利を得るの望なし。二十分の後ハヴェロック將軍は遂に突貫の令を下ししに果して功を奏し叛徒四散す。而も英軍騎兵を備へず以て之を驅逐するによしなきが故に再びカウンポールの本營に歸る。

第四節　叛亂の鎭定

初め土民兵の事を起すや恰も晴天に霹靂を聞くの姿ありしを以てマァラッタ族並にラジプート族の諸王侯は其眞相を窺知する能はず或は形勢を觀望する者あり或は最初より進て英人を助くるものあり。但し其領内に駐屯せる土民兵に至りては孰れも新藥莢に向て恐怖の念を抱き五月一一日の的里の變以來頗る動搖す。グワリヨル駐屯隊はオウドの出身者多く一度不穩の色ありしも大王シンヂアの說諭に從ひ一〇月まで動かざりしがインドールなるホルカルの隊は蜂起して英人の理事廳を襲ひアグラ附近に赴きて叛徒に投ず。蓋し五月一一日以後四箇月間的里は世人注目の中心點となり其回復と否とは實に英領印度政府の死活を決するの力あり。大英臥兒は半世紀以上宛然一木乃伊に過ざりしも今やバハヅル・シャは叛徒に擁せられて印度獨立運動の代表者となり親ら將士を督勵して大に爲すあらんとす。而して的里の東南二方面は至る處に土民兵の蜂起するありしを以て英軍は速に叛徒の此首都に進む能はず。然るに幸にしてバンヂャブの地既に英領となり剛毅果斷なるスア・ジョン・ラウレンスを知事に戴きしを以て駐屯土民兵の叛徒に應じしものは容易に鎭壓されしが上にシク族は深く英人の施政の周到にして而も寛大なるを喜びしかば進で叛徒征討の任に當らん事を乞ふ。故に的里回復に當りバンヂャブの寄與せる處極めて多し。但し叛徒鎭壓に當りて採用せる手段は頗る殘酷にして第二十六聯隊の如きは隊を擧げて刑に行ひしと云ふ。

六月八日司令長官スア・ヘンリ・バァナァド漸く的里を距る約十哩のアリボールに陣地を進め先敵の先鋒隊を破りて的里市外の衞戍を回復す。而も容易に同市を陷るる能はざるを以て見れば叛徒は守城に勇にして野戰に怯なりしか。的里の防禦

區域は三平方哩の面積を占め廻らすに厚さ約十二呎の城壁を以てし一定の距離を隔てて鋒頭砦を設け之に大砲十一門を備へ且四砲臺を點在せしめて以て側面砲擊を助く。鋒頭砦と連牆との壁脚には十五呎乃至三十呎の平場を廻らし其極まる處に銃眼を備へたる小壁を設け更に廻らすに深さ二十呎幅二十五呎の城濠を以てす。ジュムナ河は市街の東端を流れ王宮はジュムナ河に濱す。城門七個あり的里門より王宮に至るを市内第一等の市街となし其背にジュマ・マスヂッドと稱する大回教寺院あり。英軍の衛戍地の最高點に於ては能く城内を俯瞰するを得可く其右端に當り城壁に最も接近せる地に於て丘上に砲臺を設けモーリ門と相對す之をマウンド砲臺と稱す。マウンド砲臺の右に郭外の舊市街ありスプヂ・マンヂと稱す莫臥兒帝國の盛時に於て青物市場たりし地にして通路狹く牆壁高く最も土民兵の陣地に適す。土民兵は常にかかる陣地にありて神出鬼沒以て英軍を惱ましなり。

衛戍回復後數週間英軍は進で的里市を攻むる事能はず却て叛徒の攻擊を受く。殊に六月二三日プラッシー戰役百年紀の日に於けるが如き叛徒は死力を盡して衛戍を拔かんとし先スプヂ・マンヂより英軍の右翼に向ふ盡しマウンド砲臺を陷れ而して後大に爲すあらんと欲すればなり。然るに其成功の難きを見るや終にスプヂ・マンヂの巷戰となり叛徒潮の如く大軍を以て英軍に向ひ日沒に至りて初めて退く。叛徒仆るる者八百英軍の死傷亦百六十人に達す。其後八月中に至るまで數、此種の巷戰を見しも既にして英軍の援兵益、加はり叛徒の運命も亦遠からずして定まらんとす。

八月中旬旅團長ジョン・ニコルソンは部下の軍隊と共にパンヂャブより來り九月四日砲兵の一隊又フィロッツボールより着す。茲に於て衛戍の英軍八千人以上に達す。乃ち五十四門の大砲を四個所の砲臺に配置し九月八日より一二日に至るまでカシュミル門の方面に向て砲擊止まず。かくて一四日午前三時を以て總進擊に決し先兵を四隊に分ち第一隊は旅團長ニコルソン之を引率し第二隊は旅團長ジョーンス之を指揮し第三隊は大佐カメル之が長となり第四隊は遊軍となして旅團長ロングフィールド之が將となる。ホーム竝にサルケルドの兩少尉奮然身を挺して火藥を加へてカシュミル門を粉碎し第三隊其機に乘じて直ちに城内に入り

ジュマ・マスヂッドに向て進む。第一隊はカシュミル門の附近に於て連牆を攀ぢて侵入し且戰ひ且進みてカブール門に向ひ第二隊と相會す。蓋し旅團長ジョーンスはウォータア鋒頭砦の邊に於て城壁を攀ぢて此處に至りしなり。而して叛徒は多く屋内に潜みて英軍を射擊ししかば是より激烈なる巷戰となりジョン・ニコルソン、亦カブール門の附近に於て重傷を負ふ。巷戰七日にして土人の兵器を携帶せるものは悉く殺戮され九月二〇日英軍遂に莫臥兒王宮の城門を破りて闖入す。然るに老王バハヴル・シャは既に市外の靈廟所謂フーマユーンの廟中に難を避け王族一人の宮中に止まるものなし。翌二一日大尉ホッジソン一隊の兵を率ゐてフーマユーンの廟に赴き老王竝に其家族を捕らへて歸り之を王宮に幽す。翌日更に百名の騎兵を從へて赴き王の二子を捕らへしが將に的里に入らんとするに當り土民群を爲して王子の乘車を圍みしかばホッジソン乃ち親ら二王子を銃殺し其死屍を城壁に曝す。茲に於て的里の帝都英軍の有に歸す。英國より派遣ししし援軍の未だ來着せざるに方りて此偉功を奏す司令官旅團長キルソンの得意想ふ可し。而も攻擊を開始ししより此時に至るまで在的里の英軍は其死傷四千人に及びしと云ふ。

的里の陷落は土民兵の叛亂に致命の打擊を與へ其根據地は英人の掌裡に落ち莫臥兒王は一俘虜と化せしも未だ叛徒は全く其跡を斂めしにあらずラックナウの英軍は重圍の中にありオウド、ロヒルカンド地方騷亂なほ舊の如し。八月中旬將軍ハヴェロックは一度ラックナウの救援を企て半途にしてカウンポールに歸りしが五週間の後更に再擧を謀る。此時新任司令長官ス・コリン・カメルは既にカルカッタに着し九月一六日スア・ジェームス・ウートラムは一千四百の兵を率ゐてカウンポールの英軍に合す。『印度のバヤール』と稱せられしウートラムは身上席を占めしにも拘らず謙退してハヴェロックの號令を受く。かくて九月二〇日將軍ハヴェロックは二千五百の英軍を率ゐてガンヂス河を渡りオウド省に侵入す。翌日叛徒の前途を遮るに會ひ先伐て之を破りウートラムは敵の大砲四門を奪ふ。二三日ハヴェロックはラックナウの郭外アラムバクに於て叛徒の大軍を攻め遂に之を擊退す。翌日士馬を休養して其鋭氣を養ひ二五日進みてラックナウの市内に叛徒と戰ふ。激烈なる巷戰數時間に亘り英軍の損失五百人に近く大佐ニールも敵彈に仆れしが此日の夕に至りてハヴェロックの援軍は遂に理事廳に入りて守兵と

合するを得たり。

ラックナウの籠城談は英國史上著名の事蹟にして英人談此事に及べば常に得意の色あり。殊に婦女子が身の危きを忘れて負傷者の看護に從ひ其他如何なる勞をも辭せず以て士氣を鼓舞しし勇氣に至りては最も賞す可し。四箇月間守兵は更に外界の近狀を審にせず九月二三日に至りて初めてアラムバク方面に砲聲を聞く。二五日に至りて市民の動搖烈しきを望見ししも叛徒の砲擊は寸時も止まず。然るに間もなく市内に銃聲起り援軍の叛徒と相戰ふもの理事廳にありて分明に指點するを得るに至りしかば守兵は喜極まりて手の舞ひ足の踏むを覺えず負傷者も其痛を忘れて衆と共に歡呼す。かくてハヴェロックは其目的を達するを得しも叛徒はなほラックナウの市街に駐屯して退かず理事廳を圍む事舊に異ならず。スァジェームス・ウートラム指揮の任に當りしも進擊の擧に出る能はず。然るに此間援軍陸續として英國より來着ししかば一一月スァ・コリン・カメルは大軍に將としてカウンポールに着し將軍キンドハムを止めて同地を守らしめ親ら五千の兵と三十門の大砲とを以てラックナウに向ひ行。叛徒の要塞を下し遂に理事廳に入りて婦女小兒をはじめ悉く守兵を援ふ。但し叛徒は未だ市街に據りて下らざるを以てウートラムをして四千の兵に將としてラックナウの附近に陣せしめ師をカウンポールに班す。翌日卽ち一一月二四日將軍ハヴェロック赤痢病の爲に仆れアラムバクに葬らる。其報一度公にせらるるや知ると知らざるとを問はず將軍の死を悼まざるものなし。

スァ・コリン・カメルの軍、將にカウンポールに歸着せんとししに偶ま同市の方面に方りて砲聲の轟々たるあり。是より先ナナ・サァヒッブの部將タンチア・トピ武略あり親らシンヂアの首府に赴きグワリヨル駐屯隊を煽動して公然叛旗を擧げしめ之を率ゐてカウンポールに進軍す。將軍キンドハムは曾てクリミアの戰役に於て驍名を博ししも東洋の戰役に熟せず。叛徒の進軍するを見て直ちに之を邀へ擊て其前衛を破りしが爲に全くタンチア・トピの術計に陷りカウンポールの市街を擧げて敵手に委し僅に市外の兵營を守る。然るに幸にしてガンヂス河上の船橋は未だ敵手に落ちざりしかばスァ・コリン・カメルは無事兵營に入るを得たり。乃ち先ラックナウの守兵をして負傷者病者を護してガンヂス河を下りてアルラハバッド

に赴かしめ次でグワリヨルの叛徒に向て攻勢を取り遂に之をカウンポール市外に驅逐す。此役大佐スア・キリヤム・ビールの指揮せる水兵隊最も殊功を建てしと云ふ。スア・キリヤム・ビールはスア・ロバルト・ビールの子なり。

西紀一八五八年一月的里に軍法會議を開きて廢王バハヅル・シヤを審問し基督教徒の虐殺を命じ英國政府に宣戰せるの罪を以て死刑を宣告す。但し此宣告を實行せず其妻子と共にラングーンに配流し國事犯罪者として待遇す。其後五年にして王は遂に配所に殂す。王の判決確定せるより各地の叛徒は前後鎮定に歸しスア・コリン・カメルは功を以てクライド卿となり大舉してオウド竝にロヒルカンドを平定しスア・ジヤン・ウートラムはラックナウ市外に叛徒を驅逐しオウド省の首府を回復す。之と同時にスア・ヒュー・ローズは孟買兵を率ゐる將軍ホキットロックはマドラス兵を率ゐる中央印度竝にブンデルカンドの叛徒を征服す。殊にスア・ヒュー・ローズは寡軍を以て險阻の地を行進し孟買領よりジュムナ河岸に至る各地の要塞を下す其功極めて大なり。時にタンチア・トピ、ジヤンシにありて王妃を助けしかばスア・ヒュー・ローズ之に赴き攻めて之を拔く。王妃は林藪中に遁れタンチア・トピは更に東北に走りジュムナ河畔のカルピ附近に於て二萬の叛徒を擁す。スア・ヒュー・ローズ轉じてカルピに向ひ交戰數回に及び遂に叛徒を四散せしむ。乃ち思へらく中央印度復要ふるに足らずと壯快なる告文を發して部下の士卒を慰勞す。

然るにタンチア・トピは未だ其意氣を沮喪せず此時宛も大王（マハラジア）シンヂアの首府グワリヨルに向ひ密行中にして將に叛徒を同地に糾合して大に爲すあらんとす。大王シンヂア此計畫を探知し宰相ヂンカル・ラヨの注意を顧みず親ら兵士八千大砲二十五門を以て叛徒の軍に向ひしが士卒或は叛徒に應じ或はグワリヨルに歸り唯親衛隊の奮戰せるあるのみ大敗してドールポールに走る。茲に於てグワリヨル市は其兵器糧食を擧げて悉く叛徒の有に歸しナナ・サヾヒッヾは再びマヾラッタ宰相の位に就く。タンチア・トピ一萬八千の大軍に將として中央印度に據る時に西紀一八五八年六月なり。スア・ヒュー・ローズ事態の大なるに驚き直ちに叛徒の征討に當り其一六日を以てモラールの要塞に克ち翌日旅團長スミスの隊と相合し一八日に至りて悉く叛徒の據守せる城塞を拔く。此戰役中ジヤンシの王妃は男裝して叛徒と共に戰ひ遂に戰死す。タンチア・トピはなほ屈せず六千の兵士を率ゐる三十門

の大砲を携へグワリヨルを棄てて走りしが二日の後旅團長ロバート・ナピエアーの引率せる六百の騎兵に追擊せられ悉く其砲門を失ふ而もタンチア・トピは西部德干に赴きてマアラッタ帝國を再興するの初一念を翻へさずナルブッダ河を渡りて南せんとししが孟買兵に妨げられて進む能はず以後或はラジプータナに走り或はブンデルカンドに歸り神出鬼沒中央印度の地に於て英軍の追騎を惱まししが西紀一八五九年四月に至り其部下に英軍に內應するものあり遂に少佐ミードに捕へられ糺問の後絞罪に行はる。茲に於て叛徒の遺類全く盡く。盡しタンチア・トピは勇敢にして奇智に富み眞に舊時のマアラッタ宰相の風ありナナ・サハヒッブの如き實に其傀儡たるに過ぎざりしなり。七月八日キャンニング卿叛徒鎭定の告示を發し其二八日を以て謝恩の日と定む。

第五節　英國王室の印度直轄

土民兵の叛亂は痛く英國識者の腦髓に刺擊を與へ東印度會社をして印度を統轄せしめ而して英國政府をして之を監督せしむるは徒らに責任の歸する所を曖昧ならしむるものなるを覺らしむ。茲に於てか西紀一八五三年の初に當り英國政府は會社の政權を擧げて王室に移すの議案を提出ししが既にして內閣交迭の事あり同年八月二日に至りて初めて同性質の新法案兩院を通過して法律となる。印度政府改善法なるもの卽ち是なり。一一月一日總督キャンニング卿アルラハバッドに赴きて英國王室の親政を公布し普く各種の通用語に勅諭を飜譯して土民に諭告す。抑も英國東印度會社は最初一の商事會社に過ぎざりしも西紀一六二四年在東洋の社員に對し司法權を行使するの許可を得其後西紀一六六一年四月三日の新免許狀に於て基督敎國以外の諸國に對し宣戰媾和するの權と免許狀なくして通商するものは之を捕獲して本國に送付するの權を得しを以て優に一國の政權を其掌裡に收めしが後には却て政務を其本分となすに至り西紀一八一三年には印度通商の特占權を悉く失ひ其後支那通商の特占權をも失ひ商事會社の痕跡を留めざるに至り最後に會社は全く廢止さるるに至れり。是より英領印度總督は英領印度太守となり會社の軍隊は政府の軍隊となり會社の控訴院は政府の上等法院に合併せらる。而して本國に於ける監督局も亦廢止せられ新に印度事務省を置

き代て其事務を執らしめ且從來取締役會に屬せる事務をも總轄せしむ。以後英國內閣員に印度事務大臣なるものを見ることとはなれり。

キャンニング卿がアルラハバッドに於て公布せる勅諭は東印度會社の廢止を宣言するに止まらず土民に向て總て位階習慣條約等を尊重す可きを約し宗教竝に族制に干涉するの意なきを明にし且英人の屠殺に干與ししものの外悉く叛徒の罪を問はず大赦を行ふ可きを誓ふ。是より先同年三月三日キャンニング卿はオウド省戰後の處分に關する告示を發し同省の地主が叛徒に與みしを以て其二心を懷かざりしもの六人を除き悉く其土地所有權を奪ひしかば監督局長エレンバルー卿をはじめ英國朝野の反對を招きしがキャンニング卿の告示は着々として實施せらる。蓋し此問題の有名なるは英國議會の大問題となりしが爲なり。西紀一八五九年一月キャンニング卿はオウド省の叛亂鎭定の報告をクライド卿より得て之を公布す。亂後オウド省人民の兵器携帶を禁じて之を政府に收めしに大砲六百八十四門小銃十八萬六千挺に達ししと云ふ。此年冬キャンニング卿アグラに赴きて土侯を招待し叛亂中の勞を犒ひ且將來土侯に養子を許可す可きを誓ふ。翌年

新任印度政府財務部長キルスン印度に赴き戰後の財政を整理し功績あり。財務部長の職は此時初めて設けられしものなり。キャンニング卿は思慮愼密にして行動溫厚なりしかば卿を呼びて『寬仁なるキャンニング』と稱し攻擊を加ふるもの少からざりしも卿の行政上の技倆は漸く現はれ來り西紀一八六二年三月を以て本國に歸り其六月を以て死するや時人皆其短命を惜む。

英國の公使として支那に於て令聞を博ししエルヂン卿代りて英領印度太守となる。卿は西紀一八六二年三月一二日を以て就職し翌年一一月三〇日西北諸州巡回中ヒマレヤ山麓のダルムサルラに於て病死ししかば在職の期極めて短きも彼のインダス江西境上の部族と交涉を起し又ブータンに使節を派遣ししは當時の事なり。此西方竝に北方の交涉事件は後に大事件となりしを以て次節に於て詳述す可し。英國政府は印度の現狀警戒を加ふるの必要あるを見其實情に精通せるスア・ジョン・ラウレンスを擧げて印度太守となす。是實に慣習に反するものにして前年スア・チャルス・メットカルフ施政の日より東印度會社々員を以て總督卽ち太守に任ぜざる事と定まりしなり。但しマドラス巡撫スア・キリヤム・デニソン假攝太守と

して直ちに政務を執り西紀一八六四年一月ラウレンスのカルカッタに着任しし時は西北境上の交戰は既に平定す。ブータン交渉事件を除きラウレンスの施政中最も注意す可きは印度首府移轉問題、孟買地方經濟上の恐慌、ヲリッサ省の飢饉等これなり。

ラウレンスの任に印度に赴くに當り別を首相バルヤアストンに告ぐるや印度政府移轉問題は其談話に上りしと云ふ。此頃カルカッタを以て既に首府として價値なきものなりとなすの議論は至る處に行はれしがラウレンスは之を以て然らずとなし敢て之に聽せず。蓋し同市は海洋に近しと雖も防禦する事難きにあらず且同市の附近は最も殷富の地にして英國商人の在留する者極めて多きを以てなり。但し夏秋の際に於てはカルカッタの氣候酷烈なるを以て此期間に限り太守以下評議官各政務部長等皆其居をヒマレヤ山麓のシムラに移し同地に於て政務を執る事となす。是より以後各太守皆此例に沿ひ以て一種の慣例となる。孟買地方經濟上の恐慌は其原因に溯りて之を論ずる時は米國南北戰爭の結果にして當時南部諸州の貿易全く絶え棉花の供給俄然として中止ししより英國機業家は之が缺乏を補はんとして印度の市場に注目し爲に孟買に於ける棉花の輸出額は一年間に四千三百萬磅より六千三百萬磅に增加す。是西紀一八六二年乃至六三年の事なり。之に加ふるに鐵道敷設、歐洲資本の輸入、戰後一般囘復等の影響を以てし農產物等の價格急に高騰し爲に各種の企業熱は極めて昂騰し海岸埋立を計畫せる一會社の如き千磅の株券一萬二千磅以上の賣買を見るに至る。故に之が反動は又極めて甚しく西紀一八六六年の大恐慌を生じたるなり。この年ヲリッサ省に起れる飢饉も亦著名の事件にして是より先雨季に際して旱魃に遭遇する事既に二年に及びしも地方官は之を等閑視して警戒を加へずこの年復び旱魃の災あり百穀登らず次で年の末に至り大洪水あり其僅に登りしものを悉く流失す。この飢饉に於て土民の仆れしもの實に二百萬人に達ししと云ふ。曩にキャンニング卿施政中西紀一八六〇年より六一年に掛けてはジュムナ、サットレジ兩河の間に飢饉あり五十萬の生靈を仆す。熱帶地方の天與は極めて大なるものありと雖もその天災も亦頗る恐る可きものなり。

西紀一八六九年ラウレンス任滿ちてメイヨ卿代りて太守となる。卿の就職前後よ

り阿富汗交渉事件は益重大となりしも其詳細は第五章に詳述す可きを以て略して言はず印度鐵道速成の計畫を立て從來の軌間五呎六吋に代ふるに三呎三吋の狹軌を用ゐるの議を建てしはメイヨ卿なり。卿は亦緬甸地方に注目し西紀一八七二年の二月を以てラングーンに赴きて人民の歡迎を受け滯留する事一週間にしてモールマインに至り更に軍艦に乘とてアンダマン島に向ふボート・ブレーアの罪人追放地を視察せんが爲なり。初め卿の未だカルカッタにあるや回教徒中不穩の擧を謀るものあり其重なるものを捕へて糺問を加へしに其公判の當時判事の一人暗殺せられしを以て卿の此行頗る警戒を加へしが同地の視察を卒へて今や埠頭に達せんとするに際し時恰も黄昏にして物色を辨ず可らざるに當り突然囚徒中の一阿富汗人躍り出でて劍を卿の體に加へ立ろに命を奪ふ。此囚徒はペシャワル附近の回教徒にして曾て英人を害して流罪に處せられしものなり蓋し卿を仆して以て英國政府に怨を報ひんと欲ししなり。時に二月八日なり。マドラス巡撫ナピエアー卿假に太守の事を行ふ。

既にしてノルスブルック卿メイヨ卿に嗣ぎリットン卿又ノルスブルック卿に代る。ノルスブルック卿の在職中下ベンガルに飢饉あり(西紀一八七四年)リットン卿施政の初には南方印度に飢饉あり孟買地方に於ては更に之に繼ぐに鼠害甚しかりしも前年のヨリッサ省に於けるが如く慘狀を呈するに至らず。リットン卿就任の翌年即ち西紀一八七七年一月一日卿は英國女王ヰクトリア陛下が自今以後印度皇帝と稱す可き旨を的里の舊王宮に於て公布す。西紀一八六九年には皇子エヂンバラー公印度に至り西紀一八七五、六年の交には皇太子即ち今のエドワルド七世親ら印度に行啓し印度の諸王侯竝に人民と英國王室との間は漸く親密の情を加へしが此的里の公布出でてより土民兵叛亂當時の事件は全く忘却せられ同市は英國王室と離る可らざる歴史的關係を有するに至る。思ふに英國女王の印度皇帝の位に即きしは英領印度の歴史中一時期を劃するものと見做す可きなり。

第六節　シタナ征討竝にブータン戰役

回教徒の一派に其清淨派とも稱す可きワハビ族なるものあり一に開祖摩哈默の教を奉じてコーランの註釋を斥け日常の行爲嚴肅を以て聞ゆ。エルヂン卿在職中

パトナ在住のワハビ族不軌を謀りて發覺ししが其インダス江西境上の同部族と相共に計畫せるの形跡あり。スア・ジョン・ラウレンスを擧げて卿の後任者となしは實に此回教徒の一齊蜂起に備ふるが爲なり。抑もインダス江西英領印度の境界は西紀一八四九年に於て確定せるものにして北はヒンヅー・クーシュ山脈より南シンドに亘るスレーマン山脈卽ち是なり。此山地の住民は阿富汗人に類し其性殘忍にして又蒙昧なり。曾て政府を備へず各部族の事務はジルガァと稱する長老會議之を統轄す。居常必ず兵器を携へ好みて之を弄し以て其蠻行を恣にするも一度他人種の攻擊を受くるや皆舊怨を忘れて協同して之に向ふ。ランジイト・シングの時より常にバンヂャブ地方に出沒して良民を苦めしが同地の英領に歸するや最初の六年間に於て山地に遠征を出す事十五回に及び、ダルフージー卿はバンヂャブ混成軍隊なるものを組織して以て之に備ふ。英領の境上中最も重要なるはペシァワル州にしてカブール、インダス兩江の會點に於けるアットック城より西方カイバル越の門戸に至るまで皆之に屬す。故にペシァワルの守備は極めて嚴なり。アットックの北方四十哩の地にシタナと稱する部落あり海拔八千呎に達するマハバン嶺の東麓に位し西紀一八三一年頃より前後ベンガル地方より移住せるワハビ族之を占領す。パトナ地方の同部族は常に補充員と資金とを一千二百哩の遠きよりシタナに送り其英領蠶食の擧を助く。西紀一八五八年ペシァワル駐屯隊の指揮官將軍スア・シドニー・コットン一度之を攻めて山北のマルカに擊退ししが西紀一八六二年に至りて復びシタナの故地に歸り英領を侵略すること故の如し。

西紀一八六三年將軍スァ・ネヂル・チャムバァレン英軍五千を引率してワハビ族の征討に向ひマルカ、竝にシタナの地方を掃蕩せんとす。而もシタナを占領して然る後に八千呎の高山を超へて進軍するは極めて難事たり。乃ち路をマハバン嶺の西麓なる狹隘の峽路アムベイラ越に取りて後方のマルカを襲はんと決す。然るにアムベイラ越の一方には嶮岨なるグルー嶺屹立し其山後にはボナール族スワト族等の勇猛なる部族之に住す。殊にスワト族のアクフーンドと稱する酋長は一面法主の職を兼ね資性殺伐にして戰爭を好み遠近の諸部族皆其命を奉ず。而してアムベイラ越は英領以外にして實にボナール族の屬地たり。然れども英人所謂らくスワト族のアクフーンド以下阿富汗種族の諸部落はワハビ族と相容れず必ずや英

軍の擧を妨げざる可し。加之アムベイラ越は僅に九哩に過ぎざるを以てボナール族等の兵を出すの遑なき間に乘じてよくマルカを平定して凱旋するを得可しと。何ぞ圖らむワハビ族の敏捷なる既に英軍遠征の擧を偵知し書を附近の部族に送りて英人の計畫を豫報せんとは。且其書に附記して曰く英人は必ずや言はむ進軍の目的はワハビ族を殲すが爲なるのみと而も一度山地に進軍せば各部族は皆運命を余輩と同うせむと。將軍チャムバァレン附近の各部族にマルカを掃蕩するの外他意なきを告げ回答を待たずしてアムベイラ越に入り。圖らず敵の術中に陷る。進みて峽路の三分の一を經しが輜重續かざるを以て暫く軍を停め一隊の兵を派して前途に横はれるチュムラの谿谷を偵察せしめしにグルー山中至る處守備嚴にして偵察隊僅に身を以て脱れ歸る。

初めボナール族は英軍の侵入し來るを見てワハビ族の豫報全く的中せるに驚き且其長老會議の承諾を經ずして突然此擧に出でしを怒り兵器を携へて各地よりグルー山嶺に集まる。スワト族のアクフーンドも一萬五千の士卒を率ゐて親ら來會す。乃ちマハバン嶺附近の諸部落は擧てワハビ族と共に英軍の侵略を防がんとす。要するに將軍チャムバァレンは左右に敵兵を受け後陣には騾馬駱駝等輜重隊の歸路を阻ぐるあり進退全く窮す。故に力を盡して敵兵と戰ひ援軍の來るを待ちしが援軍來らず退軍の命令を期せしも命令來らず。既にして將軍チャムバァレン重傷を負ひ軍氣益衰ふ。エルチン卿が死去しし以來恰も此頃なり。グライド卿に代りて司令長官となりしスァ・ヒュー・ローズ斷然退却の議に反對しラホール駐屯の軍隊に命令して直ちに赴援の程に上らしむ。假攝太守スァ・キリヤム・デニソン評議官の議を斥けて司令長官の處置を追認す。將軍ガルヴォック、將軍チャムバァレンに代りて約九千の士卒を率ゐ一二月一五日ラルーに於ける敵の陣地を襲ひ激戰の後敵兵を走らす。翌日黎明直ちにアムベイラに進みしに敵の大軍は山上の要塞を守り其一隊留りて英軍を迎へ接戰せしが支ふる能はずして退却す。ボナール族茲に於て終に英軍に降り且其一隊はマルカ征討に從軍せん事を乞ふに至る。然るに大兵マルカの部落に至るや住民は遁れて隻影をも止めず火藥庫は爆發せられ家屋も大半燒亡せり。二五日英軍チュムラ谿谷を棄てて歸路に就く。是より暫く同地方又溫德斯坦種族卽ちワハビ族の患を聞かず。

然るに西紀一八六八年に至りてバトナ地方並に南印度のソハビ族は更にパンヂャブ境上の阿富汗種族を教唆して英領を襲はしむ。其煽動に應じしはマハバン嶺の北に當れるブラック山中アグロール河流域に住せるハッサンヂイ族にして先巡査駐在所に襲撃を試みて以て敵意を表す。將軍ワイルド征討の任に當り一〇月三日二旅團の兵に將としてオーギーに進み七日に至るまで交戰止まずバラリ！サイヅなる者の領邑を破壞す。茲に於て英軍の軍威を懼れて降を乞ふもの多く其後抵抗を試みしものは悉く敗軍し一〇日に至りてブラック山中の部族悉く平定す。此ブラック山中の役はシタナ征討と原因を同くし且ラウレンス施政中の事件なるを以て此に附記す。但しラウレンス施政中の大事件は固よりブータン戰役也。

ブータンはネポールの東、ヒマレヤ山脈中の小國にして地勢はネポールと同じく西藏高原の南端に横はり二百年前より一度西藏の屬地たりしが同政府の衰へしより獨立國となる。ブータンの住民はラプチー種族と稱し韃靼種族に類する所あり其宗教は墮落せる佛教にして數千の僧侶は寺院に住して遊惰の生活を送り一般人民の困苦を顧みず。かくの如く僧侶の權力盛なるを以て其政府の組織は上に

二人の長官を戴く法主並に君侯即ち是なり。法主はダルマ・ラジャと稱し神の權化にあらずして達磨即ち法の權化なりと信ぜらる。君侯はデブ一にデブ・ラジャと稱し其位地ダルマ・ラジャの下にあり而して印度の古傳說に於ける提婆即ちラジャを代表す。ブータンの地は行政上別ちて三州となし知事をペンローと稱す。西部ブータンの知事をパロ・ペンロー、中部ブータンの知事をダカ・ペンロー、東部ブータンの知事をトンソ・ペンローと云ふ。此三知事の命を受けて城塞を守るものをジュンペンと唱え最下級の官吏をジンガッンと呼ぶ。然れども ブータンの政體と雖も亦立憲體の組織を備へざるにあらず。即ち兩ラジャを助けて政務を評議する一團の議官あり、ダルマ・ラジャの書記長、首相、判事長、滯京中の知事、ジュンペン三人即ち是なり。

英人が初めてブータンの君侯と條約を締結して親交を盟ひしは西紀一七七四年の事なり。初め西紀一七七二年ブータン人ベンガルの屬地クチ・ベハルを襲ひしより大尉ジェームス其地の領主の請求によりてブータン人を擊退ししが此年に至りて西藏の攝政 Teshu Lama の調停によりて和約を見るに至りしなり。然れども其

以後ブータンの官民は或は突然英領の村落を襲ひて其財產を掠め或は徐々として之が兼併の政策を施し天險を恃みて暴慢至らざるなし。印度政府は領有權に付きて紛議を起せるアッサム領に對しブータンに向て年々一定の金額を拂ひ以て其侵略を中止せしめんと謀りしがブータン政府は賠償金を受けて侵略を止めず。エルヂン卿太守たりし時ベンガル地方官の建議を容れてブータンの首府プーナカに使節を派し同國政府と直接に交渉せしむるに決す。西紀一八六三年一一月アシュレー・イーヂン任に當り先土人を使節としてデヴ・ラジャの許に遣し其使命を通じしにデヴ・ラジャ答へて曰く事件極めて小なり將に下級の官吏を派して紛議を決定せしめんと而して下級の官吏遂に來らず。故に使節は遂にダルジーリングを發じてプーナカに向ふ。時にブータンに於ては恰も政變ありデヴ・ラジャ其位を失ひて一寺院に入りしが西部ブータンに於ては內亂未だ止まず。パロ・ペンロー、前デヴ・ラジャに黨し革命派に與みせるダリムコートの城守を圍みしが英國使節來るの報に接し退軍す。故にダリムコートの城守は大に使節を優待ししが忽にして劣等人種の本色を現はし之が經費の支辨を求む。既にして新デヴ・ラジャは書を使節に送りて使命を城守に告げん事を求めしが使節應せずブータン政府の長官と談伴せん事を主張して拒げず。

ブータンの如き未開國に使節を派するに當り其國內黨派の關係を審にせず殊に其一派に黨せしむるが如き無謀の舉たり。而も當時の假攝太守スア・キリヤム・デニソンは使節に訓令を下して革命派の城守の助を得て新政府と交渉せしむ。而てブータン政府の眞意を測るに英國使節と協議して條約を締結し以て其行動を束縛するを欲せず。使節の運命も亦定まれりと云ふ可し。ダリムコートを發するの後使節は偶々新デヴ・ラジャより城守に宛てたる書狀を得しに其一は公信にして城守に向て使節と紛議に關する談判を開かん事を命じ其一は私信にして城守に嚴命し使節をして決して國境を越ゆる事なからしめんとす。使節のプーナカに至るやブータン政府は虐待至らざるなく使節を强迫して單獨に起草せる一條約に調印し領有權に付きて紛議を起せる部落を擧げてブータンに還付するを約せしむ。故に英國臣民の受けたる損害の賠償竝に誘拐せる臣民の還付等は一も交渉するを得ずアシュレー・イーヂンは何等の效をも奏する能はずプータン政府中專ら此强

硬政策を主張せるは革命派の主領トンソ・ペンロートにしてダル・ヤ・ラジャは其全能の力を振ひて惡魔を放ち以て英人を苦めんと揚言す。

此條約を破棄せんと欲せば唯戰を宣するの一法あるのみ。西紀一八六四年一一月一二日領有權に對して其後紛議を起せるベンガル領十一郡の兼併を公布し一二月新任太守ラウレンスはブータンに對して戰鬪を開始ししが軍隊の統御宜しきを得ず且戰地極めて士卒の健康に適せず漸くにして二三の要地を占領ししもデワンギリの城塞は敵兵の攻擊を受けて之を支ふる能はず遂に其回復する所となる。茲に於て再び大軍を招集し更に鋭を盡してデワンギリを下し且ダリムコートを陷れて之を守る。翌年に至りて守備兵氣候の變化によりて病むもの極めて多く爲に更に大舉してブータン全土を征服するの議起るブータン政府報を得て大に驚き和を乞ひしかば茲に和約を締結するに至れり。然れどもベンガル領アッサム領の紛爭地十八郡に對し毎年五萬ルーピーの支出を約ししを以て印度政府は和約を購ひしと云ふも不可なし。損害賠償竝に被誘拐者還付等はブータン政府をして實行するに至らしめしも要するに印度政府のブータンに對する交渉は失敗に始まり失敗に終れりと云ふ可し。但しエア・リチャルド・テムプルの如きはラウレンスの政策を排護しブータンをして紛議地に對する要求を放棄せしめしを多とし年々支給せる金額を以て恩給金の性質を有すとなせり。

第五章　中亞に於ける英露衝突の第二期

（西紀一八五四——西紀一八八七）

第一節　西紀一八五六年の波斯戰役

ヘラットのヤル・ムハメッド汗は西紀一八四二年を以て其主カムランを弑し以後同地に君臨ししが西紀一八五二年に至り又臣下に弑せらる。其時に際し波斯帝三度兵を出してヘラットを略ししが英國艦隊の示威運動に遭ひ忽ちにして撤兵し事は既に上卷第九章第五節の終に略叙せり。初め帝の出兵するに至りしはヤル・ムハメッド汗の子サイド・ムハメッド汗發狂しムハメッド・ユスフなるもの之に代りしも宰相イソー汗其才氣ユスフを凌ぎ專斷を以て帝の保護を求めしが爲なりとは雖も又大に露國の援援に恃む所ありしが爲なり。然るに英國の決心堅きを見るに及び西紀一八五三年一月二〇日の協商を以てヘラットの主權を放棄し其地の永久阿富汗斯坦の屬地たるを承認す。然れども波斯帝は未だヘラット領有の事を斷念ししにあらず機を見て動かんと欲ししに其後二年にして東歐にクリミア戰役起り英國大兵を動して露國と戰ふ。波斯帝此虛に乘じて大に爲すあらんとし英國公使に凌辱を加ふ。西紀一八五五年の終に至り公使マアレー國都テエランを去りてバクダッドに向ふ。波斯軍其一二月を以て前年の協商を無視して直ちにヘラット攻擊を試みしにサイド・ムハメッド汗城門を開きて波斯軍を迎ふ。然るに數週の後ヘラット住民起てサイド・ムハメッド汗を廢し波斯兵に抵抗ししが翌年一月に至りて力屈して降服す。英國政府是より先印度總督キャンニング卿に訓令を下し波斯に對して宣戰せしめ波斯戰役茲に開始す。而して波斯帝の此擧たる全く露國の煽動に起因せるものなれば本章の初に於て此戰役の顚末を記述するは事實の連絡上其當を得たるものなり。

キャンニング卿が宣戰の告文を發ししは西紀一八五六年一一月一日にして之と同時に凡六千の軍隊は孟買を發して波斯灣に向ひスア・ジェームス・ウートラムの軍に到るに及び其指揮を受けしめんとす。然るにウートラム未だ軍に到らざるに戰端は既に開始せられ一一月七日英軍ブシール市（卽ちアブーセル港）附近の一城堡ルシェーアを攻め守兵の勇猛なる抵抗を受けしも多數の死傷者を出さず之を

拔く。翌日進みてブシールを襲ひしかば守兵支ふる能はず或は遁れ或は降り捕虜の數二千人に達す大砲六十五門又英軍の有に歸す。二七日スア・ジェームス・ウートラム漸くブシールに來着して全軍指揮の任に當り翌西紀一八五七年一月三日ハヴェロックの麾下に屬せる一旅團の援兵を得てバルラスジュールに向ひブシールに逆襲を試みんとして同地に駐屯せる波斯軍を伐たんとす。進軍四十一哩にして五日目的地に達ししに敵軍一卒をも止めず乃ち其地に得たる軍需品を燒棄し七日の夜を以て歸路に就く。此夜寒威凜烈にして降雨あり且波斯騎兵の輜重を襲ふあり爲に全軍の行進を停めて日出を待ちしに波斯軍左翼の方面に陣して英軍に逼る。英軍の騎兵直ちに攻勢を取りて突進ししかば波斯軍は其歩兵隊の來會せざるに先ち七百の死屍を戰場に棄てて敗北す。英軍僅に二人の戰死者と六十二人の負傷者を出ししのみ直ちにブシールの本營に歸る。其後三月二六日に至り英軍海陸連合してユーフラチ[illegible]スの支流カルーン河畔に於けるモハムラアの堅城を攻む。モハムラアは親王カン・マアザの本營にして重兵を擁ししが城壘より暫く砲擊を試みし後艦隊の射擊に堪へず親王以下城を棄てて退軍す。二九日水師提督レンニー一枝隊を率ゐてカルーン河を溯り四月一日アーワズに於て七千有餘の波斯軍に會ししが砲門を開かずして其地を奪ふ。

是より先波斯帝は英軍の侵略に遭ひて大に驚き竊に露國の援助を期ししも其終に恃む可らざるや茲に初めて讓歩の決心をなし佛國の仲裁に任せて西紀一八五七年三月四日英國と所謂巴里條約を締結す。其第六條を以て帝は再びヘラット以下阿富汗の地に對する主權を主張せざるを盟ひ其地の獨立を承認し直ちに撤兵す可きを約す。其他なほ同條約に於て波斯帝は英國通商の保護奴隷貿易の禁止等をも保證す。蓋し波斯戰役の斯の如く迅速に終結ししは阿富汗帝ドスト・マホメッド汗が印度政府に好意を表ししに與て大に與て力あるや疑ふ可らず。阿富汗帝は第二シク戰役中英國に反對ししも西紀一八五四年の終に於て其子ゴーラム・ハイダル汗をペシャワルに遣はし印度政府を代表せるバンディッド知事スア・ジョン・ラウレンスと和親の約三條を結ばしめ、西紀一八五七年一月初旬親らペシャワル附近に至りてスア・ジョン・ラウレンスと會見せる時は將來決して英國に背かざる可きを誓ふ故に印度政府は銃器四千架を贈り且戰役中月額一萬磅を給與す可きを約し

帝は又一萬八千の兵士を率ゐて戰ふ可きを約す。但し戰役速に終結ししを以て阿富汗帝は波斯兵と戰場に相見ゆるに至らず。

波斯帝巴里和約に基づきヘラットより撤兵するに臨み阿富汗帝ドスト・マホメッド汗の甥アーメッド汗を援けてヘラットの領主となす。アーメッド汗從來阿富汗帝と相容れず爲に大に波斯帝を德とし其保護を受けんとするの色あり。英國政府使節をヘラットに派し汗を說きて波斯との關係を絕たしめんとしが效なし。此時露國も亦カニコーフなるものを使節としてヘラットと親交を結ばんと計りしがアーメッド汗露の眞意を疑ひ之に應せず。益〻波斯帝に賴る。其後西紀一八六二年波斯帝領土擴張の念禁ずる能はず親ら兵を率ゐて阿富汗斯坦の西南部セイスタン地方に侵略を試むるやアーメッド汗も兵を擧げて之に應じ共にファラーを略し將にカンダハルに進まんとす。阿富汗帝英國の援兵を得て波斯ヘラットの同盟軍に當り大に之を擊退し進んでヘラットを攻めて之を陷る。後幾もなくしてアーメッド汗の死するに及び遂に悉く其領土を平定し阿富汗帝國の版圖に加ふ時に西紀一八六三年五月なり。是より以前ドスト・マホメッド汗はヒンヅー・クーシュ山の北アムダリア河の南所謂阿富汗領土耳古斯坦の地を悉く屬國となし阿富汗帝國の國勢益〻盛なり。

第二節　阿富汗帝國の內亂

然るに阿富汗帝ドスト・マホメッド汗はヘラット略取の後僅に九日卽ち西紀一八六三年六月九日を以て殂落す。帝數人の男子ありゴーラム・ハイダル汗最も適任の繼嗣なりしも是より先西紀一八五八年帝に先ちて死ししを以て帝は長子マホメッド・アフツァル汗を立てずして愛妃の生めるシル・アリ汗を以て繼嗣と爲す。アフツァル汗は父帝の在世中より阿富汗領土耳古斯坦地方の太守として出でてバルクにありシル・アリ汗の帝位を爭はんと欲するの意極めて切なり。其他アフツァル汗の同母弟アヂム汗はクルムの太守たりシル・アリ汗の同母弟シァリフ汗はファラー並にギリシュクの太守たり同じくアミン汗はカンダハルの太守たり共に新帝に服せず。印度並に中亞地方の特色とも稱す可き兄弟間の軋轢は將に阿富汗帝國に內亂を起さんとするの色あり。故に時の印度太守エルヂン卿はシル・アリ汗よ

り卽位の通知を受けしも形勢を觀望して回答を與へず。スア・キリヤム・デニソン太守の事を攝するの時西紀一八六三年一二月初めて其卽位を承認す。實にシル・アリ汗の國書を受けし後六箇月の事たり。シリ・アリ汗其回答の遲々たりしを見て心甚だ樂まず。

而も帝は印度政府の保護によりて其位を保たんと欲し此時直ちに書を裁じて小銃六千架を給與されん事、長子マホメッド・アリを皇太子と認められん事、カブール一重臣近親の犯罪を赦されん事を求む。新任太守ラウレンス二條の要求に應じしも小銃を給與せず。然るに三箇月の後西紀一八六四年四月に至りアフッァル汗、アヂム汗と共に遂に叛す。ラウレンス其報を得しも敢て正當の皇帝たるシル・アリ汗の爲に盡力せず之を以て內亂に過ぎずとなし其戰に勝てる者卽ち事實上の君主を皇帝として承認せんとす。英國の志士ラウレンスの非干涉政策を攻擊して止まず當時の印度政府外交部長ジョン・ウイリー歸國の後書を一雜誌に投じてラウレンスを辯護し其政策を評して『威嚴ある無爲政策』A masterly inactivity となす。然るに世上の論者却て此批評を以て適切にラウレンスを攻擊し得たるものと認む『威嚴ある無爲政策』。既に然り。外交の當局者たる者『卑屈なる無爲政策』の批評を受くるに至らば邦家の不幸是より大なるはなし。

初め西紀一八六三年八月の末に至り阿富汗帝シル・アリ汗、アヂム汗異志ありとの報を得て親らクルムに赴き汗をして忠誠の誓を爲さしむ。然るに翌年四月に及びてアヂム汗此誓約を無視し其兄アフッァル汗と共に叛旗を擧ぐ。シル・アリ汗勇將マホメッド・ラフィクを遣してアヂム汗を攻めしめしに汗軍敗れて英領に逃走す。而して帝は親らアフッァル汗に向ひしに既にしてマホメッド・ラフィクの來會するありアフッァル汗力屈して降を請ふ。帝乃ちアフッァル汗に向て將來其領土と其生命とを損傷せざるべきを誓ふ。然るに偶ま飛報あり是より先人質としてカブール宮中にありしアフッァル汗の子アブダル・ラアマン汗竊に脫れて布哈爾に走ると。故に誓約に背きて直ちにアフッァル汗を縛して罪人視し甥フハチ・マホメッドをして代りてアム・ダリア河南の地を治めしむ。翌西紀一八六五年春シァリフ汗擧兵の報ありクルム地方亦アヂム汗の密使を受け不穩の色ありアミン汗も亦叛徒に應じ三汗兵を合せて國都に向て進む。帝復たマホメッド・ラフィクを遣して之

を拒がしむ。官軍進みてケラト・イ・ギルザイ附近に至りクッジ・バッの地に於て叛徒の軍と戰ふ。兩軍血戰アミン汗親ら太子マホメッド・アリを斬りしが其身も亦陣歿し結局叛徒の軍大敗しアヂム汗復英領に走る。シル・アリ汗太子戰死の報を得て大に落膽し以後精神常に稍異狀を呈す。

西紀一八六六年アブダル・ラアマン汗布哈爾王の援兵を得て阿富汗斯坦に侵入す。時に阿富汗帝出でてカンダハルにありアブダル・ラアマン汗先反間を縱ちてマホメッド・ラフィクの心を動かし遂に之を誘ひて帝に叛かしめ其兵を併せて西紀一八六六年三月二日國都カブールに入る。帝報を得て事態の容易ならざるを知り步兵九千騎兵五千大砲二十五門を以て哥疾寧を經て國都に向ひ五月九日シエカバッドに至る。叛徒同地の要塞を守りしを以て直ちに之を圍み將に之を拔かんとす。然るに此時に至りカンダハルに於て招集せる兵士悉く背きて叛徒に應じしかば形勢倏忽の間に一變し帝は其部下の騎兵と共に疾驅してカンダハルに還る。此時アフッファル汗は哥疾寧城中に幽せられしが帝の同地を過ぐるや城將拒みて帝を入れず。却てアフッファル汗の幽閉を免し之を其子アブダル・ラアマン汗に渡す。アフッファル汗乃ちカブールに入りて衆庶の歡迎を受け皇帝の位に卽く。茲に於て西紀一八六六年六月には阿富汗斯坦の地實に三人の君主によりて分轄せらる。卽ちカブールと阿富汗領土耳古斯坦はモハメッド・アフッファル汗の統御を受けカンダハルはシル・アリ汗の制令を奉じ其子ヤクーブ汗はヘラットに君臨し內亂中其地の安寧を保つ。印度政府は曾てシル・アリ汗の卽位を承認ししも『威嚴ある無爲政策』を守りて其帝位を保護せず。今や內亂の結果モハメッド・アフッファル汗の事實上の皇帝たるに至りしを見シル・アリ汗を以てカンダハルの君主に過ぎずとなしアフッファル汗の卽位を承認す。スア・ジョン・ラウレンスの此政策はシル・アリ汗をして英國の恃むに足らざるを覺らしめし事言ふまでもなし。

新阿富汗帝アフッファル汗は一度禁錮の刑を受けしより大に其精神を害し親ら國事を視る能はざるを以て之を其弟アヂム汗に託し暴欲に耽る。アヂム汗財政窮乏に苦みて臣下を虐げ或は商隊の前進を妨げて其貨物を掠め、或は人民に御用金を課して其財產を奪ひ之に從はざるは皆斬に處す。暴政至らざるなし。西紀一八六七年一月シル・アリ汗帝位を回復せんとしカンダハルに於て兵士を招集しカブール

に向ふ。アヂム汗詐りて退却し其深く進むを待ちて急に砲門を開きて攻勢を取り以て其歸路を扼す。シル・アリ汗辛く身を以て難を免れ騎兵若干を從へてヘラットに走り其子ヤクーブ汗に倚る。かくてカンダハルも亦アフヂル汗の有に歸ししがシル・アリ汗はなほ英氣を沮喪せず更に兵を阿富汗領土耳古斯坦に募集してカブールに進む。然るに同年九月一三日キラ・アラダッドに於てアブダル・ラアマン汗と戰ひ大敗しシル・アリ汗の畫策全く失敗す。其後三週間にしてモハメッド・アフヂル汗殂し其弟アヂム汗其子アブダル・ラアマン汗と位を爭ひしがアブダル・ラアマン汗母后の諫に從ひアヂム汗皇帝となる。翌西紀一八六八年一月シル・アリ汗土耳古斯坦を發し六月カンダハルを回復し其將を遣してカブールの『宮城』(バラヒッサル)を奪ふ。八月シル・アリ汗も亦國都に入り復び皇帝の位に卽き翌年一月アブダル・ラアマン汗の軍に克ち阿富汗斯坦全土平定す。此役に於て最も功を建てしは帝の子ヤクーブ汗異母弟アスラム汗竝にアミン汗の子イスメールなり。

阿富汗帝シル・アリ汗の國都を回復するや書を印度太守に送りて會見を求めしがスア・ジョン・ラウレンスの之が回答を發せざるに先ちアブダル・ラアマン汗兵を擧げて國都に向ひしを以て暫く會見を中止す。而も帝は直ちに其兵を破りしを以て翌西紀一八六九年三月親ら印度に赴き新任太守メイヨ卿と的里(デリー)の西北凡百二十哩なるアムバルラの地に於て會見す。メイヨ卿は深く世故人情に通じ人心を籠絡するの術に富みしを以て此アムバルラの會見は無情冷淡なる前太守の政策に不滿を抱きしシル・アリ汗の惡感情を融和せしや疑なし。而も帝は心中に於て釋然たらざるものなき能はず卽ち西紀一八五五年の和親條約第三條に於て阿富汗帝は東印度會社の友を友とし敵を敵とす可きを約ししが會社に於て阿富汗帝の友を友とし敵を敵とす可きの約款なきを以て其對等のものにあざるを論ず。是素より對等條約にあらず蓋し阿富汗斯坦は被保護國たるを以て英國政府は之と對等の條約を結ぶ能はず殊にその際兵器金員の給與を約ししに於ておや。故にメイヨ卿は英國政府がシル・アリ汗を以て阿富汗斯坦の正當なる且事實上の君主と認むる旨を反覆辯明し併せて英國政府が兵を出して其內亂に干涉するの意なきを說く。倫敦政府は更にメイヨ卿に訓令を與へてシル・アリ汗の施政壓制に流るる時は約束の如く補助を與へざる事ある可しと告げしむ。シル・アリ汗メイヨ卿が帝位を保

體せざるより大に警戒を加へアムバルヲ滯在中人をしてヤクーブ汗を入牢しアスラム汗を絞殺しイスメールを英領に放たしむ。是其功績を忌み陰謀を懼れしが爲なり。其後異母弟フーセン汗をも絞殺す。

既にして西紀一八七二年に至り英國政府阿富汗斯坦、波斯兩國紛爭の原因をなせるセイスタン問題の仲裁を試みしが波斯帝其裁決を以て英國が其藩屏に私せるものなりとなしシル・アリ汗も亦其結果一大要地を失ひしを以て益英國を怨む。抑もセイスタンの地たる阿富汗斯坦の西南方に位せる一大沮洳地にして其中部並に南部の水は悉くヘルマンド河に注ぎて此地に入る。但し往時は極めて殷富の地にして常に阿富汗、波斯の爭奪地となり波斯の英傑ヲスタム等の人物を出す。今日に於ては全く荒蕪の地と化ししも西方より阿富汗斯坦に入らんと欲せばヘラットに由らざれば必ず此地を經ざる可らず。故に波斯帝は夙に意を注ぎてカンダハルに至るの軍道を設け西紀一八五七年英國と巴里和約を結びし後阿富汗帝ドスト・マホメッド汗が兵を起して此地を回復せんとするや倫敦政府に向てセイスタンに於ける波斯主權の爲に干渉せん事を求む。英國應せず西紀一八六三年一一月時の外相ラッセル卿は斷じて干渉するの意なきを通告す。波斯帝乃ち西紀一八六五年を以て兵を出してセイスタン全部を占領し更治の基礎を設く。時に阿富汗帝國紛爭を極め之を爭ふ能はざりしもシル・アリ汗が王位を回復し國内を平定するに及び父帝の志を繼ぎてセイスタンをも回復せんとし將に波斯と干戈の間に相見えんとす。時に英國外相クラァレンドン卿は兩國に提議するに仲裁の勞を取らん事を以てし強て之を承諾せしめ西紀一八七〇年將軍ゴールドスミッドを全權委員に任じてセイスタンに派遣す。然るに兩國固く自說を執りて可かず其主張する所各一理あるを以て將軍頗る其裁決に苦みしが遂に土地兩分の策に決し之を本部セイスタンと外部セイスタンとに分ち前者卽ちヘルマンド河右岸の地を以て波斯領となし後者卽ちヘルマンド河左岸の地を以て阿富汗斯坦領となし且又ネーハンダン郡の東境シャー・クー山より東の方セイスタン、ソワラン兩湖の南岸に沿ひヘルマンド河に出でコーハックの南凡一哩の地點より西南に折れて一直線を畫がきク！マレック・シャー山脈に至るものを以て其境界線と爲す。波斯帝之に異議を唱へ容易に可かざりしも將軍親らテヘランに赴き百方之に說くに及び

初めて之を允諾す。而してシル・アリ汗も心中此仲裁を懌ばず英國の同盟を悔ゐ漸く露國に親まんとするに至る。故に次節に於て露國南侵の事實に叙及せむ。

第三節　露國の中亞諸汗國侵略

露帝ニコラス一世殂して阿歷山二世位に卽きし後西紀一八五七年基華(ヒワ)竝に布哈(ブハル)爾の汗は使を露京に派して祝意を表ししも中心歸服せるにあらず。故に印度土民兵叛亂蜂起に乘じ露國は大佐イグナチエフを兩汗國に遣ししが上卷第九章の終に述べしが如く何の得る處なし。西紀一八二六年より布哈爾汗(ブハル)(エミイル)たりしナスラルラは有名なる暴主なりしが西紀一八六〇年其位を嗣げるモザッファル・エッヂンも亦暴政父王に劣らず且公然敵意を露國に示し敖罕汗(コーカン)がアク・メチェチ城を回復せんとするを見て深く之に同情を表す。敖罕汗(コーカン)カンネイアト・シァ露國南進の勢を怕れ西紀一八五四、五年の頃英領印度政府の援助を求め且士官を派して軍隊訓練の任に當らしめん事を求めしがダルフージー卿之を拒絕す。然れども敖罕汗は敢て屈せずキルキーズ大部落中の露國に心服せざるものを說き之に啗はしむるに利を以てし露國の兵線を斷ち其藥料を奪はしむ。西紀一八六〇年汗親ら一萬五千有餘人の兵に將としウエルヌイに向ひしが大佐コルバコフスキー偵察の報告によりて此攻擊を豫期ししかば僅に八百の露軍を以て敖罕兵を擊退す。一時中止の姿なりし露國南下の勢是より復び活氣を加へ十有餘年にして中亞侵略の事業を完成す。

大佐コルバコフスキー奇勝を博するや露國の兵士は勢に乘じて敖罕(コーカン)の領土を蠶食し此年西伯利兵線より前進せる探討兵はトクマク及びビシベク兩城を襲ひて盡く其壘壁を毀ちシル・ダリア兵線より出せる一隊はヂウレクに城く。翌西紀一八六一年ヲレンブルグ總督ベザク上書して同時に兩兵線を進めて中亞通商の要衝たる塔什干(タシケント)を略せんことを乞ひ其翌年西西伯利總督ヂュカメリ亦兵をチワ河西に進めてアウリエ・アタ城を略し以てキルキーズ族を招撫するの便に供へん事を上奏ししが露國政府英國の抗議を提出せん事を憚り之を許さず。然るに邊境の軍人は政府の允可を待たず西紀一八六二年西伯利の方面に於てはメルク堡を取り翌年シル・ダリアの方面に於てはヤニ・クルガン堡を取り兩兵線次第に相接近す。茲

に於て遂にこれを聯合せしむるに決し西伯利の方面は參謀大佐チエルニヤーエフ、シル・ダリアの方面は大佐ウエリョフキンに命じてその任に當らしむ、西紀一八六四年チエルニヤーエフ凡そ二千五百の兵を率ゐウエリョフキン千二百の兵を率ゐて各東西より進む。初め兩軍會合の線路はアウリエ・アタよりスウザクに引くの豫定なりしがシル・ダリア枝隊の說によりてトルキスタントに轉じ後又西伯利枝隊の意見によりてチムケントに移すに決す。卽ち同年六月ウエリョフキン、トルキスタントを取り其一六日チエルニヤーエフ、アウリエ・アタを取り兩枝隊の兵相聯絡す。チエルニヤーエフ總指揮官となり全軍を率ゐて南進し九月チムケントを攻めて之を陷る。茲に至りて兩兵線の聯合成功す。露國政府此報告を得て新占領地をトルキスタン州となしヲレンブルク總督の下に屬しチエルニヤーエフを少將に陞せて其長官となす。但しこは翌年の事なり。

塔什干（タシケント）はチムケントの南凡八十哩の地にあり其城壁の周回十六哩に達し中亞の堅城たり。初めチムケントの敗兵多く同地に止まるとの報を得西紀一八六四年チエルニヤーエフ勝に乘じて直ちに之に逼り其備の固からざるを見て一隊の兵を放ちて城の一角を突かしめしも孤軍之に入る能はず多く士卒を失ふて退却す。時に敖罕汗の宰相にアリム・クルなる者あり膽力を以て名あり此年一二月自ら大軍を率ゐて出陣し露軍の守れるチリク、イカンの諸堡を拔き進みてトルキスタントを圍みしも戍兵死守し遂に之を回復する能はず。蓋しトルキスタントにはアズレットと稱する大寺院ありて回教徒の一靈地たりしを以て敖罕汗は此征討軍を出ししなり。布哈爾汗モザッファル・エッデン敖罕汗國の危急を見て默視する能はず親ら兵を率ゐて之を救ふに決し西紀一八六五年四月其先鋒已にウラチュベに進む。チエルニヤーエフ其來りて塔什干城に加はらん事を懼れ此日先城の東北凡十六哩なるチルチシュ河上の一要塞ニヤズを奪ひて城中の飲用水供給の途を斷ち直ちに轉じて塔什干に向ふ。アリム・クル之を見て自ら五六千の兵を率ゐ城を出でて遂へ擊ち激戰數時間に亘りしが不幸にして重傷を負ひし爲敖罕兵全く潰ゆ。チエルニヤーエフ次にチナズ堡を扼して布哈爾の往還を斷ち三方より塔什干を圍みしが六月初旬に至りて敖罕の援兵各地より來集す。チエルニヤーエフ乃ち力取に決し兵二千大砲十二門を以て之を襲ひ城壁內外に於て攻擊三日遂に之に克つ。

塔什干降る。

此時布哈爾汗既に兵に將として敖罕領にあり軍を霍闐(ホツセンド)土に駐め使を露軍に派して改宗して回教徒とならん事を要求す。チエルニヤーエフ援兵の至るもの少く而も防禦區域の益擴張せるを以て早く布哈爾と和親を結ばんとし一〇月修好使節としてストルウヘ等の一行を汗の許に派す。布哈爾汗露國の所爲を怒りて一行を拘留して歸るを許さず。チエルニヤーエフ兵力を以て布哈爾を威嚇せんとし西紀一八六六年一月一軍を率ゐてチナズを發し當時敖罕、布哈爾の國境を爲せるシル・ダリア河を渡り西に進みてヂザクに迫り城外を鈔掠せしも懸軍意の如くならず使節を放還せしむる能はずして軍を班す。此報露京に達するや露國政府は直ちにチエルニヤーエフを召還し少將ロマノーフスキーを以て之に代へ且ヲレンブルグ總督に訓令して進取を戒む。然るに布哈爾汗はチエルニヤーエフ退軍の後露兵征伐を唱へ親征の令を發して大に兵を集む。露國略取の地方に於ても其徵に應ずるものあり同年三月下旬ロマノーフスキーの塔什干に着しし時は形勢益危殆に越きチエルニヤーエフ將に出陣せんとする際なり。故にロマノーフスキー直に事務の引繼を受けて陣營に赴く。

ロマノーフスキー政府の訓令に基きて猶和議を試みしも布哈爾汗の要求極めて大なるを以て遂に交戰の準備を爲す。時に援兵も亦漸次に來着し總數既に一萬五千に達ししかば其内三千をチナズに屯して中軍となし千餘をケレウチに屯して游軍となす。五月初旬布哈爾汗進みてイルッジャルに陣す。ロマノーフスキー之を邀擊せんと欲しチナズ並びにケレウチの軍を發しシル・ダリア河の兩岸に沿ひて並び進む。イルッジャル附近に至りて布哈爾の兵と會し戈を交へしに布哈爾汗敗走し其兵皆潰ゆ。ロマノーフスキー勝に乘じて東南に進みナウ及び霍闐土の兩城を略し布哈爾敖罕境界交接の地方を收めて全く兩汗國の境界を分隔す。此後布哈爾汗拘留の使節を釋放して和議を求めしも談容易に整はずウラチウベ並にヂザクの兩城亦露兵に占領せらる。露國政府ロマノーフスキーの報告を得て其訓令に背くを責めず遂に同地方を經略するに決す。乃ち西紀一八六七年盡く中亞方面に於ける占領地を併せ且西、西伯利管轄セミパラチンスク州の土地を割きて之に加へて新にトルキスタン省を設け全省をセミレーチンスク(七河州の義なりウエル

スイを治府とす)シル・ダリア(塔什干を治府とす)の二州に分ち塔什干を以て總督府となし陸軍大將カウフマンを總督に任じて全省を管せしむ。

是より先霍闊土の陷るや敖罕汗ホドヤルは露兵に敵す可らざるを覺り既に媾和を乞ひしを以て大將カウフマンの任地に赴くや之を屬國として待遇せんとし其意をホドヤル汗に諭ししに汗一に其意に從ふ茲に於て翌西紀一八六八年の初總督カウフマン兩國間通商の規則を設けて敖罕汗と五條の條約を結ぶ此條約は一、商人居住營業二、倉庫所有三、領事派遣四、關稅徵收(但原價二分半)五、商隊通過に就きて對等の權利を規定ししものなり。カウフマンは此と同一の條約を布哈爾汗にも要めしに同汗はイルッジャルの敗後露兵の侮り難きを知りしも霍闊土以下要地を奪はれしを以て其恨を忘るる能はず。國民も亦宗教家の鼓舞する所と爲り敵愾の念熾盛なるものありしがば布哈爾汗此機を利して故地を恢復せんと事に託して露京に赴かんとす。布哈爾汗之を偵知し其虛に乘じて軍を進めんと欲し出でて撒馬爾干に陣す。斯の如く開戰遂に避く可らざるに至りしは布哈爾が未だ敖罕の如く大打擊を蒙らざりしが爲なり。

總督カウフマン布哈爾汗出兵の報を得て遽かに歸京を止め急に兵を勒して東撒馬爾干に向ふ。未だ達せざる僅に二里ゼラフシャン河に至りて布哈爾の兵と會し河を隔てて陣す。カウフマン兵火を交へざるに先ち和を講ぜんと謀り汗に向て條約の稿本を送りて撒馬爾干の引渡を求めしに汗條約の規定を變更して回答す。カウフマン乃ち二時間以內に於て最初の稿本に付き諾否の回答を爲さん事を求めしに布哈爾兵直ちに射擊を開始す。露兵遂に河を渡り布哈爾汗を前岸チウバン・アタと稱する高邱に擊ちて之を走らす。翌朝撒馬爾干の委員露營に來り布哈爾兵の退却を報じ速に同市を占領して住民を保護せん事を乞ふ。時に五月一四日なり。カウフマン同市に守兵を留め自ら布哈爾の兵を窮追して西カティ・クルガンに至る。偶ゝシャフリシャブス山南のシャール族及びキタブ族凡二萬人布哈爾汗を救はんとし山を越へて露軍の後に出で其後方の連絡を斷ち撒馬爾干を圍む。守兵苦戰して三日間之を支へしがカウフマンの軍を旋へして來着するに先ち布哈爾兵圍王敗軍の報を得圍を解きて走る。布哈爾汗遂に崩し盡く露國の要求に應じて和約

を結ぶ時に西紀一八六八年六月一八日なり。是露國と布哈爾との間に締結せる條約の權輿にして此條約に依りて布哈爾は露國の屬國となり露國は撒馬爾干竝びにカテイ・クルガンを併せてゼラフシャン河の流域を其範圍に加へ軍費として償金十五萬ルーブルを得且敖罕に於けると同一の通商規則を布哈爾と約す。露國政府は此新占領地をゼラフシャン州としてトルキスタン省に合併し後に其償金を以て內地より塔什干等の諸城に電線を架し大に交通を便にす。撒馬爾干は帖木兒の舊都にして往時百五十萬の人口を有ししと稱す布哈爾領の當時も永久國威保護の聖都と呼ばれしが現今はゼラフシャン州の首府にして露領中亞第一の堅城たり。

敖罕、布哈爾兩汗國斯くの如く露國の命維れ從ふに至りしも惟り基華汗國は中亞の西部に雄視して隱然露國に敵視す。且從來二回の遠征失敗に終りしを以て若し其跋扈を恣にせしむる時は露國の國威に關する所少からず。而も基華に向て進軍するの難易は大に昔日と異なるものあるに至りしを以て總督カウフマンは着々として大舉遠征の準備を事とす。西紀一八六九年大佐ストレートフ、グスタン聯隊の一大隊と哈薩克兵竝に工兵若干を率ゐてペトロフスクを經て海上裏海の東岸クラスノオドスク・クリークに至り堅牢なる城塞を築きて將來の根據地と爲す。時に偶々キルキーズ部落ドン河流域哈薩克族の聲援を得て露人に抵抗しし爲暫く基華遠征の計畫を中止ししが西紀一八七〇年の秋其平定するや同汗國が露國の商隊を刼掠し野民を煽動せるを名とし直ちに進軍の令を下す。蓋し阿古柏帕夏（下文第六章第五、六節參看）喀什噶爾に據りて諸汗國と相同盟し露國に向て一種の宗教軍を起さんとするの說ありしを以て機先を制するが爲なり。而して兵を出すに先ちトルクマン族を煽動して叛を謀らしめ又露國に同情を表する遊牧民族を教唆して貢賦を斷たしめ基華汗の內亂に苦むに乘じ一舉にして其獨立を奪はんとす。大佐マルコソッフ歩兵十四中隊哈薩克騎兵三大隊大砲二十門を以てクラスノオドスクを發して曠野を橫斷し西紀一八七二年一〇月全軍恙なくキジル・アルワトに達す。然るに其後此砂漠の中央に於て基華兵の逆襲を受けイグヂイに戰ひて大に其破る所となり已むを得ず背進す。

總督カウフマン此敗報に接し親ら大舉して遠征の任に當るに決し露京に赴きて

全般の方略を定め一軍を裏海の方面より他の一軍を塔什干方面より進發せしめ更に別軍をヲレンブルグの方面よりシル・ダリア河畔の第一堡に出し三路より基華を攻めんとす。塔什干枝隊は兵士五千五百人大砲十八門駱駝若干とを以て組織せられカウフマン親ら之を率ゐ裏海枝隊は兵士三千人と駱駝若干とより成り大佐マルコソッフ之に長としてチキシュリヤーを發しオレンブルグ枝隊は將軍ゼレフキン之に將とし歩兵二千大砲六門を具へ共に西紀一八七三年を以て遠征の途に上る。但しカウフマンは基華征服の名譽を他の枝隊に奪はれん事を恐れ其到着を待ちて總攻擊を開始せん事を命じ各枝隊孰れも一日二十七哩乃至三十哩の行程を以て進軍す。時に寒威未だ減退せず氣候亦不良にして砂漠の行軍容易ならざるに加へ基華人腐敗せる畜類を井泉に投じしが爲露軍大に苦みしも各路の兵途上トルクマン族キルキーズ族と交戰して漸く基華に迫る。五月二六日將軍ゼレフキン初めてアム・ダリア河畔に出で翌日下流に方りて基華兵の屯するを見る。基華兵委員を露軍に送りて降服の議を提起し間に乘じて退却す。露軍乃ちその夕を以てホッジェリの市街に入りしに住民既に遁れて一人の止まるものなし。三〇日ヨームド・トルクマン族露軍を襲ふ事甚夜二回に及びしも克つ能はず以後連日交戰止まず。

六月二日若干の基華人同國人の爲に其財產を奪はれゼレフキンの營に來りて保護を求め汗の軍七千人內外に過ぎざるを告ぐ。此日カウフマンよりも亦來書あり曰く四五日にして基華に達するを得むと。六日基華汗書を露軍に遣し司令官親ら基華に來りて和約を協議せん事を求めしもゼレフキンはベコーウヒチの轍に鑒み應ぜず。其後カウフマンが基華兵を破りてアム・ダリア河を渡りしとの報ありしも以後の動靜を審にする能はず而してゼレフキンの隊は既に市の外郭に迫りて時々敵の逆襲を受け且城壁に備へたる大砲亦頗る危險なるを以て九日の拂曉を以て基華の攻擊を試む。戰略頗る其宜に適ひ數門の大砲は直ちに沈默し剩へ其三門は鈔掠せられ攻擊軍の本隊城の正門を距る五十碼の地に至りて陣地を布く。基華の落城目前に迫る而してゼレフキン初めて最初の訓令を想起して攻擊中止の命令を下ししが退却中負傷す。此夜カウフマン基華城を距る七哩の地に到りしに基華汗セイド・ムハメッド・ラヒム汗は既に出奔し其弟世を嗣ぎ叔父ヲムラを遣し

て降を乞ふ。カウフマン是と假和約を締結し西紀一八七三年六月一〇日威儀を整へて基華城に入る。

然るに塔什干枝隊は戰爭既に終結せるを以て最早軍功を建つるの機會なく將校以下下士卒に至るまで皆不滿の色あり。カウフマン乃ち其部下の功名心を慰めんとしヨームド・トルコマン族征討の計畫を立つ。其理由として說く所に曰く之を征討して以て露國の勢力を張るにあらずんば到底此强剛なる人種を制御する能はずと。ヨームド族は基華陷落の後直ちに其長老を露軍の許に派して服從の意を表ししもカウフマンは是を以て其眞意を測る事能はずとなし更にヨームド族の長老を召し告ぐるに三十萬ルーブルを納付す可きを以てし且其三分の一は十日間以內に仕拂ふ可きを以てす。時に七月一七日なり。ヨームド族は一遊牧民族にして貨幣の儲蓄なきにカウフマンは必ず通貨を以て之を納付す可きを嚴命す其征討の口實を得るが爲なるや言はずして知る可し。乃ち次日を以て將軍ゴロヴチェフに命じてハザヴットに進みヨームド族が果して貨幣を徵集するや否を視察し其或は抵抗し或は逃走せんとするの計畫あるに於ては直ちに屠殺掠奪を行はしむ。

ヨームド族ゴロヴチェフの爲に其住居に火を放たれて絕望の淵に沈み死力を出して露軍を攻め二七日に至りてはゴロヴチユフの軍と基華との連絡を絕つに至りしがカウフマンが同日基華を發し三一日その軍イリヤリを發しし時には復び熱心に和睦を乞ふに至る。故にカウフマンはヨームド族の代表者を招ぎて八月一四日を期して三十萬ルーブルを納付す可きを命ず。茲に於てヨームド族は男女を問はず其貴重とせる物品を賣却して期日に至り定額の三分の一を得しがカウフマンは其日を以て基華に歸りゴロヴチェフに命じて老若男女を問はず悉くヨームド族を屠殺せしむ。暴行五日に亘り露兵の手に斃れしもの其數知る可らず曠野至る處死屍散亂し孩兒呱々として垂死の母を慕ふものあり。ヨームド族虐殺の事、實に記するに忍びず。

初めカウフマンの基華城に入るや先づ舊汗を迎へて其位に復せしめ八月二四日に至り基華城內の露國陣營ケンデミアン莊園に於て之と本條約を締結す。此條約は十八箇條より成り第一條に於てセイド・ムハメッド・ラヒム・ボガドル汗露帝の藩臣たるを諾し以下の各條に於てアム・ダリア河右岸の地とその三稜洲を露國に割

讓し軍費として二百二十萬ルーブルの償金を出し奴隷賣買を禁と四萬の波斯囚人を釋放し國内に於て露國商人に輸入税其他の租税を課せざる事等を約す。以後基華は獨立國たる資格を失ひ隣邦と直接に交際し通商其他の條約を締結するを得ず又露領中亞總督の認可なくして隣邦と兵を交ゆるを得ざる事となる。露國の基華遠征はかくて此第三次の計畫に至りて初めて成功し其新に獲しアム・ダリア河右岸の土地を少しく割きて之を布哈爾に與へて遠征を援けし功に酬ひ其餘をアム・ダリア州として之をトルキスタン省に合併し全くアム・ダリア河道水運の利を占め又此河流に臨みてペトロ・アレクサンドルスク及びヌクスの二城を構へ以て基華の咽喉を扼す。セイド汗今なほ汗の位に在り。

布哈爾汗國は西紀一八六八年の役後國勢大に衰へ益〻露國に依賴す。同年の末汗の長子亂を爲しし時の如き獨力を以て之を制する能はず露國の應援を得て初めて之を鎮定す。西紀一八七〇年シアール及びキタブ地方叛し布哈爾汗之が征討に向ひしも軍屢利あらず。是に於て露國又兵を出しシアール、キタブを襲ひて之を取り再び布哈爾領となす。蓋し露國の此舉は一は同地方の住民が二年前布哈爾汗を救ひて撒馬爾干を圍みしを以て之を割して露國の威嚴を示し一は布哈爾汗が撒馬爾干回復を熱望して之を露國に懇願する事頻なるを以て恩を施して其請求を避けんと欲ししが爲に外ならず。其後布哈爾汗は全く露帝に馴服し基華遠征に際し多く駱駝を出して輜重隊を助く。カウフマン此機を利して益〻通商の利益を計り且主從の關係を深くせんとしストリューベを布哈爾に派して交渉の任に當らしめ西紀一八七三年一〇月一〇日布哈爾汗セイド・ムザッファル新條約に調印す。此條約も亦十八條より成り其重なる規定は布哈爾領に加ふるに基華の舊領の内アム・ダリア河の右岸布哈爾、基華の舊境クケルテリーよりメセクリーに至りメセクリー汗は露人に對して領内商隊の通行を保護する事、アム・ダリア河流の航運を自由にする事、河の右岸に埠頭倉庫の設置を許す事、汗國全部を開きて其通商を許す事等なり。セイド・ムザッファル汗は其後西紀一八八五年を以て殁し現今其第四子セイド・アブダル・アハッド汗位にあり。

敖罕汗國は既に露國の屬國と爲りしも國内黨爭絶えず。此時ホドヤル汗新に租税

を增加してキルギーズ族の反抗を招きしかば兵を遣はして之を伐たしめ其首領輩を誘致して紹き殺す。茲に於てキルギーズ族大に怒り盛に排露主義を唱道せるキプチャク族と相合して叛を謀る。ホドヤル汗使節を塔什干に遣して援助を乞ひしもカウフマン之を拒みしを以て遂に其位を保つ能はず露領に走る。其後間もなくホドヤル汗の子ナシル・エヂン位を嗣ぎて露國と舊の如く和親を結ばん事を求めしも之と同時に敖罕人は皆起て露人驅逐を唱ふ。故に將軍ゴロヴチェフは霍闊土に佐スコベレッフは各一隊の兵を率ゐて敖罕汗國に向ひゴロヴチェフは霍闊土に至るの途上五千の敵兵と戰ひて之に克ち遂に一萬の敖罕兵に圍まれ一度其有となりし同市を回復す。此時カウフマンは親ら指揮の任に當り九月一日を以て敖罕本隊の陣地なるマフラムに向て發程し其附近に新築せる堡壘を攻めて之を拔く。既にして援兵更に霍闊土より來着ししが故に九月七日カウフマンは敖罕城に向て進軍す。ナシル・エヂン城門を開きて露軍を納る。然るに國內黨爭未だ止まず且瑪魯噶朗（ルギ）、奈曼干（ナンガン）、安集延（アンヂジャン）等皆其城寨の堅牢なるを恃みて降らず。敖罕汗國全土露國に服從するに至りしは實に數箇月の後にあり。西紀一八七六年三月二日遂に同汗國を亡ぼし其地を古名に復してフェルガナ州と稱しトルキスタン省に合併す。而して此戰役に於て奇功を奏しし大佐スコベレッフを少將に進め其最初の知事に任ず。以後中亞諸汗國の地復露國爲政家の思慮を攪すことなし。

第四節　英國とペル・ーヂスタンとの關係

ペルーヂスタンは阿富汗斯坦の南に位せる貧弱國にして其歷史一も記すに足るものなしと雖も今や殆ど英國の屬邦たるの關係あるを以て聊か其顚末を略述せむ。抑もペルーヂスタンの名はペルーチ族に基くと雖もブラフー族こそ常に實權を左右するの位置にありて統治者を出す。ブラフー族の原住地は明にし難きもクムバルなるものの指揮を奉じてヒンド族を仆してペルーヂスタンの地を占領ししがペルーチ族の來住せるは其以後の事なるが如し。初め西紀第十七世紀の終に當りヒンド族の國王阿富汗人の蠶食を防ぐ能はず勇敢なる山地の遊牧民を聘して之が防禦の任に當らしむ。クムバルは此遊牧民の領袖にして其阿富汗人を驅逐し了るや遂にヒンド族の國王を追放して之に代りてケラットに君臨す。クムバル

四世の孫アブダルラ汗の時に至り遠くカッチーガンダブ地方を征服ししが偶ま波斯帝ナジル・シァ印度遠征の途一隊の兵をケラットに向けしを以て乃ち帝の制令を奉ず。其後間もなくアブダルラ汗シンドの巡撫と戰ひて戰死し長子ハジー・ムハバッド汗位を嗣ぎて暴政の評極めて高し。次子ナジール汗時に波斯帝に從ひて的里にありしが直ちにケラットに歸り親ら其兄を弑して王位を奪ふ。人民却て之を喜び波斯帝も亦カンダハルの陣中よりナジール汗を冊封してベルーチスタン王となす。時に西紀一七三九年なり。

ナジール汗人と爲り勇武にして兵を好むと雖も又力めて內治の改善を計り首府ケラットの防禦を固くす。ナジル・シァ殂落の後一度阿富汗帝アアマッド・シァ・アブダリの配下に屬ししが西紀一七五八年遂に自立す。阿富汗帝一大臣を遣して之を伐たしめしがナジール汗の逆襲を受け敗れて歸る。アアマッド・シァ・アブダリ乃ち親ら大兵を率ゐて征討に向ひ一戰にしてナジール汗を破り北ぐるを追ひてケラット城に薄る。ナジール汗能く兵を用ゐ守固くして拔く可らず帝媾和の議を提し約遂に成る。其約によるに帝はナジール汗の從妹を納れて妃となし汗は帝に貢賦を納めずと雖も何時たりとも請求に應じて兵士を出して帝を援け而して帝よりは正貨を以て其軍資の半額を支拂ふ可き事となす。其後汗は帝の軍に從ひて數〻功を建て其報酬としてクエッタ並にヤスタン等の地を受く。晚年に至りて從弟ベヒラム汗叛を謀りしも忽ちにして之を鎭定し西紀一七九五年六月に至りて殂す。三男五女あり。長子ヤームード汗齡僅に十四歲にして位を嗣ぎしが資性怠慢にして國勢復振はず。

西紀一八三九年英軍阿富汗帝國を攻めんとしてボラン越より進軍ししに當時のベルーチスタンの國王メーラァブ汗（西紀一八一九年より君臨す）叛服常なく途に英軍を苦めしを以て印度總督遂に問罪の師を出すに決す。將軍キルシァ千五十の兵を以てケラット攻擊に向ひ大砲を以て城門を破碎し數分間にして之を陷る。ベルーチスタン人之に死する者四百人を超へ捕虜の數二千人に達す而してメーラァブ汗も亦戰死者の中にあり。將軍キルシァ宰臣マホメッド・バッセーンの言を信じシァ・ナワズ汗を立てて其後見の任を之に託ししが後に至りてボラン越等に於て英軍に損害を被らしめしはメーラァブ汗にあらずして却てマホメッド・バッセ

ーン等の所爲なる事明瞭となり翌年の終に至りて將軍ナット再びケラットを占領し西紀一八四一年英國政府少佐ウートラムを遣してメーラァブ汗の少子ナシール汗を認めて國王となす。是を第二世ナシール汗と稱す。西紀一八五四年五月一四日將軍ジョン・ジェーコブ新にナシール汗と條約を結びて前年少佐ウートラムの締結しし攻守同盟の約を廢しケラット汗は英國の敵を敵とし其同意を經ずして他國と交通せざる事、國内何れの地にも英軍の駐屯を許す可き事、部下の民をして掠奪を行はしめざる事、國内通過の商人を保護し規定以外に通過税を徵收せざる事を約し英國政府は其報酬として年額五萬ルーピー(五千磅)を汗に給與する事となす。ナシール汗能く此條約を遵奉し西紀一八五六年に至りて歿す。

クーダダッド汗、ナシール汗の弟を以て國王となりしが既にして汗を擁立せる諸豪族等賞與の乏しきを怒り其從弟シール・デル汗なるものを奉じて叛を謀る。西紀一八五七年土民兵叛亂に際し印度政府は少佐ヘンリ・グリーンをケラットの理事官に任じて變に備へしめしより稍少康を得しも西紀一八六三年後任者少佐マルコム・グリーン事を以て暫くケラットを去るや叛徒忽ちに起りクーダダッド汗身に重傷を負ひて邊境に遁る。シール・デル汗衆に推されて國王となりしも翌年の初ガンダワ越に於て暗殺せられ豪族等再びクーダダッド汗を立つ。クーダダッド汗頗る豪族の制御に苦みしより西紀一八七六年一二月に至りて新に英國と條約を結び以後年額十萬ルーピーの給與を受く。汗は亦クエッタ州の行政事務を擧げて英國官吏に委任し最初は歳入の剩餘を受くるの約なりしが西紀一八八二年以來地代として年額二萬五千ルーピーを受領す。クエッタは阿富汗斯坦の南に接し極めて要害の地なるが故に印度太守ラウレンスの在職中孟買巡撫は其占領の必要を說きし事あり現今英領ベルーチスタン知事兼ベルーチスタン駐在英國理事官は同地に住す。クーダダッド汗は亦ボラン越の管轄權を英人に委託しし以て其地の關税に對する賠償として年額三萬ルーピーを給與せらる。西紀一八九三年クーダダッド汗宰臣以下臣民を殺しし罪により位を廢せられ其子ムハメッド汗代りて即位し今なほ君臨す。西紀一八八八年より八九年までの間に於てケトラン地方英國の領土と爲り其後ゾブ峽グマル越附近英國の管轄に歸し西紀一八九六年以後ヌシュキ地方の行政事務も亦英人の掌る所となる。

第五節　第二次阿富汗戰役前の形勢

印度土民兵叛亂を起し英國政府多事なるに乘じ露國が中亞の侵略に着眼しし上に記述せるが如くにして當時同國政府の使節ハニコフなるものはヘラットの地に至りしと云ふ以後侵略の勢步一步を進め回徒の靈地トルキスタントを占領するや英國の物議大に沸騰ししかば西紀一八六四年一一月二一日時の露國外務大臣ゴルチャコーフは長文の廻章を英國以下列國に送りて其對中亞政略を辯明す。此回文は外交史上極めて有名なるを以て其大要を下に掲げむ。曰く露國は野蠻未開の種族と其國境を接するを以て苟くも帝國の安寧幸福を維持せんと欲せば兵力を用ゐて之を畏服せしめざる可らず。然るに既に歸服して文明の恩澤に浴せる種族は更に遠境に住せる他の蠻民の侵略を蒙るに至る可きを以て充分に政府保護の職責を盡さんと欲せば茲に一步を進めて此遠境の蠻民を征服するを要す。蓋しこれ露國の對中亞政略の特色と稱す可きものにあらずして合衆國の亞米利加に於ける佛蘭西のアルゼリアに於ける英吉利の印度に於ける皆然らざるはなし。要すに露國政府の方針は毫も版圖の伸張を期するにあらず唯既に征服せる地に吏治の基を設き平和を維持し通商を保護するにあるのみ即ちトルキスタン地方の文化を進むるにあるのみと。英國政府其事理明白なるを以て强て抗議を提起せず。

然るに翌年露國は此回文の公約を無視して塔什干を兼併せるより英國の輿論大に激昂して露國を敵視す。故に當時の英國外務大臣ラッセル卿は同年七月三〇日駐露代理公使に訓示し中亞に於ける交涉に關して一の盟約書を交換せん事を露國政府に提議す。ゴルチャコーフ此提議に應ぜざりしも露帝阿歷山二世親しく英國公使に告ぐるに毫も中亞に對して野心を包藏せざるを以てし英國政府又意を安んず。西紀一八六七年の終に至り印度事務大臣が印度太守に訓令せる文中露兵が中亞を侵略するは當然の事にして我政府は之を懼れ之を妬むの理なしと言ひしを見るも以て英國が樂天主義に傾きしを知る可し。然れども露國南下の勢は駸々として停止する所を知らず翌年又撒馬爾干を占領す。此時に當りて有名なる東洋史家ゼオルジ・ラウリンソンの實兄にして中亞の事情に精通せるヘンリ・ラウリ

シンシなる人あり大に英國內閣の無爲無能を慨嘆し同年七月『中亞問題の記錄書』と題する一篇の建議書を政府に提出し其反省を促がす。識見卓絕、議論痛快、對露政策の果斷强硬ならざる可らざるを說きて又餘蘊なし。故に此建議書一度新聞紙上に公にせらるるや英國の輿論は一時に昂起し排露熱の氣炎又制す可らず。殊に印度に於ては露國の南下を恐るるの情一年は一年より其度を高め來るを以て英國政府も亦默止する能はず。

西紀一八六九年一月英國外務大臣クラーレンドン卿露國大使ブリュノーフ男を通じて露國政府に向て亞細亞に於ける兩國領地の間に一の中立地域を設け之を全然兩國勢力範圍の外に置き將來に於ける衝突を避けん事を協議す。ゴルチャコーフは同年五月其大使に令して阿富汗斯坦を以て中立地域となすに同意を表し露帝は今後同國を露國勢力範圍の外に置き決して其獨立を害せざる可しと回答せしむ。然るに英國政府はアム・ダリア河を以て中立地域の境界となさんと主張しが露國政府は其左岸に基華汗國並に布哈爾領あるを以て之に應ずるの色なし。同年九月クラーレンドン卿親ら露京に赴きてゴルチャコーフと面談を試みしも互に自說を固守して議論歸着する所なし。印度太守メイヨ卿一刻も早く阿富汗斯坦の北境を確定するの必要を唱へしより西紀一八七〇年五月英國大使は更に其協定を露國政府に迫りしが結局トルキスタン省總督カウフマンをして實地視察せしむる事となる。蓋し露國政府は巴達克山（バダクシヤン）窩罕（ワクカン）の兩地は阿富汗帝の領土にあらずと唱え英國政府は其ドスト・マホメッド汗の時より阿富汗領なるを說きて談判容易に決せざりしを以てなり。而して荏苒數月を經過するもカウフマンの報告に接せず。時にグランヰル卿クラーレンドン卿に代りて英國外務大臣たり乃ち西紀一八七二年一〇月大使アウガスタス・ロフタス卿に訓令を與へて露國政府に迫りて境界を確定せんとす。其提議せる所によれば、サラックよりアム・ダリア河上のホッジャ・サリに一線を劃し同地より河流に沿ひてクウチャ河の會點に至り夫より東方サリ・クルに亘れる巴達克山並に其屬邦窩罕以南を以て阿富汗領となさんと云ふにあり。翌西紀一八七三年二月五日ゴルチャコーフ遂に一步を讓りて此提議に同意を表す。思ふに此讓步をなしし時は當時露國に於て基華遠征の準備に汲々たりしが爲ならむ。是を阿富汗斯坦の國境に關する第一回の英露協商となす。

此年露國第三回の基華遠征を企つ是より先西紀一八六九年の冬英國政府は露國に此計畫あるを聞き直ちに其眞僞を照會ししに露政府之に答へて曰く否と然るに其計畫全く熟せるに至り到底之を隱蔽する能はざるを見西紀一八七三年の初伯爵シュヴロフを倫敦に遣はし辯明せしめて曰く露帝は今將に基華に向て遠征を出す可しと雖も其兵力は僅に四大隊半に過ぎずして唯其掠奪の所業を罰せんとするのみ露帝は決して基華占領の意志を有せず却て嚴命を下して之を禁ぜり、と此辯明の全く事實と相背馳せるは既に前節に述べし事蹟と相對照せば自ら明瞭ならむ加之露國は益進んでトルクマン族を征しメルヴを占領せんとするの勢ありしを以て西紀一八七四年一月グランヴル卿は其將來阿富汗斯坦との紛擾を起す可きを說きて露國に之が中止を要求す然るにゴルチャコフは之に答へて曰くメルヴは阿富汗領にあらずして却て不羈放慢なるトルクマン族の巢窟なるを以て其平穩に歸するは又阿富汗人の幸福なりと幾もなくして英國の自由黨內閣倒れディスレーリ代りて保守黨內閣を組織しダービー卿外務大臣となりて從來露國背約の事を擧げて之を責む西紀一八七五年四月ゴルチャコフは辯解的回答を送り其行動の不得止に出でしを說き更に阿富汗斯坦を以て中立地域となさん事を提議す然るに英國政府は中立地域殷定を以て不利なりとし之を肯ぜざりしかば露國政府は英國の意向を迎へ翌年二月此提議を撤回して同國內に其勢力を波及せしめざるを約す ディスレーリの强硬政策其效果大に見る可し然れども惜哉時機已に失して阿富汗斯坦に對しては英國復前年の信用を回復する能はず初め西紀一八七三年基華陷落の報達するや阿富汗帝シル・アリ汗は露國南進の勢迅速を極むるを見て大に畏懼の念を生じアムバルヲ會合の事を追想するに遑あらず印度政府に訴ふるに危險の切迫せるを以てし其能く幾許の程度まで援助を與ふるの意あるやを問ふ當時の印度太守ノルスブルック卿は一事務官に過ぎずして經世家にあらず式の如く本國政府の訓令を仰ぎて答へて曰く本官は敢て危險の切迫せるものありと認むる能はずと阿富汗帝は此回答を見て不滿の情に堪えざりしと雖も更に信任せる一貴族ヌール・ムハメッドなるものをシムラに遣はし親しく太守と會見して一は露國侵略に際して援助を得るの約束を得一は皇太子冊立の承諾を得んとす西紀一八七四年七月一二日並に三〇日の兩回ヌール・ム

ハメッドは太守と會見を遂げ懇願する所ありしが其結果太守より一書を阿富汗帝に送りて露國が同國を以て勢力範圍以外にありと公認せしの事實を告げ其心を安ぜん事を說きしのみ。阿富汗帝益印度政府の冷淡なるを憤る。殊に帝は愛子アブダラ・ジャンを以て皇儲と爲さんことを欲しに印度政府は梟を長子ヤクーブ汗に屬するを以て殊に懌ばず。故に帝はヌール・ムハメッドの歸國せる時英國との同盟は絕えたりと公言し是よりカブール塔什干間の交際起る。

西紀一八七五年の初デスレーリ內閣の印度事務大臣ソールスベリー侯はノルスブルック卿に訓令を下し阿富汗帝シル・アリ汗に諭してヘラット並にカンダハルに理事官を駐在せしめ以て阿富汗斯坦に對する英國の勢力を大ならしめんと計りしにノルスブルック卿其從來の條約に背きシル・アリ汗の好まざる處なるを唱えて之を拒み翌年遂に其職を辭す。故にリットン卿を以て印度太守となし此訓令の旨に遵ひて行動せしむ。リットン卿先づ阿富汗帝の感情を融和せんとし互に使節を派して協商する所あらんとし帝に提議す。而も此時帝シル・アリ汗は既に露と相親しむに至りしを以て翌西紀一八七七年の春此申込に應じて使節をペシャワルに遣はしスア・リュキス・ベルリーと會見せしめしも其實協約を結ぶの意なし。故にアムバルラの會合に於てメイヨ卿がシル・アリ汗の要求を拒みしが如くペシャワルに於ては帝の使節一にスア・リュキス・ベルリーの提議を拒みしが三月に至り帝の使節死して議遂に中止す。是より先リットン卿は阿富汗斯坦の所領とせしコハク山道を開き又ベルーチスタンの北境クエッタを占領し而して又此に至りて阿富汗帝に向て重要なる都府に理事官駐在の事を求めしを以て帝は條約に基きて之を拒み且クエッタ占領を難じその國事に干涉す可らざるを論じて一歩も狂げず。蓋し帝が保護援助を求むるに方りて其報酬として要求せば直ちに成功せしやも計られずと雖も今や形勢大に異なるを以てリットン卿の政策も亦施すに處なし。

此年東歐に於ては露土兩國干戈の間に相見え延ひて英露の關係又危殆に迫りしを以て露國政府はトルキスタン省の總督カウフマンに命じて勢力を阿富汗斯坦に扶植し以て英領印度を圖らしむ。カウフマンは既に阿富汗帝と交通して其驩心を得しが此命に接するや西紀一八七八年四月少將ストレートフをカブールに遣

して帝と同盟を議せしめ自らヂジヤムに出陣して後命を待つ。シル・テリ汗厚く少將ストレートフを遇し復た英國に與みせざるを誓ひ十箇條の盟約を爲す。其要目を擧ぐれば帝はカブール其他の都府に露國官吏の駐する事、國中の要地四箇處に露兵の屯する事、露兵の印度に向て國内を通過する事等を許し、露國は阿富汗斯坦の獨立を保護し、王位の相續等一切内政には干渉せず、外寇内亂共に帝を助く可きを約す。此時伯林會議の結果歐洲の戰雲は事無く收まりしかば露國政府はストレートフを召還ししが其命の達ししは既にストレートフが此條約を締結して歸國の途に上りし後なりしと云ふ。故に伯林會議終結後ストレートフ使節の事公にさるるや英國の輿論は非常に激昂ししが露國が復阿富汗斯坦に干渉せざるを誓ひしより英國政府は此際に乘じて阿富汗帝に迫りて要求を達せんとし西紀一八七八年八月使節チャムバァレン卿をカブールに派す。シル・テリ汗露國の後援を恃み國境の地方官に命じ其通行を禁止せしむ。チャムバァレン卿國境アリマスジッドに至りて入るを得ず。ソットン卿一一月二〇日を期して阿富汗帝の回答を求め帝は一九日付を以て使節入國許可の旨を報じしも其書のダッカに達ししは三〇日にして英軍は已にカブールに向て進軍す。茲に於て遂に第二次阿富汗戰役となる。

第六節　第二次阿富汗戰役竝に其結果

第二次阿富汗戰役に際し英軍は三路より進みしが其行軍豫定を記せば、第一軍はペシァワルよりカイバル越によりゼラバッドを經カブールに至る其距離百九十哩弱日程約十九日と定む。第二軍はクルム谿谷のターールよりパイワー及びシュタルガルダン越を踰えてカブールに至る其距離百八十八哩强日程約十八日と定む。第三軍はスクールよりボラン越を經てクエッタに至る其距離二百四十八哩强日程約二十二日と定め尙ほ進みてピシィンを經コーヤック越を踰えてカシダハルに至る其距離百四十三哩弱日程約十四日と定む。全軍の兵員併せて四萬一千人大砲百四十四門を備ふ。將軍ブラウン第一軍に將となりカイバル越より阿富汗斯坦に入り一擧してアリ・ムシッドを陷れ遂に西紀一八七八年の一二月二〇日ゼラバッドを占領す。

阿富汗帝シル・テリ汗報を得て事の頗ぶる急なるを知り國事を其子ヤクーブ汗に

託して北の方土耳古斯坦に奔る。直ちに使を塔什干に派して救援を與へん事を將軍カウフマンに求めしが露國政府は既に阿富汗斯坦に干渉せずと明言しし後なるを以て之に應ぜず。シル・アリ汗大に望を失ひ偶病に罹りて翌西紀一八七九年二月二一日バルクに近きメザリセリフに於て殂す。茲に於てヤクーブ汗カブールに於て父の位を襲ふ。然るに此時英國の第二軍は將軍ロバーツ之を率ゐ既に西紀一八七八年の一一月二二日クルムを略しパイワル越を扼し其附近の地を平らげ翌年の四月將に進みてカブールに出でんとす。第三軍は將軍ストウアート之を統べしが其先鋒隊將軍ヒドルフの軍は一一月二六日ビシィンを略し一二月九日コーヤック越を占領し翌年の一月一日後軍の來るを待ちてカンダハルに向て進軍し後四日タクトイブルを陷れ遂に其月八日カンダハルを攻めて之に克つ。而して又第一軍の先鋒隊將軍ゴフの部下は三月三一日ゼララバッドを發してカブールに前進し遂に四月六日ガンダマックを陷る。カブールの危急旦夕に迫る。

露國が今や敢て阿富汗斯坦を助くるの意なきは上に記ししが如し而して新帝ヤクーブ汗は政敵極めて多きを以て英國政府の聲援を得るにあらざれば其位を維持するの難きを看破ししかば英國と和するを以て却て得策なりとし皇族並に大臣を從へ親らガンダマックの軍門に至りて媾和を求ひ少佐カヴグナリー英國の全權となり西紀一八七九年五月二六日を以て和約を締結す。所謂ガンダマックの條約なるもの是なり。此條約により阿富汗帝は向後外交事務に關しては必ず英國と協議して其監督を受くる事、國都カブールに駐在理事館を設け護衛兵を備へしむる事、理事官をして事あるに臨みて國境に官吏を派遣するを得せしむる事、駐在官吏の威嚴と安全とを保護する事、特別の規定を以て通商を維持せしむる事等を約し、且之に加ふるにクルム、ビシィン及びシブリ地方を英國に割讓して租稅の收入より行政費を控除せる殘額を受領し又カイバル越並にミチニー越地方の管轄權も之を英國に託し年額十二萬磅の扶助金を受くる事となる。ビシィン及びシブリ地方とは卽ち現今の英領ベルーチスタンなり。茲に於て阿富汗斯坦は獨立の實を失ひ全く英國の屬國と化す。

ガンダマック條約の結果として少佐カヴグナリーは理事官に任ぜられ同年七月二五日カブールに入りてヤクーブ汗以下の優待を受く。然るに其後僅に三週間を

隔て八月一三日暴徒忽ちカブールに起り偶々ヘラットより來着せる軍隊と相合して英國理事館を襲ひ少佐カヴナリーを始とし館員及び守兵六十七名を悉く屠殺す。此報九月三日に至りて英國に達す。英國政府憤怒措く能はず直ちに將軍ロバーツに命じてカブールに侵入せしむ。將軍ロバーツ再びクルムを發し一〇月五日シャルアシャブに於て大に阿富汗軍を破り其月八日七千の兵を率ゐ進でカブールの包圍攻擊を行ひ翌日全く之を陷れ同市の武器糧食を奪ひ理事官の殺害者を捕へて之を死刑に處す。爲に日々處刑せらるるもの三十人に及びしとぞ。阿富汗の酋長豪族等互ひに私怨を棄てて哥疾寧、マイマンド、コヒスタン等に兵を起し其數總計約三萬之を糾合して一二月一二日より一四日に亘りカブール附近に英軍を攻めて之を破る。將軍ロバーツ止むを得ず一時退きてシルプールに其兵力を集めしが同月二三日大に敵軍に克ち再びカブールを占領す。此時將軍ゴフは援兵二千を率ゐガンダマックを發しカブールに至りて『宮城』を略し將軍ベーカーはマヒスタン地方に赴きて征討に從ひ將軍タイトラーはツアイムク及びウアタサッド地方に戰ひ英軍の勢大に振ふ。

阿富汗帝ヤクーブ汗は暴徒蜂起に際し之を鎮壓する能はず遁れて將軍ベーカーの軍に投じしかば將軍ロバーツ乃ち之を印度に追放す。故に阿富汗斯坦は一時無政府の情況に陷ゐり其政權悉く英人の手に歸す。然るに此時に當りアブダル・ラアマン汗露領撒馬爾干より故國に歸りてバルクに據り歐式の精兵を有し威權侮るべらず故に英軍之と和を媾じ西紀一八八〇年七月二二日之をカブールに迎へて阿富汗帝の位に卽かしむ。是卽ち現今の阿富汗帝の父なり。而して英國は新帝アブダル・ラアマン汗をして更にガンダマック條約の確守履行を盟はしむ。然るに廢帝ヤクーブ汗の弟ユーブ汗此時ヘラットを傾しかしが其義父巴達克山の太守ミル・バーバーと共に亂を起し七月二六日一萬二千の兵を以てクシュック・イ・ナクッドに於て將軍バローの引率せる三千の英軍と戰ひて大勝を博す。將軍バロー英軍の死傷せるもの一千二百人を棄てて倉遑カンダハルに奔り將軍プリムローズし其に之を守りしがユーブ汗之を追ひて直ちに城下に迫る。將軍ロバーツ、カンダハルの急を聞き兵一萬を率ゐてシルプールより來援し九月九日ユーブ汗の軍を破り之をヘラット方面に退却せしむ。其後英軍の次を追ひて阿富汗斯坦の地より、

撤去するに及び、エユーブ汗再び兵を起しゼリシュクを經てカンダハルに進み之を占領す。九月三〇日阿富汗帝アブダル・ラアマン汗戰て大に之に克ちカンダハルを回復す。翌西紀一八八一年一〇月ヘラットの根據地も亦降りエユーブ汗遂に露領に向て出奔す。茲に於て阿富汗全土平定しアブダル・ラアマン汗は以後英國の保護監督の下に着々として內治の改善を計り其結果大に見る可し。

第七節　露國のトルクマニア征服

第二次阿富汗戰役中露國は全く局外中立の位置を保ち敢て阿富汗斯坦の爲に干渉を試みざりしも此機に乘じて經營する所なきにあらず卽ちトルクマン族の征服是なり。而してトルクマニアとは其居住地を云ふ。初め前世紀の中葉に於ては露國は裏海の東岸に於て唯一のアレキサンドルフスキー堡を有するのみなりしが西紀一八六九年を以て既に第三節に述べしが如くクラスノオドスク堡を建設し更に其翌年を以てチキシリアルを占領し是を以て基華遠征の根據地となす。基華降服の後カウカサスの總督皇弟ミハイル大公はカウフマンの獻策により政府に建議する所あり其結果として露國は裏海とデラル海との間に橫はれる領土を以て一省を組織して後裏海省と名け基華遠征に與りて功績ある大佐ロマーキンを進めて少將に任じ其總督に補し政廳をクラスノオドスクに置きて政を行はしむ。西紀一八七三年の冬ロマーキン任地に着し其新行政區の編制に當りしがトルクマン族中最も倔强なるアハル・テケ族は露人の侵略を見て怪ばずんば止まじとなしキジルアルバット等の根據地より出でて屢新來者を惱ます然れども露人は常にトルクマン族を敗退するを得ざるを以てロマーキンは或はアトレック並にサムバル河の探檢を企て以てチキシリアル港と基華市との北道を開かんとし或はアムダリア河の舊水路を踏査するを得たりされど曾て又親ら深くキジル・アルバットの附近に進み大砲を砂礫の中に埋め僅に身を以て脫れし事もあり其後西紀一八七八年八月三日總計六千の士卒と二十四門の大砲とを以てチキシリアルを發しアトレック河に沿ひてチャットに至り更にサムバル河に沿ひてホジャカラに至り優勢のテケ族の逆襲を受け軍利あらずして退却す。[illegible]ロマーキンは此兩回の失敗に屈せず更に遠征の準備に怠なりしが露國政府は

西紀一八七九年の初に於て勇將ラザリョフを擧げて遠征の任に當らしむ六月上旬遠征の準備全く成りラザリョフ全軍一萬八千人を率ゐ三十六門の大砲を備へて八月一一日を以て征途に上る露國が斯の如き大軍を中亞の地に用ゐしは實に前例なき事にして其輜重に要しし駱駝一萬五千頭駄馬六千頭に達しし云ふ時酷暑に際し炎熱に苦しみしも全軍悉なく一八日を以てヒヤットに着し二日間休息の後サムバル河に沿ひて更に前進ししに二七日將軍ラザリョフ過勞の極病を以て軍中に仆る茲に於てロマーキン假りに全軍の指揮に當り進軍を繼續ししに二三日に至り公爵ドルゴルーコフの引率せる前衛初めて敵兵と衝突す既にしてテッケ族戰員の本隊ゲヲク・テペを守るとの報あり。ロマーキン急に攻めて之を拔き以て前年の失敗を償はんとし九月九日親ら前衛と共にゲヲク・テペに近づく時に伯爵ボルヒの引率せる本隊は背後九哩の地にありてテッケ族一千有餘人の逆襲を受けしが爲め期に至るも來會せず。ロマーキン其至るを待たず直ちにデンギル・テペの砲擊を開始す。デンギル・テペとはゲヲク・テペに於ける城塞にして其堅牢なる事と云ひ其巨大なる事と云ひ中亞の城塞中之に比す可きものなからむ砲擊の開始せらるるやテッケ族の領袖ラクメサルダルは部下に降服を勸告せんが爲に二時間の猶豫を乞ひしもロマーキン可かず。

既にして伯爵ボルヒの本隊も亦來會し力を併せて砲擊ししかばテッケ族城の東門を開きて婦女小兒をアスカバッドの方面に向て脫走せしめんとす其數凡そ五千ロマーキン忽ちにして之を看破し公爵ガリッチンに命じて騎兵を率ゐて其前途を扼せしむ。婦女小兒と雖も露兵の同情を買ふ能はず用捨なく殺戮されしが故に其死を免れしものは皆再び城中に入る。時に城中より再び媾和の議を提出ししも露軍暫時も砲擊を中止せず午後五時に至りて突貫して城を陷れんとす。此時露軍の突貫に加はる可きもの其數或は一千二百人なりと云ひ或は一千四百人と云ふ而して城中の守兵は一萬八千人乃至二萬人に達す其無謀の擧たるや多辯を要せず。午後八時に至りてボルヒの軍隊先陣地を奪てて退却し夜半將校會議を開きて全軍退却に決す此役露軍の死するもの四百五十四人にしてテッケ族は四千人を失ふ其半數は婦女小兒なりと雖も領袖頗多くは戰死せるを以て此夜降服の議を決し翌朝四人の領袖を選みて城を距る二哩なる露軍の本營に至らしめしに其

地に一卒の止まるものなく遠く塵埃の飛揚するによりて敵軍の退却せるを知る。ヂッケ族報を得て大に喜び大舉して敗兵を追擊し凱歌を奏して城中に歸る是より先將軍テルグカソフ、ラザリョフの後任者に命ぜられしが九月三〇日チャットに至りて敗兵の先頭部隊に會し全軍を收めてチキシリアルに歸る。時に一二月の初旬なり。ロマーギンの敗後トルクマン族の猖獗甚し。故に西紀一八八〇年の初に當り將軍スコベレフが後裏海省の總督に任ぜらるるや露人皆齊しく之を喜ぶ。蓋しスコベレフはプレヴナの攻擊に勇名を顯はしし名將にして曾てフェルガナ州の知事に任ぜられしは上に記しじが如し。此年五月二五日を以てチキシリアルに着し直ちにトルクマニアの偵察を命ず。六月二日親ら約千人の兵を率ゐて出發し路をパミー、ペウルマに取りデンギル、テペに至りて砲擊を試み其實力を計りてチキシリアルに歸る。乃ちガウガサスの軍區に向て一萬二千人の增派を求め且大砲二百門を要求し之と同時にパミーに至る途上に堡塞を築きて進軍の際後方の連絡を安固ならしむ。一二月中旬に至りて準備全く成り『基督降誕節』の前夕を以て撤馬爾干より來援せる大佐クロパトキン（攻略軍大

臣）を迎へ直ちにゲヌク、テペに向て偵察の途に上る。途上ヂッケ族二萬の攻擊を受け交戰極めて激しく援軍の來るに及びて漸く之を擊退す。翌西紀一八八一年一月一日全軍八千有餘人を分ちて三隊となしデンギル、テペに向ふ。歩兵は皆後裝銃を携へ砲兵は五十一門の大砲十二門のホッチキッス機械砲等を備ふ。トルクマン族は其數三萬と稱するも兵器粗惡なるが上に一の砲兵を備へず又全く訓練を缺く。トルクマン族は再び前年の如く露軍を退却せしむる事を得べきや如何。トルクマン族はデンギル、テペ城外の平原に一小堡塞を構へ露軍の包圍攻擊を開始せる時に乘じ側面攻擊を試みんと計りしが露軍先之を攻めて其守兵を走らす。一月二日將軍ペトルースキッチは第二回の偵察を試み優勢なる敵兵に會ひスコベレフが援兵を送るに至りて漸く退却す。四日露軍は熱心に包圍攻擊を開始し城壁を距る八百碼の地點に達す。此前夜援兵凡五千人メルヴより來りて城中に入りしを以て城兵突進將軍ペトルースキッチを仆しし。露軍も亦能く戰ひ第一の平行壁を築造す。七日に至りて更に城を距る四百碼の地に第二の平行壁を築きしが九日の夜を以てヂッケ族露軍の哨兵線を冒し大砲四門、臼砲三門を奪ふ。其退却後

露兵は直ちに第三の平行壁を築き二〇日を以て砲擊を開始す是より一八日に至るまで彼我の小戰絶えず城壁と露軍との間數百の死屍散亂せるを以てスコベレッフの提議に依り一時間の休戰を約して互に之を埋葬す。二〇日に至りて城壁の一部を破壞し二三日更にダナイマイトを以て之を大ならしめ翌日七時を以て總進擊の令を下し火藥二噸を用ゐて城壁を爆發し露軍潮の如く城中に入るテッケ族死力を出して抵抗する事一時間以上に及びしも其及ばざるを見四千の死屍を棄てて平野に出奔す。スコベレッフ直ちに步騎兩兵に令して之を追はしめ決して其生命を助くる事なきを令すスコベレッフの報告に據るに此追兵の屠殺しし男女小兒の數は八千人にして之に攻擊中戰死せるテッケ族を加ふれば其數二萬人に下らずと。而して露兵の死者二百六十八人負傷者一千二百人の多きに達し中亞の戰役中未曾有の損害なりと云ふ。かくの如くにしてゲヲク・テペ初めて降る。スコベレッフはデンギル・テペ陷落の後直ちにアハルをトルクマン族の掌裡より奪ひ且兵をアスカバッドに遣して二月九日之を占領す。アスカバッドは波斯、波斯間交通の要衝に當り極めて形勝の地なり。スコベレッフは將に其管轄の問題を研究し益領土の擴張を計らんとしに偶々露帝阿歷山三世暗殺に遭ひ新帝阿歷山三世之に歸京を命ず。阿歷山三世は戰爭を避け外交によりて一層の功を收めんとするの方針を取り少尉アリハノッフをムルガブ流域に遣はして平和の手段によりて其地の兼併を圖らしむ。アリハノッフは身を商人に扮し西紀一八八二年の初を以てアスカバッドを發しルフタバッドに於て波斯人の詰問を受けしが詐りてメシエッドに赴くものなりと稱し遂に目的地たるメルヴに着し長老會議を欺きて三日間滯在の許可を得其間名を通商に託して深く地勢人情を觀察し歸て之を總督に報告す。此間露國政府は大佐ヴエンクフースキーを密にカブールに派し又大尉ゴスポヂン・レッサルをハリラット・ラッドの流域に遣はし遠くヘラットの方面に至るまで探檢を試みしむ。西紀一八八三年將軍コマロフ後裏海省總督に任ぜられ平和の手段を用ゐてスコベレッスの方針を繼續せんとす。乃ち先テジュンド流域を兼併し再びアリハノッフをして身を商人に扮してメルヴに赴き領袖輩に賄賂を與へて露帝に忠誠を約さしめ機熟するを待ちて急に城下に迫る住民防禦を圖るに遑あらず哈薩克兵の射擊に會ひ忽ちにして降服す。時に西紀一八八四

年二月一四日なり其後間もなくゴスポヂン・レッサルの報告アスカバッドに着ししかばコマロフは其獻策に基きテジェンド河右岸に位せるサラックスを占領し五月六日波斯と協商して正式に之を割讓せしむ但し裏海の東岸よりルスタバッド附近に至るの境界は既に西紀一八八一年一二月二一日の協商を以て規定され波斯は露國の占領地に對する要求を放棄せるなり。

抑もメルヴは往古『世界の女王』と稱せられし地にして土耳古斯坦より波斯阿富汗に出るの途に當り中亞の要地なるを以て英國政府は露國に向て西紀一八七四年の當時に於て抗議する所あり(第五節參看)其後西紀一八七九年更に占領の意志あるや否を照會ししに同年八月外務大臣ド・ギールスは答へて曰く否と而して今や此誓約を無視するのみならず更に進んでサラックスを奪ふ其戰略上の要地たるは已に識者の稱道せる所なり故に英國政府は之を詰問ししに露國の回答に曰くサラックスに新舊二あり弊國の占領せるはサラックス城にあらずして其舊市街の廢趾なりと焉ぞ知らむ露國がテジェンド河左岸の舊城を占領せざるは其戰略上に於て價値なきが爲ならむとはかくの如くにして露國は阿富汗斯坦と其國境を接するに至りしを以て英國政府に向て西紀一八七三年の國境に關する協商を再議に付せん事を求む茲に於てスアビーター・アラムスデンは全權委員に任命せられ西紀一八八四年一一月を以て其會合の地と定めたるサラックスに到着ししも露國は其委員長に任命せる將軍ゼレノイの疾病を名として更に協議を遂げんとせず。或は將軍ゼレノイに命ずるに他の任務を以てしチフリスに赴かしめしとも云ふ而して英國全權委員のサラックスに滯在中將軍コマロフは兵を派して阿富汗斯坦の國境を超え侵入する事三十哩ハリ・ラッド河畔のプル・イ・カタンを占領せしめ更にヘラットに近く事三十哩以てツルフィカル越の險を扼せしむ。英國政府は大に露國背信の行爲を責め盤西紀一八八五年三月一六日露國故に阿富汗斯坦をして各自從前の位置に止まる可きを約せしむ同年四月阿富汗帝アブダルラアマン汗は露國侵略の日に至り英國政府は幾許の程度まで援助を與ふ可きか親しく印度太守と交渉する所あらんとしラワル・ピンヂに赴く是より先印度太守リットン卿は西紀一八八〇年ピーコンスフィールド卿の保守黨內閣仆れグラッドストーン自由黨內閣組織せらるるに當り內閣方針の變更を豫想して退任

しリボン侯之に代りしが侯も亦西紀一八八四年を以て其職を去り當時はダック・ファリン伯實に太守たり。ダッファリン伯阿富汗帝に約して曰く英國は必ず阿富汗帝國の領土を保全し露國にしてヘラット方面に進ませば直ちに宣戰せむと。然るに此約束を與へし翌日に至り露軍ペンデを奪ふの報ラワル・ピンヂに達す。ペンデは從來ヘラットの屬地にして前年一一月露兵は一度之を占領せんとして阿富汗兵に擊退されし事あるにも拘らず露國は之を以て阿富汗帝の勢力範圍以外にありとなし其阿富汗兵の駐屯を以て英國の敎唆に出でたるものなりと唱へ以て境界確定委員の派遣を遷延せしめしが遂に將軍コマロフは親ら兵を率ゐて同地に向ひ三月三〇日を以て阿富汗兵をアクタバに破り其目的を遂ししなり。然るに當時英國政府はスーダン地方の戰役に牽制せられて斷然露國に反對するの決心なくダッファリン伯の誓約を破り阿富汗帝をしてペンデを放棄せしむるに決す。而してコマロフも亦露廷の內訓に基き八月二二日ツルフィカル越より撤兵したるを以て九月一〇日に至り初めて英露の間に議定書成り共に委員を派して實地に就きて踏査せしむ。一二月一二日より其事業に着手し西紀一八八六年七月に至りてツルフィカル越よりホッジャ・サリに至る延長三百五十哩の境界線を劃定す。其後露國はケルキ竝にホッジャ・サリを占領ししが結局阿富汗帝をして其地を割讓せしむる事となり西紀一八八七年七月一〇日聖彼得堡に於て阿富汗斯坦西北境劃定に關する露英協商の調印成る。茲に於て後裏海省の面積增加して二百十四萬方哩となる。

第六章　捻匪回匪の平定竝に中亞に於ける清露の衝突

第一節　捻匪の平定（西紀一八六四——西紀一八六八）

江寧省城の克復と共に長毛賊の大亂は之を戡定するを得たりと雖も長毛賊の餘黨竝に捻匪回匪等なほ各地に横行して歸順せざるものあり滿洲朝廷は未だ枕を高くして太平を夢ゐる能はず。余輩は前章に於て中亞に於ける英露衝突の事蹟を叙述せるを以て更に同方面に於ける清露の衝突に叙及するの心算なりと雖も事實の連絡上本章に於ては先づ第二章に接して捻匪の平定を叙し回匪の顚末を記するの必要あり。故に以下數節を割きて清國内亂の記事に充てむ。然れども捻匪の起源竝に長毛賊徒との關係に就きては既に第二章に併叙せるを以て本節に於て

は之を反覆するの勞を省く可し。

捻首張樂刑生擒斬に處せられてより從子張總愚なるもの餘衆を領し豫南捻陳大瑞と聯合して兇暴を逞くす賊中小閻王の號あるは卽ち張總愚なり。同治三年八月（西紀一八六四、七、八）陝西地方を蹂躪し扶王陳得才等金陵を援はんとして東歸し其期に後れて悉く楚境に萃まるや張總愚は遵王賴汝光と共に湖北の黃安を犯す。賴汝光は洪秀全の義弟賴漢英の一族なり。嘗捻任柱牛老洪李允等復た總愚と合す。翌月欽差大臣湖廣總督官文は黃州にあり欽差大臣親王僧格林沁は麻城に軍し欽差大臣兩江總督曾國藩は命を受けて安慶に至る。曾國藩乃ち曰く四百里内欽帥三人を駐す恐らくは群盜朝廷を輕ぜんと。此月長毛賊の餘黨十餘萬僧格林沁の軍に破られ相次で降を乞ひしも惟り賴汝光の一黨は張總愚と合し豫省に趨らんとす。一一月九日（一二、三〇）僧格林沁賊と襄陽に戰ひて大敗し捻賊遂に河南に入り南陽を經て開封府に向ふ。同治四年三月（西紀一八六五、四、五）捻賊の大隊悉く山東に入り數日ならずして曹單定陶菏澤鄆城鉅野諸縣の地を鈔掠し將に直隸を犯さんとす。朝廷僧格林沁の賊の北竄を防ぐ能はざりしを責め湖北巡撫吳昌壽を河南巡撫と爲し又直隸總督劉長佑

をして警戒する所あらしむ。次で曾國藩竝に江蘇巡撫李鴻章に詔して賊兵の南下を防がしむ。四月二四日（六、一一）。僧格林沁捻賊を追ひて鄆城の西北に至り忽ち伏兵に遭ひて大敗し身に八創を受けて亂軍の中に戰死す。王資性忠勇馬に跨りて戰場に馳驅する茲に十三年旦夕にして賊を滅さんと期ししに却て此不幸に遭ふ。同治帝報を得て朝を輟むる三日王を太廟に配享せしめ謚して忠と曰ふ。

時に捻賊將に勢に乘じて畿輔を犯さんとすとの說あり朝廷急に曾國藩を以て欽差大臣督辦直隸、山東、河南軍務に任じ李鴻章をして權に兩江總督を署理せしむ。曾國藩楚軍が多く北征を好まざるを見李鴻章をして新に徐州に於て勇丁を募集して淮軍に編制せしめ又捻匪が皆戰馬を用ゐ其鋒甚だ當り難きものあるを以て人を古北口に派して馬匹を購買せしめ又賊の北竄を厄するには黃河の天險を恃むの利あるを見て黃河水師を創設せしめ劃策怠らず。五月九日（六、二）。李鴻章奏して布政使銜潘鼎新を遣して淮勇五千を率ゐ海路より天津に赴き京畿を守衛せしむ。時に英將ゴルドン其曾て訓練する所の銃隊千人を率ゐて鼎新に隨行ししと云ふ。然れども捻賊は京畿に近づくの難きを知りしかば是より先既に安徽に入り張總愚の一隊は宿、亳二州一帶の地を經て高爐集を陷ゐれ賴汝光牛老洪任柱の一隊の至るを待ちて遂に雉河集を圍む。雉河集は張總愚の老巢なるを以て捻賊之を奪ひて復び其根據地となさんとし攻擊頗る急なり。安徽布政使英翰親ら西洋集に走り史念祖を留めて死守して援を待たしむ。曾國藩黃翼升の水師に檄して臨淮に赴かしむると共に周盛波をして蒙城、亳州を援ひ劉銘傳をして徐州より皖北に赴かしむ。六月三日（七、二五）。周盛波、劉銘傳共に雉河集に近づき河南の張曜、宋慶、安徽の張得勝も亦軍を率ゐて來會す。捻賊四面に官軍を受け且つ糧食盡きしを以て雉河の圍を解きて北走す。劉長佑、張總愚が汝洛の方面に向ひしを以て砲船を遣して西河面を巡視せしむ是を黃河水師の起源となす。

八月曾國藩徐州に本營を設けしが此時に當りて所爲らく捻賊を追擊するは之を遮攔するに如かずと安徽の臨淮には劉松山の湘軍を駐し山東の濟寧には潘鼎新の淮軍を屯し河南の周家口には劉銘傳の淮軍を駐し江蘇の徐州には張樹聲の淮軍を屯して以て捻賊平定の基を建つ。雉河集の敗後數月間捻賊は別れて二大股となり張總愚は河南の西南部賴汝光は河南、山東兩省の邊境を橫行ししが一一月一

二日一二九。に至りて兩股又合して扶溝を攻む。劉銘傳馳せて之を援ひ大に賊を破りしを以て曾國藩更に張樹珊の淮軍をして周家口に屯せしめ劉銘傳をして遊擊たらしむ。茲に於て捻賊は又分れて二となり張總愚は西より賴汝光は東より共に湖北を犯さんとす。官文書を飛して援を求めしにより劉銘傳、曾國藩の命を受けて黃州を援ふ。同治五年正月四紀一六六二、八金陵克復の後諸將の嫉妬を避け湘鄉に歸りて病を養へる曾國荃を起して湖北の巡撫と爲す。三月閩粵の地新に平定せるを以て鮑超の軍萬二千人をして北行して捻匪の剿討を助けしめしかば湘淮諸軍を合せて總數八萬を超過す。四月曾國藩運河を守るの策を建て劉長佑並に山東巡撫閻敬銘と其防備區域を定め五月復た沙河を扼守するの議を提し安徽巡撫喬松年、河南巡撫李鶴年と其分擔區域を定む。其防禦の策は運河及び沙河、賈魯河に沿ひて長牆を築き戍を置くにあり一見甚だ迂なるが如しと雖も是敵騎を防ぐの良案にして曾て戰國の時代に於て三晉燕齊が長城を築きて自ら衛り秦が萬里長城を築きて胡騎を防ぎしは讀史者の熟知する所ならむ。

捻賊一度湖北を犯ししも忽ちにして擊退され其後再び之を窺ひしも曾國荃鮑超の布置嚴密にして隙の乘ず可きなきを以て更に東に向ふ。茲に於て張總愚、牛老洪、任柱、賴汝光の四股又合して一となり八月一二日一九。沙魯河牆已に成りしも汴梁の附近未だ功を訖らざるを偵知し夜に乘じて全軍東向山東に入る。長牆千數百清里功を一簣に虧きしを以て運河黃河の防備又急を告ぐるに至り時人頗る李鶴年を咎む。曾國藩も亦焦憤して其病を增し自ら衰弱の狀を陳べ李鴻章を徐州に駐し曾國荃を南陽に駐し自ら周家口に駐し黃河水師と力を協せて賊に當らん事を請ふ。然れども捻賊は遂に運河を渡る能はず却て劉銘傳、潘鼎新の攻擊を受けて九月一二日一一〇。衆を悉して河南に集まり復た分れて二となる。是より東捻西捻の稱あり。此時牛老洪死し其子牛喜代りて其衆を領し任柱、賴汝光と東捻と爲り張總愚西捻と爲り其全滅に至るまで復合する事なし。此月西捻の一股は鮑超の裕州方面より攻擊し來るに遭ひ其鋭鋒を避けて西の方陝西に入りて商州を犯す。曾國藩、劉銘傳、潘鼎新、張樹珊をして東捻に當り鮑超、劉松山、劉秉璋、楊鼎勛をして西捻を伐たしむ。然るに鮑超及び淮軍の諸將皆西征を好まざりしを以て劉松山惟り毅然として陝西に向ひ遂に大功を建つ。一〇月曾國藩病を以て軍務を辭して兩江總督の本職

に回任し一一月一日一一、二七。李鴻章欽差大臣專辨剿匪事宜に任ぜらる。時に東捻任賴の一股は間を得て湖北に入り雲夢應城の二縣を陷ゐれしかば曾國荃郭松林を遣して之を克復せしむ。既にして劉銘傳、張樹珊、鮑超劉秉璋宋慶等各援軍を率ゐて湖北に赴きしが一二月に入りて郭松林は臼口に戰ひ伏に中りて重傷を負ひ二一日一一、二六。張樹珊は德安の新家閘に賊を擊ち敗績して戰死す。同治六年正月一五日二、一九。劉銘傳、鮑超と東捻を安陸の尹隆河に襲ひしが鮑超の期に後れしが爲に劉銘傳先づ戰ひしも衆寡敵せず大に其兵を損す。鮑超報を得て乃ち劈山砲を以て之を攻擊ししかば捻賊黃昏に至りて遂に支ふる能はず退却す。劉銘傳も亦軍を回して奮戰し鮑超は更に追殺する事五晝夜に及びしを以て東捻狼狽して河南に走る。鮑超大勝を博ししと雖も之が爲に劉銘傳と隙を生じ遂に其軍を能ひ。二月捻賊復た湖北を犯し湘軍の宿將彭毓橘蘄水の六神港に陣歿す。四月五日五、一八。周盛波等賊の湖北より北犯するものを信陽州の境上に迎へ擊ちて之に克つ。然れども此時偶ま旱魃に遭ひ湖河盡く涸るるの勢なりしを以て捻賊も亦糧食を得るの道なく遂に死力を以て河南に入り汴梁の附近に至りしに偶ま山東梁山の土匪使を遣して任賴兩會を迎ふるあり。茲に於て晝夜兼行鉅野に至りて梁山の匪と合し五月一二日一六、一三。を以て戴廟の隄牆を陷ゐれ運河を渡りて東し泰安を犯す。時に運河の水涸れしに加へて防備の士卒久しく懈りしを以て遂に登萊青三郡捻賊の横行を縱ままにするに至りしなり。論者李鴻章を咎むる者少からず。

茲に於て李鴻章は其本營を濟寧に移し劉銘傳の策を用ゐて運河を倒守せんとす。是卽ち運河東岸の長牆を西岸に移すにあり六月、東捻全股東して山東半島に集りしを以て李鴻章山東巡撫丁寶楨と軍を會し膠萊河を扼して之を海隅に逐盡せんとす。膠萊河とは元の至正年間海道の險を避くるが爲に開鑿せる運河にして其延長殆んど三百清里あり。然れども其北口は水淺くして牆を築くも以て守り難きにより西方三十清里の點に於て渤海に流注せる濰河を以て之に代へ兩河流を連絡するに又牆を築く。捻賊は官軍の方略を偵知し決戰して竄路を開かんとし膠萊河に迫りしも隙の乘ず可きなし乃ち轉じて濰河を渡らんとす。山東の將王心安此方面を守りしが隄牆なほ竣工せざりしより七月二〇日一八、一八。東捻長驅河を渡りて南走し將に沂蒙より江淮を窺はんとす。二六日八、二四。李鴻章濟寧より濟南に至り膠東

失守の報を聞きて急に臺莊に赴き運河防備の事を警む。時に安徽巡撫英翰並に丁寶楨等李鴻章を勁奏するものあり朝廷も亦李鴻章を責む。李鴻章辯疏覆陳する所ありしも憂悴して疾を致すに至りしかば曾國藩之を聞きて書を贈りて慰むる所ありしと云ふ。

李鴻章三枝の遊擊隊を作りて各一萬人を以て之を編制し以て賊を追擊せしむ九月郭松林負傷愈えしを以て劉銘傳潘鼎新と各其一枝隊に將となる。時に黃河の水盛に漲り溢ぎて運河に入りしを以て東捻途に之を飛渡ずる能はず漸く衰滅に近づく。一〇月劉銘傳捻賊を濰縣の松樹山に要擊して大勝を博し更に之を追擊ししかば任柱耳に銃創を受けて江蘇の贛榆に走る。是より先劉銘傳數捻賊を破りしより賊將潘貴升なるもの款を通じ任柱を殺して自ら贖はん事を請ふ。二二日一一七。劉銘傳贛榆に近づき自ら牛賴に當り善處をして任柱に當らしめしに牛賴先づ敗走す乃ち共に任柱を攻む。潘貴升隙を窺ひて後より之を射擊し呼で曰く任柱仆ると捻軍大敗す。任柱は原名を化邦と云ひ安徽壺州の人なり曾て洪秀全より魯王の封を受け頗る騎戰の法に通じ其技倆遠く張總愚李允の上にあり。餘黨賴汝光を推して首領となししも東捻の勢衰へて復た振はず賴汝光潘鼎新と戰ひて利あらず北走して魯光の王胡城に據りて死を誓て戰ひしが劉銘傳郭松林と兩路より之を攻め一一月二九日一二、二四。列王徐昌先首王范汝增任柱の兄任定等を陣斬す。賴汝光千餘騎を率ゐて南竄し一二月江蘇六塘河の防守を突貫して楊州に走る。劉銘傳郭松林等山東より疾驅追擊して清江に至り黃翼升等の水師も亦淮城に至る、一一日四紀一八六、一五。吳毓蘭賴汝光を死窖鋪に迎へ擊ちて之を斃にす。餘黨魏王李允牛喜等皆降りしを以て之を斬に處す。賴汝光善く謀り任柱善く戰ひ相結託して久しく猖獗を極めしが茲に至りて東捻全く平ぐ。

李鴻章東捻平定せるを以て兵を解きて歸農せしめんとす偶ま西捻の直隸を犯せるあり同治七年正月復た兵に將として河北に赴く。今捻匪兩分以後西捻の動靜を叙するの順序なるが更に之に先ちて左宗棠が閩浙總督として長毛賊の餘黨康王汪海洋侍王李世賢(李侍賢)を平定せる顚末に就きて略叙するの必要あり。是より先同治三年官軍の杭州省城を克復するや汪海洋は江西に走りて福建を犯し次で李世賢も亦之に傚ひ九月龍巖南靖を陷ゐれ其一四日四紀一八六四、一〇、一四。を以て又漳州を

陷ゐる。一一月三日一一、二、福建提督林文察漳州を攻めて敗死ししかば同二七日一二、二五。に至りて左宗棠親ら延平に駐して師を督す。時に汪李の部衆二十萬と號ししも左宗棠の所部は三萬に過ぎざりしを以て李鴻章は郭松林楊鼎勛をして楚勇淮勇を率ゐて海路厦門に至らしめ鮑超は霆軍に將として陸路江西の瑞金より武平に入りて共に之を援く。署兩廣總督瑞麟署廣東巡撫郭嵩燾も將を遣して邊を防ぐ。同治四年二月二一日三、一八。福建の軍江蘇の軍と合して李世賢の根據地なる漳州を攻めて之を克復す。而して漳州附近の諸縣竝に龍巖南靖等も前後收復せるを以て五月二〇日六、一三。汪海洋廣東に走り二日の後鎮平を陷ゐる。七月李世賢も亦廣東に遁れて汪海洋に賴りしが兩雄相容れず汪海洋途に親ら李世賢を殺す。其後汪海洋は一度江西を犯し一〇月二一日一二、八。に至りて復た廣東の嘉應州を陷ゐれしが一二月一二日四、紀一八、六六、一、二八。州東の佛子岡附近に左宗棠の部下と戰ひて戰死ししが爲十日の後餘賊州城を捨てて遁れ次で其衆十餘萬人皆降る。翌同治五年八月一七日九、二五。左宗棠楊岳斌の後を襲ひて陝甘總督に轉じ同治六年正月一八日二、二。更に欽差大臣となり陝甘軍務を督辨するの命を受く。

蓋し左宗棠が此命を受けしは陝甘二省の地回匪の猖獗なるに加へて前逃せるが如く西捻陝西を犯すに至りしを以て也。卽ち同治五年一二月西捻西安を犯し潮橋に於て大勝を博し勢に乘じて省城を圍み陝西巡撫喬松年防禦大に苦む。同治六年正月劉松山捻賊を西安の雨花寨に擊ち三月復た之を郿に擊ちて大勝を博し軍勢漸く振ふ。六月左宗棠師を率ゐて潼關に入りしかば西捻張總愚渭水を渡りて北に赴き蒲城富平高陵渭南の間を往來す。劉松山郭寶昌之を攻めて興平に走らしかば八月左宗棠の本營を臨潼に移すや捻賊興平より渭水を渡りて北し復た臨涇より涇水を渡りて東に赴きしも時偶ま大雨にして官軍追擊する能はず。九、一〇月の交捻賊蒲城洛川より宜川に向ひしに時に劉松山洛川に於て回匪と戰ひて破れしより其虛に乘じて延州綏德を陷ゐる。一一月劉松山等綏德を克復ししかば張總愚宜川より黃河を渡りて山西を犯し吉州鄉寧を陷ゐる。黃河の守備に任じ前直隸按察使陳湜山西巡撫趙長齡共に罰を受く。左宗棠劉松山郭寶昌等の軍を率ゐて親ら晉西に入りて吉州鄉寧を克復し稷山の圍を解きしが捻賊は平陽より南垣曲に走り黃河に沿ひて東河南省に入り原武より北折して衞輝府を犯し同治七年正月內

黄より漳河を渡りて直隸に入り忽ちにして定州に至る保定府當時直隸省城たり大に戒嚴す。直隸總督官文、左宗棠、李鴻章共に革職を命ぜらる。李鴻章が詔に接して更に河北に至りしは即ち此際なり。

同治七年二月李鴻章所部の諸將を部署し郭松林楊鼎勛を一大隊となし潘鼎新、普慶を一大隊となして保定府に屯せしめ親ら山東の德州に至る。其他山東巡撫丁寶楨は王心安の軍を以て進みて直隸の河間府に屯し左宗棠も部下を率ゐて西捻を追擊して保定府に至り安徽巡撫英翰も召に依りて北上す。二六日四一八、三一八六。郭松林等捻賊を安平の城下に擊ちて之を破る。李鴻章軍を直隸の景州に進む郭松林次で郭寶昌宋慶と捻賊を深澤饒陽に破り懷王邱德才幼沃王張五孩等を陣斬す。張總愚晉州より滹沱河を渡らんとして劉松山張曜等の追擊を受け狼狽僅に既渡の衆數千騎を率ゐて河南に入りしが沿道脅從多く其勢又大なり。三月一〇日四二。李鴻章進みて大名府に軍し以て京畿の門戸を守る。此月左宗棠滑縣に捻賊を擊ちて之を破りしかば捻賊は直隸の南樂、清豐を經て山東に入り東昌府を掠め運河を渡て東す。四月李鴻章黄運兩河を扼守するの策を定め丁寶楨、英翰と東昌に會し議して山東の軍は黄河を守り安徽の軍は臨清より魏家灣に至る六十清里を守り淮軍は東昌の南より張秋に至る九十餘清里を守る。左宗棠其防備の恃ひに足る可きを見て還て吳橋に駐す。是より以後捻賊は天津以南茌平以北、直隸、山東兩省の邊界を横行ししと雖も遂に黄運兩河を渡る能はず其勢益衰ふ。郭松林潘鼎新劉松山張曜宋慶等皆善く戰ひ六月七日七、二六。沙河の戰に於ては張總愚銃創を負ひて落馬し辛くにして免るるを得しと云ふ。時に李鴻章德州にあり劉銘傳張總愚が博平より東昌に向ひて運河を渡らんとし擊退されしを見徒駭河を守るの議を建つ。時に諸河共に滿水なりしかば張總愚徒駭、黄運三河の間に封鎖され且つ劉銘傳郭松林の攻擊急なりしを以て六月二八日八、六。遂に河に投じて死す。其子張葵兒從子張正江南鎮に走りしが劉銘傳に虜にせられ餘匪皆善慶等の手に仆れ西捻平定す。李鴻章功を以て協辨大學士となり左宗棠と共に太子太保を授けられ劉銘傳は一等男に封ぜらる。

第二節　貴州の苗匪（西紀一八五四——西紀一八七二）

貴州即ち黔省の叛亂は咸豐四年（西紀一八五四）冬興義、安順二府の管内に土匪の事を起し

しに始まり其勢の猖獗なるや貴陽省城幾度か重圍の中に陷ゐりしが湖南、四川の援兵を得て同治一一年（西紀一八七二）に至りて漸く平定するを得たり。其間實に十有九載の久しきに及ぶ。而して匪徒の中に就きて根據最も難く抵抗最も久しかりしを苗匪となす。本書上卷第七章第五節に略叙ししが如く雍正年間鄂爾泰苗蠻改土歸流の功を奏ししが當時貴州の東南部に古州臺拱清江都江、丹江、八寨の六城を創建して所謂新疆地方の鎮撫に充つ。其後乾隆二年張廣泗は又更に凱里、雞講、朗洞、柳城の各城を增建して益、布設を密にす。新疆の地界は鎮遠、黎平、都匀三府の間に跨り咸豐の初苗民の人口凡そ五六十萬を有ししと云ふ。是卽ち九股黑苗にして張秀眉、高禾等之が領袖たり。高禾は曾て道光の末黃平の革夷山苗匪に與して鎮遠知府胡林翼と戰ひ次で歸順の後從軍して湖北に赴きしも軍律を守らずして歸鄉を命ぜられ途に清臺地方に於て群苗を煽動して亂を謀る苗匪は實に高禾より發すと云ふ可きなり。貴西の地方も苗族少からず金大五、陶新春等以下皆張秀眉の命を奉じよく四川貴州の軍と相戰ふ。金大五は本名を李開元と云ひ高禾等と共に亂を興ししが李王の子なり父の死後王號を僭して英明王と號し黔西の嚴大五、丹江の楊大六を以て其羽翼となす。陶新春は畢節の猪拱箏に據りて衆數萬を擁し亦貴西の巨寇なり。苗匪の外なほ教匪、號匪、槓匪、狆匪あり。烏江の何得勝、都匀の潘明傑は教匪の領袖にして其黨貴陽省城の四近に蔓衍し屢〻省城を圍む。號匪ははじめ四川に起りしものなるが其領袖等涪州の敗後逃れて貴州を犯し思南地方の民間を煽動して亂を謀る。其衆十餘萬之を黃號白號に分ち黃號は濟安團と稱し劉義順之を率ゐ白號は致和團と稱し胡黑二之に長たり。槓匪は水城地方に據り狆匪は郎岱鎮寧の間に出沒し陶新春の聲援を爲す。之に加ふるに石達開の往來蹂躪せるあり貴州の事實に細叙するに勝えず唯大事のみを記す可し。

苗匪の初めて起りしは咸豐五年三月（西紀一八五五、四、）楊隆溥なるものが黃平の舊城を焚きし時にして其年九月教匪も亦麻哈に起りて之と合し漸く治む可らず。一〇月銅仁の舉人徐廷杰亂を謀りしに洞苗之に從ふもの萬人に及びしかば遂に湖南を犯す。湖南巡撫駱秉章兵を出して貴州巡撫蔣霨遠を助けて苗匪を討つ。蓋し貴州省は地不毛にして民貧困なるが故に一朝事ある時は常に川、楚、兩粵の援兵を得て之に應じしなり。然れども苗匪、教匪未だ鎮定せざるに咸豐七年八月號匪又思南に據り叛

徒の勢益〻振ふ。咸豐一〇年四月（西紀一八六〇、五、）田興恕叛徒と戰ひて功績多く貴州提督に任ぜられしが時に石達開恰も廣西より貴州を犯ししを以て苗敎號匪好機乘ず可しとなし修文を陷ゐれて省城に迫る。田興恕所部を率ゐて省城を援ひ更に大軍を督して定番に赴きしに石達開城を棄てて廣西に遁れしかば一二月朝廷田興恕を以て欽差大臣となし全省の軍務を督辦せしめ翌年更に署貴州巡撫を兼ねしむ。田興恕は湖南鎭筸廳の人にして時に年二十有四歲なりしと云ふ。此年一一月石達開湖南の靖州より北沅江麻陽に走り遂に四川に入る。翌同治元年正月一五日（西紀一八六二、一、一七。）佛國の宣敎師文乃爾 Jean-Pierre Neel 貴州人民と衝突を起ししに時田興恕怒りて之を殺ししが爲北京政府佛國公使の嚴談に遭ひ田興恕を免職す。三月回匪雲南より來りて興義を陷ゐれ閏八月石達開綦江より貴州に入り分れて黔西遵義桐梓を犯し普南より雲南に入り一〇月復た鎭雄を經て四川に入る。同治二年（西紀一八六三、）正月思南石阡の苗敎合して荆竹園を根據地となし以て附近を擾し二月石達開の黨鎭雄より來りて畢節を掠め猪拱箐苗匪と相連絡して跋扈す。同治三年（西紀一八六四、）正月貴西の苗匪開州修文を陷ゐれしかば前年署雲貴總督に任ぜられし勞崇光偶〻省城にありて防備大に力む。一〇月貴州の軍興義を克復ししを以て回匪遁る。時に長毛賊徒平定ししを以て廷議貴州雲南の叛亂容易ならざるを認め曾國藩李鴻章に命じて征討の大計を立てしむ。同治四年（西紀一八六五、）三月曾國藩上奏して曰く貴州を謀らんとせば當に湖南を以て本となす可し然れども湖南久しく軍事に苦みしが故に上年巡撫惲世臨は援兵を貴州に出し連戰連勝古州都江上江天柱の四城を克復ししも遂に勢に乘じて勞崇光を省城に援ふ能はず。新任巡撫李瀚章は李鴻章の兄にして軍事に經驗あり若し命ずるに一意貴州を援ふの事を以てせば或は功を奏するを得む。而して四川と雲南との關係も湖南と貴州との關係と相似たり宜しく四川總督をして一意雲南を援はしむ可しと。時に石達開の餘黨全く平き四川無事なりしを以て總督駱秉章其部下劉嶽昭をして兵を率ゐて貴州を援けしむ。劉嶽昭雲南布政使に任ぜられ四月を以て正安を攻め五月遂に州城を克復して軍を貴西に駐す。時に湖南の兵は江海洋の征討に從事ししが其平定するに及び同治五年（西紀一八六六、）春三路に分れて貴東に出づ。兆琛周洪印は靖州より李元度（光正亭略著者）は沅州よりして進み其所部の兵合計二萬と稱す。次で兆琛を貴州布政使に席寶田を貴

州按察使に任ず。席寶田は湖南東安の人にして其曾て洪福瑱を擒にしは前述せるが如し。李元度石阡の荆竹園に號匪を攻めしが功なく苗匪之と連絡する事舊の如し。既にして回匪復た興義を陷ゐれて漢民萬三千戸を殺し更に進みて普安廳に據る。

貴西に駐軍せる劉嶽昭は此時に當りて綏陽に克ち進みて黔仁の號匪を破り以て遵義の圍を解きしかば朝廷劉嶽昭を雲南巡撫となし而して先づ黔匪の征討に當り湖南の援軍と之を夾擊せしむ。嶽昭以爲らく貴陽賊中に孤立して巡撫の號令城外に出る能はず先づ仁懷黔西を攻めて清鎮を保ち以て貴陽に達せざる可らず。何となれば咽喉にして藥を下す能はず心腹にして氣を運らす能はずんは四肢痺痿の症を治する能はざればなりと。同治五年八月仁懷を攻めて之を克復し更に轉戰五十餘日悉く附近の號匪を平定し一〇月黔西に進み棠竹山を下して何得勝の黨與なる何正舉を破り一二月部將を遣して糧食を護して省城に入らしむ貴陽の糧道初めて通ず。同治六年（四紀一八六七）二月猪拱箐の苗酋陶新春官軍の日に迫り來るを見號匪魏洪發黃洪順等と黔西を犯ししが劉嶽昭迎へ戰ひて大に之を破り魏洪發黃洪順を擒にす。魏黃の兩酋は咸豐五年叛亂を起ししより久しく殘暴を極めしが茲に至りて遂に誅に伏す。六月雲南布政使岑毓英猪拱箐を攻めて之に克ち陶新春を擒にし賊徒千五百人を降し難民五千人を援ふ。猪拱箐は雲南の鎮雄四川の叙永に接するを以て五年冬陶新春鎮雄を犯ししより勞崇光之を怒り岑毓英をして之を攻めしめ包圍半載にして此功を奏ししなり。七月劉嶽昭平遠の苗を攻めて之に克ち進みて牛場を圍む。時に勞崇光卒して新任總督張凱嵩至らず雲南の事忽にす可らざるものあり劉嶽昭乃ち諸軍を督して九月に至りて牛場に克ち貴西漸く憂ふ可きものなきを以て湘勇を率ゐて雲南に赴く。

然るに貴東に於ける湖南の援軍は其數增加して三萬に達し年額三萬兩の軍費を費すも寸效なきを以て更に駱秉章に命じ四川の軍をして遵義に出でて貴陽を援けしめ又湖南巡撫劉崐に令し席寶田をして萬人を募りて貴東を援けしむ。同治六年一〇月席寶田の軍湖南の沅州に至り一二月進みて石阡に軍し翌同治七年（四紀一八六八）正月李元度と共に荆竹園を圍みて之を降し黃號白號の匪徒を平定す。苗教匪徒茲に於て初めて瓦解の色あり。苗酋張秀眉頹勢を挽回せんとし湖南を犯ししが席

寶田軍を還して之を麻陽に要擊し大勝を得しかば苗匪是より復東犯せず。既にして李元度歸鄉ししを以て四月席寶田貴州に還りて其軍を併せ砦頭を奪ひて臺拱を攻む。而も炎暑の間士卒病むもの多く戰ふ能はず秋冬の交に至り劉岷の許可を得て專ら南路に當り援軍の將黃潤昌北路に當る席寶田は其部將榮維善をして行くに帷帳を用ゐず居るに城砦に依らず輕兵を用ゐて附近の苗砦を下さしむ。一二月黃潤昌鎭遠を攻めて之に克ち進みて施秉を回復ししを以て席寶田榮維善をして清江を攻めしむ蓋し臺拱を以て苗匪の根據とせば鎭遠と清江とは其兩翼をなせばなり。清江に公鵝董敖の二大苗砦あり雍正中鄂爾泰二萬の大兵を用ゐて遂に董敖を下す能はず撫して還りしより苗匪大に之を恃む。同治八年四紀一八六九、二月榮維善沅江を渡りて董敖を攻めて之を降し次で公鵝を破る諸苗相次で降り遂に清江廳城に克つ。榮維善暫く士卒を休めんと欲ししが黃潤昌の援を求むる事頻なりしが爲之に赴きしに時に偶々黃軍黃瓢山に於て伏兵に遭ひ潤昌も亦戰歿ししかば榮維善怒りて親兵二百人を以て奮戰三晝夜一人も生くるものなし。此鎭遠の敗報公にさるるや席寶田を責むるもの頗ぶる多し劉岷獨り之に反對し廷議又其言を可とす。

同治八年三月張秀眉虛に乘じて巴冶を攻めしが席寶田の攻擊に遭ひて稿米に走り次で之を棄てて遁る。一〇月鹿繼昌等抱嚴の九砦を攻めて之に克つ。同治九年四紀一八七〇、三月席寶田大舉して施洞を攻めて之を拔き連りに班鳩白洗甕版諸苗を降す。時に四川の援軍既に進みて黃瓢山に至りしが糧食の事に關して將校の議合はず遽に軍を還す。以後四川は專ら軍費を助成し貴州をして自ら兵を募らしめ而して湘軍專ら苗事に任ず。一〇月席寶田臺拱に向ひ先づ一五日一七、一、を以て革夷砦を奪ひ十日の後一一、一七、臺寇廳城を克復ししを以て苗匪悉く九股河に聚まり丹江の凱里廳を以て其巢穴となす。九股の黑苗は楊應龍より以來頻りに大軍を拒ぎしが皆其險阻を恃み降を約して退きしを以て官軍未だ嘗て其境に入らず。席寶田之を滅するの決心を定め兵を用ゐる三月にして苗砦二百二十を平げしかば雞講丹江の苗皆歸化を請ふ。同治一〇年四紀一八七一、四月凱里、全洞の砦を拔き乾隆中設くる所の六廳城皆克復ししかば席寶田は軍を施洞を還し翌月張秀眉を雷公山に破りしが次で病を得て歸鄉す。嗣繼昌蘇元春唐本有謝蘭楷等代りて湘軍を指揮す。蓋し苗事略ぼ定

なるを以てなり。此時王文韶劉岷に代りて湖南巡撫となり益〻援軍を促して賊を破らしめしかば同治一一年（西紀一八七二）三月に至りては烏鴉坡の險砦未だ陷ゐらざるあるのみ。全黔の叛苗悉く其附近に萃まる。湘軍の諸將貴州の軍を約して之を圍み一二日（四一九）より二八日（五四）に至るまで塵戰十七日間に亘り悉く烏鴉坡二十清里以内の苗砦を平ぐ。四月一日（五七）、龔繼昌苗酋を追擊して雷公坪に至りて嚴大五を陣斬し六日（五一二）、張秀眉楊大六を烏東山に擒にし復た金大五を白水洞に獲悉く之を湖南の長沙に送りて斬に處す。此月劉嶽昭軍を遣して興義の回匪を征服し貴州全く平ぐ。此叛亂の結果苗民の人口減じて僅に數萬を存するに至りしと云ふ。

第三節　雲南の回匪（西紀一八五五——西紀一八七三）

雲南省は漢代の滇國にして元明以後に至りて初めて支那の領土に入りしが回教徒の同地方に移住ししは或は元代なりとも云ひ或は唐代なりとも云ふ。回教徒の親ら傳ふる所によれば西紀第八世紀に於てバクダッドの教王は支那皇帝（吐蕃王）の乞により三千の土耳古兵を遣して雲南地方の侵略を助けしめしが事平ぎて後此回教徒の援兵は豚肉を食する支那人と伍をなししが爲歸國するを得ず遂に定住するに至れりと。其眞僞は知る可らずと雖も雲南の地回教徒多くして支那人種と雜居せるは之を元代以後の史に徵して疑ふ可らず。降りて前世紀に至り咸豐元年（西紀一八五一）、雲南の官吏が漢回兩民の爭鬪に干渉ししより時回教徒が其不公平を訴へしは當時の清帝の上諭に見ゆるも其雲南回匪の發端は實に咸豐五年（西紀一八五五）にあり。此年臨安府の銅鑛に於て悍回漢民と衝突を起ししより遂近の回教徒は風を聞きて響應し馬金保藍平貴は姚州に起り杜文秀は蒙化に起る。杜文秀は永昌州の業族にして蒙化の圍堰に潛匿ししが圍堰の回會萬人を糾合して之を助け提督文祥が姚州を攻むるの虛に乘じて大理府を陷ゐる。博士アンダアスンの旅行記によれば大理府は當時人口三萬五千の小都會に過ぎずと雖も府の東に長さ四十哩幅十哩の洱海を控へ且其附近の平原は山嶽四周中に四十萬の住民を有ししと云ふ。元の世祖征討の時獨立國の首府をなし今尚西藏人は其祖先の地となす蓋し要害の地なり。咸豐六年（西紀一八五六）、馬世德は臨安通海の中間に位せる館驛の土城に據り馬和馬

貴は澂江府に據りて呈貢晋寧宜良江川の諸縣を下し將に省城に迫らんとす。時に雲貴總督恆春師を督して貴州にあり亂を聞きて軍を雲南に還ししが容易に平定の功を奏する能はず。咸豐七年四紀一八五七閏五月回匪大舉して省城を犯し城外の廬舍を燒きしも之を擊退する能はざりしかば恆春大に憂懼し六月一日七、二〇。夫人博馮特氏と共に縊死す。

初め回徒の僧侶に馬先なるものあり曾てメッカに往きて天房に朝し又埃及、土耳古に旅行して雲南に歸り教徒間に人望あり。回教徒の亂を起すや杜文秀と馬先とは互に力を協せて參畫ししが爲一時回匪の勢大に振ひしも杜文秀は大理府の要害堅固なるを恃みて遂に馬先と絶つ。故に咸豐七年に於て雲南省城を犯し時回匪は遂に之を下す能はず。其後咸豐九年四紀一八五九に至りて馬先は復た五萬の匪徒をして省城を圍ましめ將に之を陷ゐるるに垂んとしし突然雲貴總督張亮基に向て其衆を擧げて降を請ふ。張亮基之を許し其名を如龍と改めて之を總兵に署任し降服せる回教徒を率ゐて功を建てしむ。然れども杜文秀の親族なる禁七二新に順寧、永昌、騰越等を陷ゐれて迤西全く回匪の有に歸し其勢侮る可らず。殊に同治二年四紀一八六三正月の如き省城殆ど匪徒の有たらんとしし事あり。此月一三日二三、馬如龍の部下馬榮兵三千を率ゐて省城に入り城中の最高地なる五華山に屯す。署總督潘鐸深く馬榮を信任ししかば一五日三、四。自ら其軍に趣きて解散を說諭ししに其黨應ぜず刺して潘鐸を殺す。布政使代理岑毓英、馬榮と戰ひて其乞降を許さず。且つ使を馬如龍の許に遣はし省城を援はしむ。二月一日三、一九。馬如龍省城內の回匪を驅逐し馬榮南寧に走りしを以て省城又安し。時に新任總督勞崇光は貴州に巡撫賈洪詔は四川にありて匪徒の征討に從事ししが爲岑毓英は獨力を以て雲南の兵事に當り先づ西方に向ひて大理府以東の地を收め同治三年四紀一八六四七月更に東に轉じ九月尋甸に克ちて馬榮を擒にし一〇月曲靖を克復して馬聯陞を得其に之を誅し迤東を平定す。此頃馬先杜文秀を訪ひて歸順を勸告ししも杜文秀は其言を賤みて應ぜず偏に天險を恃む。

勞崇光同治五年四紀一八六六に至りて初めて雲南省城に至り馬如龍をして專ら杜文秀に當らしめ岑毓英をして貴州の猪拱箐を攻めしむ。猪拱箐攻擊の記事は前節を參看せば足れり。同治六年四紀一八六七春勞崇光卒ししを以て雲南巡撫劉嶽昭に命じて湘

軍を率ゐて貴州より速に任地に赴かしむ。此時に當り府城の回匪の有に歸するもの四即ち杜文秀は大理にあり姚得勝は麗江にあり楊德明、馬國春は永昌にあり馬德征は順寧にあり。其蔓延する所九州七廳三縣に達す。此年七月馬如龍、姚州鎭南州を攻めしが軍中疫病起りて省城に歸りしより杜文秀其部下をして勢に乘じて東侵せしめ省城急を告ぐ。然るに幸にして岑毓英既に猪拱箐に克ちて雲南に歸りしを以て其兵を分派して回匪に當る。然れども迤西回匪の勢益猖獗にして同治七年（四紀八六八）正月には富民、安寧、昆陽、呈貢等の諸州縣を陷ゐれ其衆三十萬、省城の西南北三面を圍む。總督張凱嵩病を以て其職を免ぜられ三月劉嶽昭雲貴總督となり岑毓英雲南巡撫となる。時に嶽昭毓英は曲靖にあり而して悍回馬添順なるもの尊甸に據りて杜文秀に應じ省城との連絡を斷つ。楚軍の將李家福が甸尾、古城、廠口を下して糧道を通じ參將楊玉科が四川の會理州を經て武定、大姚諸州縣を攻め之を克復しより省城の人心漸く安し。一〇月澂江も亦回復するを得しかば馬如龍兵を分ちて尊甸の攻擊を助けしめ一一月劉嶽昭大舉して之を圍みしが利あらず同治八年（四紀八六九）三月澂江の回徒復た叛す。岑毓英省城附近の小偏橋、蕭家山、神羊寺を攻めて糧道を通じし後劉嶽昭乃ち復た三路より尊甸を攻む。馬添順遂に屈し城を獻じて自ら贖はん事を乞ふに至り五月五日（六、一四）。漸く州城を回復す。八月岑毓英、馬如龍相議して安寧の各隘を攻め賊の歸路を扼ししより回會叛成功、蔡廷棟等衆五千人を率ゐて出でて降る。是より先楊玉科既に大姚、廣通を拔き岑毓英は江右館に克ち省城の圍始めて解く。

省城附近の回匪悉く土堆に入りしかば岑毓英、馬如龍は兵を分ちて附近の郡縣を回復せしめ雲南、湖南の軍をして力を合せて土堆を攻めしむ。九月劉嶽昭省城に入る。一五日（一〇、一九）。昆陽の賊將馬光明出でて降りしも楊振鵬は誅を懼れて固守ししが一九日（一〇、二三）に至り州城克復せられ馬聯魁と共に誅に伏す。昆陽は省城を距る百二十清里にして中に滇池の横はるあり故に舟行一夜にして達す可し。而して馬聯魁は同治元年一度歸順して官副將に至りしが復た叛して昆陽に據り久しく省城肘腋の患をなしを以て茲に至りて世人大に其誅を喜ぶ。時に西方進擊の諸將は各路を分ちて進み一〇月には蒙化を圍み其馬街土城を破りて大理府を距る百清里の地に迫り一一月二三日（一二、二七）には麗江府城を克復ししが惟り迤南の澂江、新興、久

しく下らず。同治九年二月八日四紀一八七〇三九。岑毓英親ら將として瀘江を攻め一五日三六。馬如龍親ら將として新興を攻む。三月楊玉科姚州を攻めて其土城を破り身負傷を受けしも屈せず。四月一日五一。地雷を以て其北城を陷ゐれ馬金保藍平貴を擒にし次で之を誅す。五月二日五三一。馬如龍新興を克復して賊將田慶餘を斬りしが病を得て省城に還る。七月岑毓英瀘江附近の賊壘一百五十を毀ち翌同治一〇年二月一日四紀一八七一三二一。に至りて漸く府城を克復す。瀘江は三面山を環らし其南に撫仙湖あり形勝の地なりしを以て圍攻一年の久しきに及びしと云ふ。是より先前年一〇月九日一一。楊玉科、錬鐵に克ちて杜文秀の本宗母兄楊占鵬を生擒して悉く大理の北路を定め閏一〇月一三日五一二。官軍圍攻一年以上に亘り彌勤の竹園に克つ匪徒火を放ちて自ら焚死し一人の降るものなし。竹園は開化廣南臨安三府の間に介在し迤南の腴區にして廣西安南より雲南に入るの要衝に當る。茲に於て官軍既に三十二城を復し其未だ復せざるは大理、永昌、順寧の三郡城蒙化騰越の二廳雲趙永平、雲南の四州縣あるのみ。

七月二三日九七。楊玉科、永昌府城を克復し一二月一六日四紀一八七二一二五。岑毓英、館驛の土城を平ぐ馬世德田心に走りしが翌同治一一年正月一三日二二一。田心の落城に際し自ら焚死し其他馬敏忠馬國政等は九月一七日三一〇。に至りて誅に伏し館驛の回匪全く平定す。而して此年正月より五月に至るの間楊玉科、李維述等は次を以て永平、雲南趙蒙化に克ち悉く大理の藩屏を奪ふ。杜文秀自ら萬人を率ゐて趙州を援ひしが其功なし。楊玉科大理の攻擊を以て自ら任じ一一月一〇日一一〇。より一七日一一七。に至るまで地雷を用ゐて土城を攻め匪徒二千餘人を仆す。二六日一二六。杜文秀死黨を率ゐて出で戰ひしが復大敗し遂に降を乞ふ。楊玉科其乞を容れて之を誅せんとしに賊將蔡廷棟の護して出づるを見れば杜文秀は既に毒を服し氣息將に絶えんとす乃ち其首を斬りて省城に送る。或は曰く杜文秀、楊玉科に一杯の冷水を求めし時之に毒藥を與へしなりと。一二月四日四紀一八七三一二。岑毓英親ら大理に至りて指揮の任に當り一一日一九。欺きて文秀の幼子三、女子一並びに其黨魁楊榮、蔡廷棟等百三十人を擒にし城内の兵民萬餘人を屠る。同治一二年二月二五日四紀一八七三三二三。楊玉科順寧に克ち四月二日四二九。雲州に克ち五月三日五二八。李維述騰越に克ち雲南の回匪全く平定す。初め同治六七年の頃杜文秀は緬甸を經て來れる英國の探檢者を優待

し且つ其甥を使節として倫敦に派遣し英國政府の援助を求めんとしし事ありしが其請求は素より拒まれて却て之が爲に北京政府をして迅速に回匪を鎮壓するの方針を取るに至らしめしと云ふ。

コツーン曰く雲南の人口は回匪以前には一千六百萬に達ししが今は僅に六百萬に過ぎずと以て其甚しく同省を疲弊せしめしを見る可し。而して上來の叙述やや前に過ぎしを以て大理府克復の時に於ける劉嵩昭、岑毓英の上奏中より一節を抜抄して此記事を結ばむ。曰く杜逆亂を倡へてより十八歲城を陷ゐる事五十三、西は四川の會理東は貴州の興義に達し禁城を僞造し王制を僭規し直ちに洪逆に追蹤し一時に並駕せんとす。官軍四度西征して功を奏する能はず。咸豐六年提督文祥四川の軍を率ゐて征討を助け紅崖に克ち賓居を圍みしも東西の回匪省城を圍みしを以て還て之を援はんとすれば則ち彌渡雲縣失ふ。九年提督褚克昌鶴關雲南驛に克ちしも館驛澂江の回匪廣通楚雄鎮南を陷ゐれて其後を襲ひしかば則ち褚克昌の全軍覆へる。同治二年臣毓英署布政使たり連りに景東鎮沅永北楚雄廣通定遠を拔き進みて鎮南を規りしも馬連陞馬榮霑益尋甸の衆を率ゐて曲靖馬龍平彝に據りしを以て兵を撤して回顧すれば大理の役遂に果さず。六年提督馬如龍初めて定遠に至るや前軍利を失ひ且つ合國安楊振鵬等內外より起りしかば連りに定遠楚雄以下二十城を失ひ則ち省城の圍殆んど解けず。其故何ぞや東南黨援未だ除かざるにより迤西の寇氛愈よ熾なるなり。故に先づ各路に兵を出し曲靖に克ちて東隅を固め省城の圍を解きて內患を清くし澂江を復して內地を寧くし臨安を平げて南徼を定め內顧憂無きに乘じて遠く圖れば功を成し易し。臣等東方を先にして以て後に迤西に及ぼしは職として是によるなりと。

第四節　關隴の回匪（西紀一八六二——西紀一八七三）

乾隆中甘肅の蘭州石峰堡に於ける叛亂平定後凡そ八十年間關陝甘隴兩省の回徒は漢民と雜居して重大なる紛議を生ずること稀なりしが雲南の回匪起りしより數年を經て同治元年（西紀一八六二）に至り陝西の回徒先づ亂を起す。但し雲南の回徒を助けんが爲に蜂起せるにあらず此年二月擧匪扶王陳得才が陝西を襲ひしより偶ま

其義兵を促ししなり。初め咸豐の末年河南巡撫殷譜森、陝西の荔渭、涇陽地方に回勇六百を募集して汴梁の守備に供し湖北に轉任するに及びて之を歸鄉せしめし事あり。而して陳得才の省城に迫るや團練大臣張芾は巡撫瑛棨と議して紳民を勸誘して守備の任に當らしめ訓導趙權中沙苑の衆を以て箭谷を守る。四月一日（西紀一八六二、四、二九。）渭南の回目、馬世賢馬四元回勇五百を率ゐて趙權中の軍に赴きしが其後民團敗れて退却するに及び回勇も亦之に倣ゐ三々伍々群を爲し途上華州の小張村に、於て民家の竹を伐りて矛と爲ししものあり。所有者之を覺りて衆を集めて之を逐ひ其二人を仆ししかば餘回逃れて華州回民の根據地なる秦家村に至り同教徒を糾合して復讎せんとす。然るに小張村の住民も亦附近の漢民に檄を傳へ其機先を制せんとしを以て華州の回徒大に恐れ悉く老弱を携へて渭水を渡りて其北岸荔渭沙苑の間に移る。時に回目に赫明堂、任五なるものあり曾て咸豐五、六年の頃雲南に於て亂を倡へて事成らず潛に遁れて渭南の倉頭渡に寓す。茲に於て事を起すの好機熟せりとなし禮拜寺に隱れて私に器械旗幟を造りしに群回畏れて其命を奉ず。而して大荔の王閣村、羌白鎭の回徒素より鄉村八女井の漢民と隙あり此月二五日（五、二三。）王閣村の住民遂に起り八女井を襲ひて之を燒きしより大荔の沙南渭南の河北に於ける村落相次で焚屠せらる。二日の後回徒孝義鎭を燒きて趙權中以下紳民五百餘人を殺す其首たるは卽ち河南より歸鄉せる回勇なりしと云ふ。張芾北京政府の命を奉じ回徒を安撫せんとし五月七日（六、三。）臨潼の油坊街に赴きしに翌日倉渡の回目十餘人來り謁す。張芾慰撫して曰く汝等は皆良回なり釁を起すは任五のみ唯渠魁のみ誅して脅從は罪せずと。豈圖らんや任五も亦其回目中にあらんとは。任五之を聞きて大に怒り潛に倉渡に歸りて其黨數千を聚め一一日（六、七。）急に張芾を襲ひて之を擒にし次で之を手刃して怨を報ず。既にして回徒同州を圍み又省城を犯すに至りしを以て朝廷遂に安撫の方針を變じ勝保に命じ兵を率ゐて陝西に赴き之を征討せしむ。八月勝保逃りに回匪を臨潼、朝邑に破りて前進ししかば灞橋の諸回巢風を聞きて遁れ省城安きを得たり。然れども勝保の部下降卒多くして軍規行はれず上下に信用なきを以て一一月多隆阿に欽差大臣を授けて代りて陝西の軍事を督せしむ。多隆阿是時に當りて既に粵捻諸賊を驅逐し人望極めて高し。潼關に至りて回巢中其最も精悍なるは卽ち王閣、羌白なるを知り直ちに同州

に赴きしに回匪銳を悉して來り犯す。多隆阿令して曰く回匪起りてより以來未だ大敗せず故に敢て先づ來りて我を試む今日の役は全秦の安危に繫る吾親ら陣に臨みて戰を觀、勝たざるものあらば之を斬らむと忽ちにして之を擊退す。乃ち穆圖善陶茂林等の猛將を都署して攻勢を取り同治二年二月一日（西紀一八六三年三月一九日）羌白鎭に克ち進みて玉閣村を攻めて之を下す。其羌白に向ふや諸將と約して曰く一鼓にして齊しく進み再鼓にして悉く登り三鼓にして克たざるものは杖ち四鼓にして克たざる者は斬らむと。回徒倡亂の地平ぎしを以て次で勢に乘じて三月二四日（五、一一）孝義鎭を四月二日（五、一九）倉渡を下し其勢恰も枯朽を摧くが如く軍士疫病に苦み多隆阿も亦痢を患へしにも拘らず七月に至りては省東又一の回匪を見ず。

然るに是より先前年七月鳳翔の回徒漢民を殺して郡城を圍み此年正月甘肅の回徒平涼に起りて固原を陷ぬれしかば陝甘總督禦麟慶陽に至りて是が征討に任じしも未だ寸功なし。故に多隆阿の西安に至るや鳳翔平涼を援ふの命を受けしを以て陶茂林をして鳳翔に赴かしめ親ら曹克忠穆圖善と共に雷正綰を助けて咸陽附近の回匪を伐ち蘇家灣渭城灣に於て其多數を仆す餘匪皆甘肅に走り平涼等を下す。既にして陶茂林は鳳翔の圍を解きて甘肅提督に任ぜられ多隆阿は西安將軍に轉任し曹克忠は河州鎭總兵となる。茲に於て陶茂林雷正綰と共に甘肅に入りて平涼を攻めんとす。時に甘肅の寧夏に於て又漢民回徒と爭を起ししが將軍慶瑞之を慰撫せんとして守備を禁じしが爲一〇月二四日（一二、四）回徒夜を以て寧夏を陷ぬれ兵備道侯登雲を害す。滿城數清里を隔つるより慶瑞聞かざるの態を裝ひ其横暴を禁ぜず。翌日靈州回徒又起りて州城を陷ぬれ掠奪を行ふ。寧夏は土地肥沃にして形勝の地なり西夏の趙元昊此地を首府となして以て宋に抗衡するを得しは世人の熟知する所ならむ。初め陝西の回徒亂を起すや黨與を出して各地の回徒を煽動し靈州の同心城鹽茶廳の預望城等皆匪徒を生じ而して馬化隆は亦金積堡に據りて亡命の徒を招集す。馬化隆は馬明心の開きたる新教の教主にして曾て其父馬二の親友なる穆大阿渾の死に臨みて其服する所の白帽紅衣を得以來其事を行ふ。かくて寧夏既に陷ぬりしより其酋赫姓使を派して馬化隆を迎へしに其城に入るや回徒皆道左に跪きて命を聽く。時に馬彥龍馬占鼇は和州に起りて狄道を陷ぬれ馬桂源馬本源は西寧に起りて總兵知府桂源を逐ひしも辨事大臣玉通之を制す。

る能はず。其後馬文祿蘭州に據りて自ら兵馬大元帥と稱し其他各地相次で亂れ甘粛全境完土なし。

多隆阿鹽屋の攻擊に重傷を負ひし後穆圖善欽差大臣代理となり新任西安將軍德興阿、陝西巡撫劉蓉と陝西の軍事に當り陳得才等を伐ち固原提督雷正綰は陶茂林、曹克忠と共に軍を率ゐて甘粛を援ふ。同治三年五月一一日（四紀一八六四・六・四）。雷、陶の二將平涼を攻めて之を克復し更に瓦亭を下ししが偶々霖雨の候に會して軍を進むる能はず八月一七日（九、一七）に至りて進みて蓮花城を攻めしも利なく雷正綰負傷す。既にして雷正綰の創愈え且つ曹克忠も來りて蓮花城の攻擊を助けしかば官軍勢益振ひ一〇月六日（一一、四）。遂に之を降す。同治四年二月一日（四紀一八六五・二・二六）。更に固原を克復し連りに鹽茶廳城並に預旦城、同心城等回匪の根據地を下し連戰連勝破竹の勢なりしも如何せむ糧食繼かず六月七日（七、二九）。金積堡に薄るや雷正綰の軍先づ二千餘人の死傷者を出し曹克忠も亦遂に支ふる能はず。而して是より先陶茂林が喪を終ゆるが爲に歸鄉せるより所部の軍隊叛を謀りし事ありしが茲に於て雷正綰の部將雷恒なるもの又回酋赫明堂と通じて士卒を煽動せるより固原復た回匪の有に歸し八月雷正綰平涼に退軍す。回匪の勢忽ちにして大に振ひ金積堡の回徒は陝西の延鄜を窺ひ河狄の回徒は鞏昌を犯して寧遠を圍み隴州慶陽地方も亦回匪の横行するものあるに至る。同治五年（四紀一八六六）。正月陝甘總督楊岳斌は甘粛の省城蘭州を發して慶陽に赴きしが時に省城糧食乏しきより標兵回匪に通じて不軌を謀りしを以て一度蘭州に還りて之を鎮撫し七月通渭に赴き劉蓉の派遣せる陝軍と協力して洮隴華亭地方を平定す。楊岳斌は同治三年より陝甘兩省に總督たりしが兵力足らずして回匪を勦滅する能はず加之間もなく捻匪陝西を犯すの事あり遂に病を養ふを名として辭表を呈す。此頃陝西巡撫も亦更迭し喬松年劉蓉に代る。

同治六年六月一四日（四紀一八六七・七・一五）。新任陝甘總督欽差大臣左宗棠が函谷關を通過して陝西に入るや甘粛の回匪は其西境を犯し捻匪は其東境にあり而して甘粛の土匪董福祥は新に起りて靈州の花馬池に據り其勢又侮る可らず。左宗棠所部百營を部署して高連陞劉典をして專ら回匪に當らしめ捻匪の東、山西に入るに及びては劉典をして代りて陝甘の軍を督せしめ親ら東征す。同治七年（四紀一八六八）。二月劉典署陝西巡撫となる。時に將軍穆圖善蘭州にあり其將を遣して狄道城を攻めしに其酋卒

弗諦降を乞ふ三月二三日一四、一五。穆圖善親ら牟弗諦以下男女三千人の降を許す。狄道の回匪の有に歸ししより實に五年の歳月を經たり。六月捻匪平定せるを以て左宗棠の部將劉松山郭寶昌は軍を陝西に還し左宗棠も亦一〇月一三日一一、二六。を以て西安省城に至り遂に三路回匪平定の策を定む。即ち北路は劉松山をして綏德より道を花馬池に取りて直ちに金積の老巢を擣かしめ南路は道員周開錫をして秦州より鞏昌に赴きて河狄の回匪を伐たしめ中路は親ら劉典と諸軍を督して盡く陝西の回匪を驅りて甘肅に入らしめんとす。一二月六日四、一九、一一八。六劉松山綏德に至り大理川小理川の匪巢を攻めて土匪回匪八千餘人を擒斬ししが以後連戰連勝一八日三〇。を以て全軍董福祥の老巢鎮靖堡に抵る。董福祥の父董世有地に跪きて降を乞ひしかば則ち之を許し暫く士馬を休む。同治八年四、八六。一九、二月左宗棠本營を乾州に進め益諸將を督して西進せしめしかば同月二二日三四、回匪老若輜重悉く董志原の根據地を去りて北走す。此日雷正綰等遂に董志原を下し次で全く涇州慶陽の所屬を平定す。既にして四月に至りて陝西全省回匪の跡を絶ちしを以て左宗棠兵を甘肅に進む。

此時に當り董志原の餘黨の寧夏に走りしもの更に北方蒙古の旅地を擾し河東七旅を蹂躪し阿拉善の牙帳を侵犯して定遠の營を圍みしが遂に志を遂くするを得ず。蓋し金順、張曜の諸將邊外に備ふるを以てなり。同治八年六月左宗棠涇州の瓦雲驛に至り八月劉松山の軍靈州に進む。馬化隆、數劉松山と戰ひて敗れしより甘肅の回徒に託して降を乞ふに至りしかば陝西の回匪等は一度身を金積堡に託ししも此事を耳にして自ら安んずる能はず禹得彥、白彥虎、李經畧等は預望城を棄てて鹽茶廳より西竄し崔三、馬生彥、馬正和等は寧安四百戶より西趨し南河州の回匪に合せんとす。黃鼎等之を追擊して賊徒千五六百人を仆す。八月劉松山靈州を克復し匪徒二千餘人を擒斬す。一一月一日一二、三。左宗棠本營を平涼に進む。馬化隆幾度か降を乞ひしも其本心に出でざる事明なるを以て採用せられず私に崔三等の赴援を期ししも諸會皆官軍に破られて金積堡に近づく能はず。此年一二月遂に一隊の賊徒を出して定邊を陷ゐれ以て劉松山の糧道を絶たんとす。左宗棠郭寶昌をして直ちに定邊に赴きて之を擊退せしむ。同治九年正月一五日四、一八、二、一五。七劉松山馬五寨を攻め親ら士卒を督し薪を以て寨門を燒きしに飛丸忽ち左乳に中り重傷を負ひし

かば寨の陷ゐるを待ちて遂に瞑目す。劉松山は湖南湘鄉の人にして王盦老湘營の部下なり身を卒伍に起し功を積みて廣東陸路提督に至り關隴回匪平定に與りて最も功あり死する時年未だなほ三十七歳なり。

劉松山の死するや左宗棠直ちに其從子布政使銜道員劉錦棠をして其軍を統べしむ。時に馬化隆の兒餘復た熾んにして上は峽口を圖り下は下橋永寧洞に據りて秦漢兩渠の間を固めんとす。左宗棠書を送りて堅守退屯を命じしも劉錦棠乃ち以爲らく力戰せざれば則ち靈州を保つを得ず必ず齊しく死を致して後此軍全うす可しと其書を秘して進み戰ふ崔三東犯して官軍の力を分たゞし陝西に入りしが空しく擊退せられ馬正和、余彥祿相次で戰死しを以て官軍の勢益〻振ひ同治九年九月劉錦棠、雷正綰、黃鼎等殆ど全く金積堡附近の回寨を平ぐ。即ち東方吳忠より靈州に至るの堡寨四百五十餘にして其存するは王洪、楊明の兩堡あるのみ西方洪樂より峽口に至るの堡寨一百二十餘にして其存するは馬家灘の四堡あるのみ洪樂堡は馬化隆祖先墳墓の地にして民俗風水神の寓する所となししも又既に官軍の有に歸す。官軍外より金積堡を偵察するに其周圍九清里有奇高四丈厚三丈の城壁を具ふ馬化隆復た河州の回匪に援助を求め崔三萬得彥乃ち河州を出でて平番鎮番を犯しも其地離隔せるが故に金積の外援全く絶ゆ。而して陝西の回徒劉喪信左宗棠の命を奉じて金積に赴き老弱を招撫ししかば回徒の普洱阿洱と稱する馬清喜等數百人先づ降り陳林等八千餘人も又降る。既にして王洪楊明馬家灘の諸堡皆陷ゐりしを以て一一月一六日（四起一一八七）馬化隆親ら劉錦棠の營に詣り地に伏して罪を請ひ身を以て其黨の刑を緩ふせん事を求む。同治一〇年正月一〇日（二、二八）。劉錦棠馬化隆馬耀邦父子に詣るに北口に於て洋人と通商しし事を以てしも其實を吐かず乃ち之を誅す而して黃鼎、雷正綰は化隆の弟姪馬成隆、馬中邦等を刑し降衆一萬一千餘人を平涼地方に移す。左宗棠上奏して曰く西陲の靖からざるもの今に九年關隴の諸回金積を視て背を爲す今金積破る回勢瓦解せむと。三月寧夏地方平定せるを以て五月左宗棠初めて諸將に檄して河州の回匪を伐たしむ。蓋し洮河浮橋渡船の準備成り粮糧も又略〻整ひしを以てなり。

左宗棠同治一〇年七月を以て靜寧に八月を以て安定に本營を移し先づ洮東の康家崖を下さしめ次で洮西の三甲集を拔かしむ共に形勝の地なり。一〇月黑山延袤

數十清里間の大小回壘皆平ぎ一二月黨川の回壘も悉く降る。河州の回酋馬占鼇一度牟尼溝に遁れ三度太子寺に走りしが官軍大舉して來るを見同治一一年（一八六二）正月遂に降を請ひ馬四四千有奇餘丞一萬四千餘點を獻ず。翌月降回を各地に移住せしめ河州平ぐ。此時徐占彪已に肅州に抵りしが陝西の回匪馬長順馬文祿を助けて善く戰ふを以て六月に至りて漸く其西南の堡壘を下すを得たり。馬文祿一に又馬四と稱す。七月五日（八八）左宗棠蘭州省城に至り更に諸將をして西征せしむ。是より先金積堡の陷ゐるや劉錦棠は劉松山の遺骸を奉じて歸鄉ししが再び甘肅に歸り此年冬大に回匪を西寧大通に破る。翌同治一二年（一八七三）正月大通の回酋馬壽誅に伏し二月四日（三、二〇）馬桂源馬本源もまた捕虜となり西寧の役初めて竣る。陝西の回酋崔三、馬得彥甘肅の回酋治興福、馬福壽は既に劉錦棠に降りしも惟り白彥虎は殘黨を率ゐて永安より肅州に向ふ。金順宋慶相次で肅州に至りて回匪を伐ちしも馬四、白彥虎と善く拒ぎ閏六月激烈なる巷戰に於て徐占彪銃傷を負ふ。八月一二日（一一〇）左宗棠親ら肅州に赴き城南に陣して攻擊を督す。九月劉錦棠も亦來會し日々に降回馬福壽等をして馬を城下に馳せて告げしめて曰く死期將に近かんとす善く自ら謀る所あらんとせば馬四親ら出でて降れと。一五日（一〇四）馬四遂に出でて降る。二三日（一一〇二）馬四等八人の黨魁を刑し三發の號砲に應じて金順宋慶徐占彪劉錦棠等各〻分れて回徒七千人を屠殺し了る。惟り白彥虎遁れて關外に出でしのみ。肅州平ぎ隴、陝兩省平定せるを以て左宗棠以下の諸將を賞し劉松山の嗣子を男爵に封ず。

第五節　阿古柏・帕夏の割據

道光中張格爾侵入の事ありしより以來既に上巻に見ゆるが如く天山南路和卓木の爲に兵禍を蒙る事三回に及びしが敕罕王滿洲朝廷の和睦を主とするを思ひて敢て復た約の如く和卓木の監守を嚴にせず。故に咸豐五、六年の頃和卓木又數〻喀什噶爾回復を試み咸豐七年（一八五七）五月和卓木倭里罕遂に其意を達して喀什噶爾の回城に據る。乃ち先づ英吉沙爾を攻めて之を取り急に兵を移して喀什噶爾の漢城及び葉爾羌を圍み又兵を分ちて和闐及び阿克蘇を略せしめ軍務の事業大に進む。然れども更治其宜しきを得ず且つ倭里罕回彊の風俗を好まず土民をして皆敕罕風に倣はしむ土民之を嫌ふ。又性殘忍にして誅戮を好み多く無辜を殺し喀什噶爾

河岸に人の首を積みて其堆きを望むに至る。爲に人心益〻服せず難を諸方に避くるもの極めて多し。偶〻伊犂將軍扎拉芬泰の派遣せる參贊大臣法福禮の大軍來り伐つに遭ひ敖罕兵多く刃を交へずして退却す。倭里罕之を禁ずる能はず喀什噶爾を領する事僅に四箇月にして復敖罕に奔る。法福禮の八月三日一〇。を以て回城に入るや敖罕人は最早一の商人をも止めず。此役回疆より敖罕地方に移住ししもの凡そ一萬五千人に達ししといふ。倭里罕の兵亂は斯の如くにして容易に鎮定するを得しと雖も回疆の地數、和卓木の據る所となりしを以て回教徒等自ら自立の念を生じ新疆全部騷亂の機漸く熟す。而して其第五回の騷亂は却て他の方面より起れり。

新疆地方回教徒の定住するもの頗る多く其種族に愔蘭子（達蘭察）東干等の別あり。愔蘭子は重に伊犂地方に住し清國の同地を平定しし時南路より移住せしめしものなりと云ひ東干は重に新疆の東部より伊犂地方に住し唐代回鶻の子孫となす。蓋し新疆の東干は陝甘兩省の回教徒と同人種たり。同治三年（西紀一八六四）長毛賊徒將に平定せんとする時に當り其同胞に應じて遂に亂を謀る初め陝西の回徒阿渾妥明（一名安得璘）なるもの關を出でて烏魯木齊に至り參將索煥章の家に寄寓す。索煥章は前甘肅提督索文の子なるも素と異志を蓄へ妥明に師事ししを以て回徒間に於ける妥明の勢力頗る盛なり。此年春烏魯木齊の都統各州縣に軍資の義捐を求めしに綏來並に奇臺の知縣は之に應ぜざりしも廸化の知州之を諾す。茲に於て州役馬全及び昻戸馬八等都統の命を奉じて人民に向て誅求他くなきより漢民殊に憤り團練を結びて之に抵抗せんとす。馬全、馬八は東干に屬するを以て又回民を糾合して之に備へ四月漢民馬全と奇臺市に戰ふ。偶〻南路庫車の回徒相集まり黑山派の和卓木ブルガネヂンを推して長とし叛を謀る。提督聶布沖兵を遣して之を討ちしも標兵東干多きを以て喀喇沙爾に至りて敗れて歸る。六月一二日一七。索煥章遂に烏魯木齊に叛し手ら提督を殺して漢城に據り妥明を推して主となし親ら元帥と稱し書吏馬升を先鋒と爲し進みて滿城を圍み八月之を陷る。時に奇臺の捕役馬福等回徒を率ゐて縣城を陷れ更に綏來、昌吉、阜康の三縣並に吉木薩、古城等を下す。次で哈密、吐魯番、呼圖壁、庫爾喀喇烏蘇等皆東干叛徒の有に歸ししを以て妥明遂に自ら清眞王と號し索煥章をばその母が歸順を說くを聞きて其位地を降して吐

魯番を守らしめ馬升馬泰馬仲馬明馬官を元帥となす、而して南路に向ひし東干はブルガネヂンと共に此時已に喀喇沙爾阿克蘇烏什葉爾羌(六、二三、七、二六)等を陷ゐれ清兵僅に喀什噶爾英吉沙爾の漢城を保つ。

敖罕此機に乘じて利する所あらんと欲し張格爾の子和卓木布蘇格に小兵を授け阿古柏帕夏を以て其將となし進みて喀什噶爾に入らしむ喀什噶爾の回徒金相印等大に悅び迎へしかば布蘇格乃ち回城に入りて王位に卽き阿古柏帕夏を以て輔佐とし專ら軍務に任ぜしむ阿古柏帕夏は敖罕僧の子にしてブスケントに生れ幼にして父母を失ひバチャ(孌人)の群に入りしが塔什干の代官其妹を聘ししより其緣によりて漸く用ゐられ上卷第九章第七節に記ししが如く曾てアク・メチェチに於て露軍を防ぎて功あり名望日に高し自ら請ふて布蘇格に從ひて東征し茲に於て喀什噶爾王國の基を立てんと欲し直に兵を募て軍國の施設に從事す而して東干の與みし難きを看破し先づ新募の喀什噶爾兵に敖罕兵五百を交へて一軍となし布蘇格をして之を以て喀什噶爾の漢城を圍みて實地の訓練をなさしめ自ら餘兵を率ゐて英吉沙爾を略し直ちに葉爾羌の東干に向ひしが軍利あらずして退却す東干勢に乘じて喀什噶爾を奪はんとし助をブルガネヂンに求め大舉して來り侵ししが阿古柏帕夏之を迎へて大勝を博し軍威漸く振ふ既にして喀什噶爾の漢城又下る初め清兵死を決して城壘を保ちしも十四箇月の後防禦の術全く盡き守將親ら火を放ちて焚死し城遂に陷ゐる阿古柏帕夏乃ち兵を東に移して葉爾羌に向ふ偶ま其權を妬めるキプチャク種族等和卓木、倭里罕と竊に謀りて阿古柏帕夏を除かんとす阿古柏帕夏急に軍を廻し先づ反對黨を仆して內亂を定め次で瑪喇爾巴什廳を略して庫車葉爾羌の交通を斷ち三度葉爾羌を攻めて漸く之を取り又進みて和闐に逼る時に和闐はハビブラクと稱する老人を擧て四境善く治まるを以て阿古柏帕夏詐術を設けてハビブラクを招きて之を殺し其印を利用して城門を開かしめ遂に之を押領す。

阿古柏帕夏は回疆西四城悉く其有に歸し地位既に成るを知り喀什噶爾王布蘇格に勸めてメッカに參詣せしめ同治六年(四紀一八六七)人民をして己を推さしめて遂に喀什噶爾王位に卽き自ら畢調勒特汗と稱す布哈爾汗之を聞きてアタリク・ガジなる稱號を贈るアタリク・ガジとは不信者征討の叔父てふ義なり時にブルガネヂン庫

車にあり阿克蘇以東皆其命を奉ずるを以て阿古柏帕夏進みて阿古蘇を徇へブルガネヂンの遊へ戰ふに會ひて之を破りしかば庫車、庫爾勒喀喇沙爾の諸城戰はずして皆降る。乃ち妥明と昇を喀喇沙爾の東十二三里の點に遡して喀什噶爾に歸る。初め烏魯木齊の變起りしより北路の漢民は皆義勇兵を組織して屯田の側に倣ひしが廸化の徐學功最も勇略あり民兵五千人を擁す。阿古柏帕夏其名聲を聞き使を遣して和を約す。同治八年（西紀一八六九）妥明、烏魯木齊、吐魯番より七八千の兵を出し馬泰をして之に將として庫車を回復せしむ。阿古柏帕夏警を聞きて直ちに之に赴き連戰東干を破り勝に乘じて庫爾勒に至り潛に人をして馬仲を說かしめ吐魯番より共に妥明を攻めんとしが其降を乞ふに至りて之を許し馬仲を阿奇木克伯に任じて回務を統轄せしむ。然るに其後馬仲、徐學功と戰ひて仆れ其子馬人得代りて阿奇木伯克となりしも妥明と相容れず助を阿古柏帕夏に求む。茲に於て同治九年（西紀一八七〇）春阿古柏帕夏、徐學功と吐魯番を圍み、三度妥明の送れる援兵を擊退し閏八月遂に之を拔き更に一舉して東干の巢窟を覆へさんと欲し徐學功と共に進みて烏魯木齊を攻む。妥明、城を距る四十清里の地に出でて之を拒きしが大敗して元帥馬官之に死ししかば烏魯木齊を棄てて綏來に走り數日にして病死す。かくて昌吉綏來呼圖壁皆下りしを以て阿古柏帕夏は烏魯木齊に至りて其地を領す。初め阿古柏帕夏、徐學功の武勇を聞き之を介して清廷に通ずるの意ありしも其驍猛にして遠識なきを知るに及びて益〻之を輕んじ馬人をして阿奇木伯克の事を繼續せしむ。徐學功用ゐられざるを怒り馬隊を放ちて敖罕の商賈を苦めしかば阿古柏帕夏之を破りて一度喀什噶爾に歸り翌年春治府を阿克蘇に移して伊犂地方の動靜を伺ふ。

伊犂地方も同治四年（西紀一八六五）妥明先づ其黨を遣して諸城を陷ゐれ翌年ブルガネヂン伊犂大城を降し（正、二、二（西紀一八六六、三、九））搭爾巴哈臺も亦守を失ふ（二、二六（西紀一八六六、一、一））伊犂將軍明誼等城を枕にして仆る。後東干惰蘭子と戰ひて敗北し同治八年（西紀一八六九）惰蘭子の酋長アブドラ王位に卽き盡く伊犂地方を領す。是より先露兵の一隊は西伯利より進みて既に清兵と衝突し進みて博羅胡吉爾に據りしが他の一隊は更に東干の亂起るに乘じてテケス河の上流に出で木蘇爾特越に據りて天山南北路の交通を扼す。故に阿古柏帕夏は斥候を出して木蘇爾特越を遮えしめしが露兵の逐ふ所となりしを以て兵を阿克蘇に集めて進取の計を爲す。茲に於て露國先んじて伊犂を奪

はんとし名を邊境治安の維持に託し土耳其斯坦の總督に命して兵を伊犂に進めしむ。かくて將軍カルパコーフスキー同治一〇年（西紀一八七一）五月を以て兵六百を率ゐて博羅胡吉爾より進みて惰蘭子を破り其王アブドラ出で降るに及び伊犂地方を占領す。時に其一七日（七四）なり。同年冬露兵通商を名として烏魯木齊を奪はんとし綏來縣を距る八十清里の石河に至りしも徐學功の馬隊と戰ひて破れ以後敢て東進せず。阿古柏・帕夏伊犂の最早窺ふ可らざるを見て喀什噶爾に歸り四五年間内政の施設に從事す。時に天山南路全部及び北路の内烏魯木齊以西瑪納斯に至るまで皆其命を奉ず。初め阿古柏・帕夏の自立するや使節を印度太守ラウレンスの許に派して攻守同盟を結びて清露兩國に當らん事を提議ししにラウレンスは鄭重なる文書を以て來意を拒みしが其後英國政府阿古柏・帕夏の新建國をして露領と印度との間に介在せしむるを以て利益ありとなし印度太守メイヨ卿在職中阿古柏・帕夏の再び締盟の意を通ずるや卿はスア・ダグラス・フォルシスを使節として派遣し條約を締結せしむ。時に西紀一八七三年なり。其他阿古柏・帕夏は又使節を土耳古に派して獨立の承諾を得且つ同治一〇年（西紀一八七一）を以て露國と通商條約を締結す。

第六節　新疆の收復

同治一三年一二月五日（西紀一八七五、一一、二）帝痘を病みて殂す時に年僅に十九歲にして先に同治一一年九月一五日（西紀一八七二、一〇、一六）を以て翰林院侍講崇綺の女阿魯特氏を納れて皇后となししも未だ儲貳なし。皇叔醇親王奕譞の長子載湉咸豐帝の養子となり入りて大統を嗣ぐ親王の妃は慈禧皇太后の妹なるが故に此選を見るに至りしなりと云ふ。新帝は同治一〇年六月二八日（西紀一八七一、八、一四）の出生なれば時に年未だ五歲なるを以て慈安皇太后、慈禧皇太后と垂簾する事前朝の初年の如し。翌年を以て光緒と改元す。同治帝の皇后阿魯特氏は光緒元年二月二〇日（三、二七）を以て殂ししが其死因頗る疑はしとの說あり。然れども宮中の事其詳細は得て詳にし難きを以て更に前節の記事を繼續せんに是より先關内の回匪全く平定ししかば清廷は新疆回復の事業に着手し哈密大臣文麟・烏魯木齊都統景廉・徐學功等を擢用して大に努力する所ありしが戰ひ常に利あらずして功を奏するものなし。茲に於て遂に左宗棠をして其任に當らしむるに決し此年三月欽差大臣に任じて新疆の軍務を督辦せ

しめ金順を以て烏魯木齊都統となして之に副たらしむ。金順已に關外にあり五月古城に至る。所部の兵數合計四十餘營軍資年額銀二百六十四萬兩を要す。而して左宗棠の所部は馬步合計一百四十一營にして軍資年額銀六百十四萬兩を要す。光緒二年二月二一日（西紀一八七六、三、一六。）左宗棠蘭州省城を發して西征の途に上る。劉錦棠等の軍は已に先發せり然るに清廷衆議紛々遠征の經費莫大なるを思ひ南八城を棄てて阿古柏・帕夏を封じて外藩と爲すの說頗る有力なり英國公使ウェード（威妥瑪）も亦總理衙門に向て之を要求す。左宗棠上奏して曰く臣一介の書生にして高位顯爵を極む殊に年已に六十有五敢て功名の念なしと雖も今伊犂露の有となり阿古柏・帕夏、喀什噶爾に據る之を不問に附せば後患測り知る可らずと。

光緒二年閏五月劉錦棠巴里坤に至り進みて古城に據り兵を分ちて木壘河に屯せしめ敵情を偵察するに馬人得は烏魯木齊に據り白彥虎は紅廟子に據り馬明は古牧に據る。陝西の回酋白彥虎の關外に遁れし事は前々節の終に記ししが同治一二年四月安敦玉に於て金順の軍に破られし後遂に阿古柏・帕夏に降りしなり。古牧は烏魯木齊、紅廟子の藩籬をなし要地なるを以て白彥虎も亦大軍の至るを聞きて之に移り阿古柏・帕夏も亦阿托愛なるものをして騎兵を率ゐて之を助けしむ。六月劉錦棠金順と議して阜康城を根據となして進取の策を決し二〇日（八、九。）黃田を襲ひて其卡を拔き次で阿托愛の援軍を破り二八日（八、一七。）古牧に克ち城兵六千を屠る。烏魯木齊の守兵報を得て皆遁れ翌日劉錦棠遂に烏魯木齊迪化州及び僞王城に克つ。僞王城は妥明の築けるものなり。茲に於て昌吉・呼圖壁・瑪納斯北城の守兵皆城を棄てて遁れ阿古柏・帕夏の派遣せる五千騎の援兵も烏魯木齊を去る二百清里の達板に至りて敢て進まず。新疆北路略ぼ定まり瑪納斯南城の未だ克復せざるあるのみ。七月左宗棠命を劉錦棠に下して哈密に駐屯せる張曜と共に南路を伐たしむ。阿古柏・帕夏、托克遜に據りて三城を築きて自ら衛る。托克遜は噶孫營なり。南、吐魯番を守りて張曜を拒ぎ北、達板を守りて劉錦棠を拒ぐ。而して烏魯木齊の敗兵悉く達板に集まり白彥虎等托克遜に入る。時に金順、瑪納斯南城を攻めて久しく下らざりしかば八月劉錦棠兵を分ちて之を援ふ。かくて一〇月二日（一一、一八。）に至り瑪納斯南城遂に降る乃ち清眞王、妥明の屍を掘りて之を戮し元帥海玉、馬受、馬有才等を虜にす。提督馬玉昆が勇戰して其名を著はしし此城の攻擊中の事なりと云ふ。既にして大雪、山